

アラビアンナイト&
フランダーズの犬

はじめに

さて、今回の作品の『アラビアンナイト&フランダーズの犬』というのは、次のような内容であり、まず、最初の「アラビアンナイト」（千夜一夜物語）という作品ですが、この作品は、実に多種多様な「物語」に充ち満ちた作品であり、その中^{なか}でも、特に有名な「アリババと四十人の盗賊」と「アラジンと魔法のランプ」それに「シンドバッドの冒険」という三作品であり、それに「美女と野獣」という作品を加えたものですが、これらの作品の元々の「内容」は、一体、どういうものであったのか？ われわれはその詳しい内容はあまり知らないことが多く、多くの場合、例えば、有名なディズニーの映画（アニメ）などをはじめ、最近では、実に多彩な「絵本やアニメ或いは動画その他」などで見聞きすることで知っていて、その「本文」の文章を一字一句丁寧に読み^{たど}進めることは極めて少ないのではないかと思う。それは、最後の「フランダーズの犬」という作品でも、テレビの「アニメ」で観た人の数は、実に数多くいるかと思うが、それを「本文」の文章で一つ一つの内容を確かめながら丁寧に読み進むことは極めて少ないのではないのでしょうか。そこで今回も誰もがよくご存知の有名な「作品」を「本文」で丁寧に読み^{たど}進めてその「内容」を見極めるといふ試みであり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

- 一、 アリババと四十人の盗賊
 - 二、 アラジンと魔法のランプ
 - 三、 シンドバットの冒険
 - 四、 美女と野獣
 - 五、 フランダースの犬
- ※ 参考文献

アラビアンサイト

アリババと四十人の盗賊

一、アリババの生活状況

昔、ペルシヤのある町に、二人の「兄弟」が住んでいました。兄の名は、「カシム」と言い、弟の名は、「アリババ」と言いました。お父さんがなくなる時に、兄弟二人に「財産」を半分ずつ分けてくれたので、二人は、同じような「財産」を持っていました。

さて、兄の「カシム」は、お金持ちのお嬢さんをお嫁さんにももらいました。一方、アリババは、貧乏な娘をお上さんにももらいました。お金持のお嬢さんをもらったカシムは、毎日ぶらぶら遊んで暮らしていましたが、その反対に、アリババは、毎日せつせと働かなくてはなりません。毎朝、早くから三匹の「驢馬」を引いて森へ出かけて行き、木を切つては、それを町へ持って帰つては売り、その「お金」でやつとその日その日を暮らして行くという有様でした。

二、偶然、盗賊たちに遭う

ある日のこと、アリババがいつものように森へ行って木を切っていると、遙か向こうの方に真つ黒い砂煙がもうもうと立っているのが見えました。その砂煙は、見る間にこちらへ近づいて来ましたが、見れば、それはたくさんの人が馬に乗つて、急いで駆けて来るのでした。「……きつと泥棒に違いない」と、アリババは、震えながら三匹の驢馬を隠して、自分はそばの木に登りました。そして、こわごわ様子を見ていました。

アリババの登った木の下まで来ると、泥棒たちは、みんな馬から飛び降りました。鞍に付けてあった袋も降ろしました。そして、その泥棒たちの頭らしい男が、木のそばにある岩の上に登って行きました。そしていきなり、「……開け、ごま」と、大きな声で叫びました。すると、どうでしょう。その岩がぱつと二つに割れました。中には重そうな戸が閉まっているのが見えました。やがて、その戸も見る見るうちにすうーと開いて行きました。そして、泥棒たちがその戸の中へどかどか入って行くと、音もなく戸が閉まってしまうのでした。

やがてまもなく、泥棒たちは出て来ました。さっきの頭が、また、(今度は)「……閉まれ、ごま」と、叫びました。すると、戸はすうーと閉まってしまい、岩も元の岩になつてしまいました。泥棒たちはまたどこかへと去って行くのでした。

三、ほら穴から金貨を……

さて、アリババは、木から降りた後で、さっき泥棒の頭が言った「不思議な言葉」を覚えていたものですから、岩の上へ登つて、「……開け、ごま」と、怒鳴つてみました。すると、やつぱり岩が割れて、さっきの戸が開くのでした。アリババは、中へ入つて行くと、その中は大きなほら穴でした。立派な宝物や金貨や銀貨を詰め込んだ大きな袋が、隅から隅までぎっしりと積み重ねてありました。これだけのものを集めるには、まあ何年かかつたことだろうと、アリババは思いました。そして恐る恐る金貨を詰め込んだ袋ばかり

を六つ取り出しては、それを手早く三匹の驢馬に積んで、その上に金貨の袋が隠れるほど切った木を積み重ねました。それから、「……閉まれ、ごま」と、大きな声で叫ぶと、戸は、再び、閉まって、岩には跡形もなくなりました。

四、家へと帰ると

さて、アリババが家へと帰って来ると、お上さんは、金貨の袋を見て、大変に悲しうな、恐いような顔をして、アリババに泣きつきました。「……まあ、お前さん、もしかしたらこれは？……」とまで言つて、それから先は、もう声が出ない様子でした。するとアリババは、落ちつき払つて、「……安心おしよ。なんで私が泥棒なんかするものかね。そりゃ、この袋は、もともと誰かが盗んだものには違いないがね」と言い、それから、金貨の袋を見つけた一部始終を話して聞かせるのでした。

それを聞いて、貧乏なこのお上さんは、大変喜びました。そして、アリババが袋から掴み出す金貨を、「……一枚、二枚」と数え始めました。そのうちにアリババが、ふと気がついたように顔を上げて、「……そんな数え方をするのは馬鹿だね。そんなことをしていたら、みんな数えてしまうには何週間かかるか分かりやあしないよ。いっそこれは、このまま庭へ穴を掘って埋めようじゃないか」と言うと、お上さんは、「……でも、私たちがどれほどのお金持になつたのか、知つておいた方がよいでしょうよ」と、そう言つて、反対しました。そして、「……私はこれからカシム兄さんのところへ行つて、ますを借りて来ますよ。そのますで、私がこの金貨をはかつている間に、お前さんが穴を掘つたらいいじゃありませんか」と言うのでした。そして、お上さんは、カシムの家へ出かけて行くのでした。

五、ますを借りに……

カシムの家では、ちょうどカシムが留守をしていたので、兄のお上さんに、「……姉さん、すみませんが、ますを貸してください」と頼むと、「……すぐに返しに来るなら、貸して上げてもいいよ」と、カシムのお上さんは、無愛想な顔をしてこう答えるのでした。そして、どうしてアリババの家でますがいるのか、不思議に思つたものですから、ますの底に少しばかりラード（ぶたの油）を塗つて貸してやりました。こうしておけば、このますで何をはかるにしろ、底にくっついて返つて来るに違いないと、そう考えたからです。アリババのお上さんは、ますを借りて、大急ぎで帰つて来ました。そして金貨をはかつてしまうと、また大急ぎで返しに行きました。けれども、ますの底に、一枚の金貨がくっ付いていたことには、ちっとも気がつきませんでした。「……まあ、何てことだろう。アリババの家では、あんまりお金がどっさり入つたので、数えきれないで、ますではかつたんだね」と、カシムのお上さんは、金貨を見つけて、忌々しそうに怒鳴るのでした。

六、兄は弟の所へ

さて、カシムが帰つて来て、この話を聞いて、もっともつと怒りました。そしてすぐに、

アリババの家へ出かけて行きました。「……何だってお前は隠すんだね。私の家内は、お前が数えきれないほどたくさんのお金を手に入れたので、まずではかっただってことを、ちやあんと嗅ぎつけてるんだよ。さあどうして、そんなにたくさんのお金をこしらえたのか、白状しろ」と、アリババに叱るよう言うのでした。

アリババは、せっかく隠していたことを知られてしまい、がっかりしました。仕方がないので、兄さんには何もかも話してしまい、そして、「……きつと誰にも言わないでくださいよ」と言いながら、あの「開け、ごま」や「閉まれ、ごま」という言葉までも教えてしまうのでした。

七、兄は森の岩場へ

カシムは、自分の家へ帰って来て、十二匹の驢馬を馬屋から引き出しました。そして、それを引いて森の岩をさして出かけました。岩の前まで来た時に、驢馬をそばの木にたないでおいでから、「……開け、ごま」と、言いました。すると、すぐに岩が割れて、あの不思議な戸が開くのでした。

もともとカシムは、大変な欲張り屋でした。それで泥棒たちの宝物を見ては、跳び上るほど喜ぶのでした。そして、金貨の入っている大きめの袋を選んで、それを二十四袋も、戸のところまで引きずり出して来ました。そして、「……開け、大麦」と、叫びましたが、しかし、どうしたことでしょう、戸は閉まったままでした。兄はあわてて、「……開け、あずき」と、言ってみましたが、やっぱり戸は開きませんでした。それから、もうますます慌てて、「……開け、小麦」だの、「……開け、あわ」だのと、覚えている限りの穀物の名を言ってみましたが、やっぱりだめでした。戸はちっとも開きませんでした。兄は、「ごま」をすっかり忘れていたのです。

八、泥棒が帰って来て

ちょうどその時、泥棒たちが馬に乗って帰って来ました。そして、頭が、「……開け、ごま」と叫んで、ほら穴の中へと入って来て、そこにカシムと引きずり出した金貨の袋を見つけてしまうと、泥棒たちは、自分たちの、人に隠していたお倉を見つけられたので、非常に腹を立てるのです。そして、いきなりカシムを捕まえては切り殺して、からだの肉を切り刻んでしまいました。そして、ここへ誰であれ、金貨を盗みなどに来ないよう、カシムの肉の切れを一つ一つほら穴の中へ吊るすのでした。

カシムのお上さんは、夜になってもカシムが帰って来ないので、大変心配をして、アリババの家へ行って、カシムを捜しに行ってくれるよう頼みました。そこでアリババは、翌朝早く、三匹の驢馬を引いて、ほら穴へ向けて出かけました。

さて、アリババは、「……開け、ごま」と、そう言って中へ入って行きましたが、入るとすぐに、恐怖で縮み上ってしまいました。兄さんが殺されて、切り刻まれていたからです。アリババは、震えながら、兄さんの切り刻まれた肉を一切れずつ丁寧に寄せ集めて、二匹の驢馬に積みました。そして、あとの一匹は、強い小さな黒馬でしたが、これには金貨の袋を二つ積むのでした。

九、兄の家に行く

アリババは、町へ帰って来て、まずカシムの家の戸を叩きました。すると、モルジアナという女奴隷が出て来ました。この女は、カシムの召使の中でも一番利口者でしたが、そこで、アリババは、モルジアナを招いて、その耳に口をあてて、「……お前のご主人様は、泥棒に切り刻まれて殺されてしまったのだよ。けれども、誰もまだこのことを知っている人はいないのだからね、お前、これを誰にも知らせないで済ますような工夫をしてくれ」と、頼むのです。

それから、アリババは、家の中へ入って行って、カシムのお上さんにいきい話をして聞かせました。「……決して悲しんではいけませんよ。これからは私たちと一緒に暮らしましょう。私たちの宝物も分けて上げましょう。私たちはよく気をつけて、このことを人に悟られないようにしなければなりません」と、お互いに約束し合いました。それから、切り刻まれた可哀なカシムを驢馬から下ろして、隣り近所の人々には、夕べ急病で亡くなったと言うことにしたのです。

十、靴屋に頼み事を

モルジアナは、だいぶ離れた町の、おじいさんの靴屋をたずねて行きました。そして、針と糸を持って自分と一緒に来て下さい、と頼みました。それから、「……お前さんに頼みたい仕事というのは、どうしても人に知られてはならないことだからね、気の毒だけれど、お前さんには目隠しをしてもらい、その家まで私が手を引いて行きますので」と、言うのでした。

おじいさんの靴屋は、初めは嫌だと言いましたが、モルジアナが金貨を一枚そつとその手に握らせると、すぐ承知しました。モルジアナは、この靴屋を連れて帰って来て、切り刻まれた主人の肉を縫い合わせるように言いつけると、靴屋は、誰の目にも縫い合わせたいとは思えないほど格好良く継ぎ合わせるのです。それからモルジアナはまた、靴屋に目隠しをして、その店まで連れて行くのでした。

こんなふうにして、カシムが殺されたことは、誰にも知られないで済みそうでした。そして、アリババとそのお上さんとは、カシムの家に引越して行って、みんなで一緒に暮らすことになったのです。

十一、その後の泥棒たちは……

その後、泥棒たちは、あのほら穴へ帰って、カシムからだだと金貨の袋が、また二つもなくなくなっているのに気がつき、大変に怒りました。「……もう一人、おれたちのお倉を知っているやつがいるんだな、そいつをすぐに見つけ出さなきゃならない」と叫ぶのです。そして、仲間の一人が泥棒でないような風をして町へ行って、あの切り刻んだからだを盗んで行ったやつを、見つけて来ることにしようかと相談が決まりました。

さて、翌る朝、泥棒の一人がとても早くから町へやって来ました。その時分は、カシム

のからだを縫い合わせたおじいさんの靴屋の店は、もう戸を開けていました。「……お早う、おじいさん。大変御精が出ますね。ほう、お前さん、こんなに早くから仕事を始めるんですか。ふむ、だが、お前さんの目がこんな薄明かりで見えるんですかねえ」と、泥棒は、さも馴れ馴れしく声を掛けました。すると、靴屋は、「……どうしてどうして、あつしの目はね、若い者だつてかなやあしんんですよ。げんに、たった昨日のことですがね、あつしやあ、切り刻んだ人間の死骸を縫い合わせましたよ。それがお前さん、誰が見たって縫い目なんかちつとも分からないように、うまく出来たんですよ」と答えるのでした。

それを聞いて、泥棒はしめたと思い、そして、「……え？ そりゃ本当ですか。そして、そりゃ、どこの、だ、だれのです」と、聞き返すと、「……それがね、あつしにだつて分からないんです。なぜかって、あつしやあ、目隠しをして、その家へ連れて行かれて、また同じようにして、連れて帰ってもらったんですから」と、靴屋が言うのでした。

すると、泥棒は、金貨を一枚、そつと靴屋に握らせました。そして、その家へ連れて行ってくれないかと頼むのでした。「……お前さんにまた目隠しをして、私が手を引いて行ったら、おおよその見当は付くでしょう。もしその家が見つかったら、もつとお金をあげますよ」と言うのでした。——そこで、とうとう靴屋は、承知しました。そして、目隠しをされて、そろそろ歩きながら、カシムの家の前まで来た時、ぴたりと止まりました。そして、「……ここに違いありません。このくらいの遠さだったと思います」と言うと、泥棒はポケットからチョークを出して、カシムの家の戸に白い目印を付けました。そして大元気で、森の仲間のところへ帰って行くのでした。

十二、戸に白い目印が

それからまもなく、モルジアナは、この変な目印を見つけました。これは、きつと旦那様に、悪いことをしようとする者が付けた印に違いない、とモルジアナは思いました。そこで、チョークを取って来て、町中のどの家の戸にも、みんな同じような印を付けて、歩きまわりました。

さて、泥棒たちは、町へ行った仲間から、あの切り刻んだ人間の家が分かったということを知り、大変喜びました。そして、その晩、戸に白い目印の付いている家をさして、敵討ちに出かけました。けれども、町まで押しかけて来た時に、どの家の戸にも同じ目印が付いているので、どれが目ざす家か皆目知れませんでした。「……馬鹿め、これが利口な人間のすることか。お前は、すぐに殺してやるから待っている」と、頭は、今朝、見つけて来た泥棒を、こう言って叱りつけました。それから、「……仕方がない、泥棒の家は、俺が探すことにしよう」と言うのでした。

十三、頭一人で町に行く

次の日、頭は、ふつうの人のような風をして、靴屋の店へ行つて、カシムの家を教えてもらいました。けれども、この頭は、利口者ですから、チョークで印を付けたりなんかはしませんでした。気をつけてカシムの家を見て、しっかりと覚え込んでおいて、晩の敵討ちの用意をしに、森へ帰りました。そして、まず初めに、驢馬を二十四匹と大きな瓶を三

十九個持ち出しました。そして、たった一つの瓶には油をなみなみと注ぎ込んだきりで、ほかの瓶には一人ずつ泥棒を入れるのでした。そして、この瓶を驢馬に乘せて、町へ出かけました。そして、カシムの家の前まで来ますと、アリババは、ちょうど外へ出て夕涼みをしているところでした。

そこで、「……今晚は」と、頭は丁寧にお辞儀をして、「……私は遠方から参った油商人ですが、今晚泊めて頂けないでしょうか。そして、この油瓶をお庭の隅にでも置かせて頂けたら、大変都合がよいのですが」と、頼みました。「……ああ、よろしいとも。さあ、お入んなさい、さあ、さあ」と、すぐにアリババは、機嫌よく承知しました。そして門を開けて、驢馬を庭の中へ入れさせました。それから召使のモルジアナに、お客様に御馳走をして上げるように、と言いつけるのでした。

頭は、驢馬の背中から瓶を庭へ下ろしながら、中にいる一人一人の泥棒に自分が庭へ小石を投げたら、それを合図に瓶のふたを破って出て来いと告げました。泥棒たちは、狭い瓶の中でじつと辛抱しながら、合図があるのを今か今かと待っていました。

十四、瓶の中身を知る

さて、台所では、モルジアナが夕飯の支度にてんてこ舞いをしていました。ところが、その忙しい真つ最中にランプがふつと消えてしまいました。あいにく家に油が切れていましたので、あの庭にあるたぐさんの大きな瓶から少しぐらいもらったついでいいだろう、と思って、ランプを持って庭へ出て行きました。そして、一番手近の瓶のそばまで行きますと、中から、「……もう、出る時分ですか」と、しゃがれた声が聞えました。モルジアナは、吃驚しましたが、利口者のことですから、落ちついた声で、「……まだ、まだ」と、そう言つて、次の瓶のそばへ行きました。その瓶の中からも同じようなことを尋ねました。モルジアナは、次から次と行きました。すると、どの瓶からもどの瓶からも同じようなことを尋ねました。モルジアナは、どれにも同じように、「……まだ、まだ」と言つておきました。そして一番おしまい瓶の瓶にだけ、本当の油が並々と入っていたのでした。「……ああ、まあ、何て不思議な油商人なんだろう。全く呆れてしまうわ。だが、これはきつと旦那様を殺すつもりに違いない」と、モルジアナは、このままうっかりしては大変だと思ふのでした。

十五、策を講じる

そこで、すぐに大きな壺を持って来て、一番おしまい瓶から油を汲み出して、それを火の上にかかけました。そして、油が煮え立つのを待つて、それを泥棒たちの隠れている瓶の中へ次々と注いで歩きました。それで泥棒たちは、みんな殺されてしまいました。

こんなふうにしたものですから、頭が庭をめぐけて小石を投げた時には、泥棒は一人だつて出て来ませんでした。そこで、頭が庭へ出て、瓶の中を覗いてみると、泥棒たちは、みんな死んでいたのです。せつかくの「敵討ち」は、すっかりあべこべになつてしまひ、頭は、ほうほうのていで森へと逃げて帰るのでした。

翌る朝、モルジアナは、アリババを庭へ連れ出して、瓶の中を覗かせました。アリババ

は、中に人がいるのを見て跳び上るほど驚きました。けれども、モルジアナが手つとり早くすっかり話をして聞かせましたので、泥棒は、みんな死んでしまっているのだということが分かりました。アリババは、こんな大きな災難から逃れたことが分かって、大変喜びました。そして、モルジアナに、「……ありがとう、本当にありがとう。もうお前は奴隷を止めてもいい。お前を自由な身にしてあげよう。また、そのほかにご褒美もあげよう」と言うのでした。

十六、泥棒の頭は……

さて、泥棒の頭は、手下が一人もいなくなったので、森のほら穴でただ一人大層寂しく、また悲しい月日を送っていました。けれども、アリババへ敵討ちをすることは、前よりももっともつと熱心に考えていました。そして、またある一つの方法を考えつきました。そして、さつそく大きな商人のような顔をして、アリババの息子の店のお向いに店を出したのでした。

この大商人は、大層金持で、しかも大層親切でしたから、アリババの息子は、すぐにこの人を好きになりました。それで、お近づきのしるしとして、お父さんの家の晩ご飯に呼ぶことにしました。しかし、この偽の商人は、アリババの家へ行った時に、アリババに向つて、「……あなたとご一緒にご飯を頂きたいのは山々ですが、実は私は、神様に塩を食べませんとお約束している身なのです。それで、家でも特別にいつも塩抜き料理をさせているような次第で、どうかあしからず」と言つて、ご飯を食べることを断りました。すると、アリババは、「……まあ、そんなことなら造作もないことですよ。今晚は、一切、塩を入れないように申しつけますから」と言つて、引き留めました。

モルジアナは、この言いつけを聞いた時、少し変だなと思ひました。それで、お給仕に出た時、お客様をよく気をつけて見てみると、どうでしょう、そのお客様は、泥棒の頭であり、しかも、袖の中に短刀を隠し持っているのが分かりました。モルジアナは、驚いてしまい、「……ふん、敵と一緒に塩を食べないのは不思議じゃない」と、モルジアナは、心の内で呟きました。ペルシャには、こういう迷信があるのです。

モルジアナは、すぐに自分の部屋へ戻つて来て、踊り子の着る着物を着ました。そして、晩ご飯が終つた頃を見計らつて、短刀を片手に握つて、お客様の座敷へ踊りを踊りに出ました。モルジアナは、大層上手に踊つて、みんなに喝采されました。偽の商人は、財布から金貨を一枚出して、モルジアナのタンポリン（手鼓）の中へ入れました。その時、モルジアナは、片手に持つていた短刀をやにわに商人の胸に突き刺しました。「……ふとどき者め、お客様をどうしようというのだ」と、アリババが叱りつけました。すると、モルジアナは落ちついて、「……いいえ、私はあなたの命をお助けしたのでございます。これを御覧下さいまし」と言つて、商人が袖の中に隠していた短刀を取り出して見せました。そして、この商人が、ほんとうは何者であつたかということを申し述べるのでした。

十七、モルジアナを息子の嫁に、

それを聞くと、アリババは、ありがた涙にくれて、モルジアナを抱き締めました。そ

して、「……お前はわしの息子のお嫁さんになっておくれ、そしてわしの娘になっておくれ、それがわしに出来る一番の恩返しだ」と言うのでした。

さて、それからずいぶん後までも、アリババは、怖がって、あの不思議なほら穴へ行って見ようとはしませんでした。しかし、ある年の末、もう一度行って見ますと、泥棒たちが死んでからは、そのほら穴にはもう誰も来ないらしく、中は昔のままでした。それでもう恐い者が一人もいなくなっただけが分かりました。

それから後は、「……開け、ごま」と、アリババが「魔法の言葉」を唱えさえすれば、あの不思議な戸がすうーっと開いて、穴の中には、持ち出しても持ち出しても尽きることはないほどの宝があるのです。それで、アリババは、国じゅうで並ぶ者もないほどの大金持になったということです。(完)

*

*

アラジンと魔法のランプ

アラジンと魔法のランプ

一、アラジンの生活

昔、しなの都に、ムスタフという貧乏な仕立屋が住んでいました。このムスタフには、おかみさんと「アラジン」と呼ぶ、たった一人の息子とがありました。

この仕立屋は大変に心がけのよい人で、一生懸命に働きました。けれども、悲しいことには、息子が大の怠け者で、年が年じゅう町へ行つて、怠け者の子供たちと遊び暮らしていました。何か仕事を覚えなければならぬ年頃になつても、そんなことは真つ平だと言つてはねつけますので、本当にこの子のことをどうしたらいいのか、両親も途方に暮れている有様でした。

それでも、お父さんのムスタフは、せめて仕立屋にでもしようと思ひました。それである日、アラジンを仕事場へ連れて入つて、仕立物を教えようと思ひましたが、アラジンは、馬鹿にして笑つてゐるばかりでした。そして、お父さんの油断を見すまして、いち早く逃げ出してしまいました。お父さんとお母さんは、すぐに追つかけて出たのですけれど、アラジンの走り方があんまり早いので、もうどこへ行つたのか、かいても姿も見えませんでした。「……ああ、わしには、この怠け者をどうすることも出来ないのか」と、ムスタフは、嘆きました。そして、まもなく子供のことを心配するあまり、病氣になつて、死んでしまいました。こうなると、アラジンのお母さんは、少しばかりあつた仕立物に使う道具を売り払つて、それから後は、糸を紡いで暮らしを立てていました。

二、一人の魔法使いと出遭う

さて、ある日、アラジンが、いつものように町の怠け者と一緒にめんこをして遊んでいました。ところがそこへ、いつのまにか背の高い、色の黒いおじいさんがやつて来て、じつとアラジンを見つめていました。やがて、めんこが一勝負終つた時、そのおじいさんがアラジンに「……おいで、おいで」をしました。そして、「……お前の名は何と言うのかね」と、尋ねました。この人は大変に親切そうなふうをしていましたが、ほんとうは、アフリカの「魔法使い」でした。「……私の名はアラジンです」と、アラジンは、このおじいさんは一体誰だろうと思ひながら、こう答えました。「……それから、お前のお父さんの名は」と、また、魔法使いが聞きました。「……お父さんの名はムスタフと言つて、仕立屋でした。でも、とつくの昔に死にましたよ」と、アラジンは答えました。すると、この悪者の魔法使いは、「……ああ、それは私の弟だ。お前は、まあ、私の甥だったんだね。私は、しばらく外国へ行つていたお前の伯父さんなんだよ」と言つて、いきなりアラジンを抱き締めました。そして、「……早く家へ歸つて、お母さんに私がいに行きますからと言つておくれ。それからほんの少しですが、と言つて、これをあげておくれ」と言つて、アラジンの手に金貨を五枚握らせました。

アラジンは、大急ぎで家へ歸つて、お母さんにこの伯父さんだという人の話をしました。すると、お母さんは、「……そりゃあ、きつと何かの間違いだろう。お前に伯父さんなんかありやあしないよ」と言うのでした。しかし、お母さんは、その人がくれたという金貨

を見て、ひよっとしたら、その伯父さんは、親類の人かも知れないと思いました。それで、出来る限りのご馳走をして、その人が来るのを待っていました。

三、魔法使いが家に来る

まもなくアフリカの魔法使いは、いろいろ珍しい果物や美味しいお菓子をどっさりお土産に持って、やって来ました。「……亡くなった可哀そうな弟の話をしてください。いつも弟はどこに腰掛けていたか教えてください」と、魔法使いは、お母さんとアラジンに聞きました。お母さんは、いつもムスタフが腰掛けていた長椅子を教えてやりました。すると、魔法使いは、その前に跪いて、泣きながらその長椅子にキッスしました。それで、お母さんは、この男は亡くなった主人の兄さんに違いないと思うようになりました。ことに、この魔法使いがアラジンをなめるように可愛がるのを見て、なおさらそうと決めてしまったのでした。「……何か、仕事をしているかね」と、魔法使いがアラジンに尋ねると、「……まあ、本当にお恥ずかしいことですわ。この子は、しょっちゅう町へ行って、遊んでばかりいまして、まだ何にもしていないのですよ」と、お母さんが手をもみながら、そう答えるのでした。

アラジンは、伯父さんだという人がじつと自分を見つめているので、恥ずかしそうに俯いていました。「……何か仕事をしなきゃあいきませんな」と、魔法使いは、こうお母さんに言うておいて、さて、今度はアラジンに、「……お前はいったいどんな商売がしたいのかね。私はお前に呉服店を出させてあげようと思っっているのだが」と言うのでした。アラジンは、これを聞くと、有頂天になって喜びました。

四、二人で出掛ける

翌る日、伯父さんだという人は、アラジンに立派な着物を一揃い買って来てくれました。アラジンは、それを着て、この伯父さんだという人に連れられて、町じゅうを見物して歩きました。その次の日もまた、魔法使いは、アラジンを連れ出しました。そして、今度は美しい花園の中を通り抜けて、田舎へ出ました。二人は随分歩きました。アラジンは、そろそろ草臥れ始めました。けれども、魔法使いが美味しいお菓子や果物をくれたり、珍しい話を次から次と話して聞かせてくれたりするものですから、大して草臥れもしませんでした。そんなにして、とうとう二人は山と山との間の深い谷まで来てしまいました。そこでやっと魔法使いが足を止めました。「……ああ、とうとうやって来たな。まず、たき火をしようじゃあないか。枯れ枝を少し拾って来ておくれ」と、アラジンに言いました。

アラジンは、さっそく枯れ枝を拾いに行きました。そして、すぐ両手に一杯抱えて帰って来ました。魔法使いは、それに火をつけました。枯れ枝は、どんどん燃え始めました。伯父さんは、不思議な粉をポケットから出して、それから、口の中で何かぶつぶつ言いながら火の上に振りかけました。すると、たちまち大地が揺れ始めました。そして、目の前の地面がぱつと割れて、大きなまっ四角な平たい石が現われて来るのでした。その石の上には、輪がはまっていました。

五、石の下へと……

アラジンは、怖がって、家へ走って帰ろうとしましたが、魔法使いはそうはさせませんでした。アラジンの襟髪を掴んで引き戻しました。「……伯父さん、どうしてこんな酷いことをするんです」と、アラジンは泣きじやくりながら見上げますと、「……黙って、私の言う通りにすればいい。この石の下には宝物があるのだ。それをお前に分けてやろうと言うのだよ。だから私の言う通りにおし。すぐに出て来るからな」と、魔法使いは言うのでした。

アラジンは、宝物と聞くと、今までの怖さはすっかり忘れて喜んでしまいました。そして、魔法使いの言う通りに石の上の輪に手をかけると、石は造作なく持ち上がりました。「……アラジンや、ごらん。そこに下へ降りて行く石段が見えるだろう。お前がその石段を降りきるとね、大広間が三つ並んでいるんだよ。その大広間を通って行くのだが、その時、外套が壁に触らないように気を付けなきゃいけないよ。もし触ったが最後、お前はすぐに死んでしまうからね。そうして、その大広間を通り抜けると、果物島があるのだよ。その中をまた通り過ぎると、突き当たりに穴ぐらがある。その中に一つのランプが灯っているからね、そのランプを下ろして、中の油を捨てて持ってお帰り」と、魔法使いはこう言いながら、お守りだと言って、魔法の指輪をアラジンの指に嵌めてくれました。そして、すぐに出かけるようにと命令するのでした。

六、洞窟の中の様子は

アラジンは、魔法使いの言った通りに降りて行きました。何もかも魔法使いが言った通りのものがありました。アラジンは、三つの大広間と果物島を通り抜けて、ランプのあるところまで来ました。そこで、ランプを取って油を捨てて、大事に懐にしまってから、あたりを見まわしました。

アラジンは、夢にさえこんな見事な果物島は見たことがありませんでした。生っている果物がいろいろ様々の美しい色をしていて、まるでそこら一面に虹が立ち籠めたように見えるのです。透き通った水晶のようなものもありました。真っ赤な色をしていて、ぱちぱちと火花を散らしているものもありました。そのほか緑、青、紫、橙色などで、葉はみんな金と銀とで出来ていました。この果物は、本当はダイヤモンドや、ルビーや、エメラルドや、サファイヤなどという宝石だったのですが、アラジンには気がつきませんでした。けれども、あんまり見事だったものですから、帰りにこの果物を取って、ポケットに入れておきました。

アラジンがやっと石段の下まで辿り着いた時、地の上では魔法使いが一心に下の方を見つめて待っていました。そしてアラジンが石段を上がりかけると、「……早く、ランプをおよこし」と言って、手を伸ばしました。「……私が持つて出るまで待つてくださいな。出たらすぐに上げますから。ここからじゃ届かないんですもの」と、アラジンは答えました。「……もつと手を持ち上げたら届くじゃないか。さあ、早くさ」と、伯父さんは、怒った顔をして怒鳴りつけました。「……すっかり外へ出てから渡しますよ」と、アラジンは同じようなことを言いました。

すると、魔法使いは、はがゆがって地団駄を踏みました。そして、不思議な粉をたき火の中へ投げ込みました。口の中で何かぶつぶつ言いながら。そうすると、たちまち石がずるずると蓋をしてしまい、地面の上へと帰る道が塞がってしまいました。アラジンは、まっ暗な地の下へ閉じ込められてしまったのです。

七、洞窟の中に閉じ込められて

これで、このおじさんは、アラジンの伯父さんではないことが分かりました。この魔法使いは、魔法の力によって、遠いアフリカでこのランプのことを嗅ぎつけたのでした。このランプは。大変不思議なランプなのです。そのことは、読んで行くに従って、だんだん皆さんに分かって来るでしょう。しかし、この魔法使いは、自分でこのランプを取りに行くことは出来なかったのです。誰か他の人が取って来てやらなければ、だめなのでした。それで、アラジンに付きまどったわけです。そして、ランプさえ手に入ったら、アラジンを殺してしまおうと思っていたのです。

けれども、すっかりあてが外れてしまいましたので、魔法使いはアフリカへ帰ってしまいました。そして長い長い間、しなへは、やって来ませんでした。

さて、地の下へ閉じ込められたアラジンは、どこか逃げ道はないかと、あの大広間や果物島の方へ行つて見ましたが、地面の上へ帰って行く道はどこにもありませんでした。二日の間アラジンは泣き暮らしました。そして、どうしても地の下で死んでしまわなきゃならないのだと思いました。そして、両方の手をしっかりと握り合わせました。その時、魔法使いが嵌めてくれた指輪に触ったのでした。

すると、たちまち大きなお化けが、床からむくむくと現われ出て、アラジンの前に立ちはだかるのでした。そして、「……坊ちゃん、何かご用でございますか。私は、その指輪の家来でございます。ですから、その指輪を嵌めていらっしゃる方のおっしゃる通りに、しなければなりません」と言います。アラジンは、跳び上るほど喜びました。そして、「……私の言うことなら、どんなことでも聞いてくれるんだね。よし、じや、こんな恐ろしいところからすぐ連れ出してくれ」と、こう頼むのでした。

そうすると、すぐに地面へ上る道が開きました。そして、あつという間に、もう自分の家の戸口まで帰っていました。お母さんがアラジンが帰ったので、涙を流して喜びました。アラジンもお母さんに抱きついて、何度も何度も接吻をしました。それから、お母さんにこの間からの一部始終を話そうとしましたが、お腹がペこペこでした。「……お母さん、何か食べさせて下さいな。私はお腹がペこペこで死にそうなんです」と、アラジンが言うと、お母さんは、「……ああ、そうだろうとも、ねえ。だが困ったよ、もう家の中には少しぼっちの綿よりほかには何にもないんだよ。ちよっとお待ち、この綿を売りに行って、そのお金で何か買って来てあげよう」と言うのでした。

八、ランプから魔神の登場

すると、アラジンは、「……お母さん、待ってください。いいことがあります。綿を売るよりも、この私の持つて帰ったランプをお売りにさいな」と言って、あのランプを出し

ました。けれども、ランプは、大変古ぼけていて、埃まみれでした。少しでも綺麗になつたら、少しでも高く売れるだろうと思つて、お母さんはそれを磨こうとしました。しかし、お母さんがそのランプをこするかこすらないうちに、大きなまっ黒いお化けが、床からむくむくと出て来ました。ちょうど煙のようにゆらゆらと体を揺すりながら、頭が天井へ届くと、そこから二人を見下ろしました。「……ご用は何でございますか。私はランプの由来でございます。そして私はランプを持っている方の言いつけ通りになるものでございませう」と、そのお化けが言うのでした。

アラジンのお母さんは、このお化けを見た時、怖さのあまり気を失つてしまいました。アラジンは、すぐお母さんの手からランプを引つたりしました。そして震えながら、自分の手に持っていました。「……ほんの少しでもいいから、食べるものを持っておいで」と、アラジンは、やつぱり震えながら、こう言いました。恐ろしいお化けがやつぱり天井から睨み付けていたものですから。が、その時、ランプの由来は、しゅっと煙を立てて消えて行きましたが、またすぐに金のお皿の上に乗せて、現われて来ました。

この時、アラジンのお母さんは、やつと気がつきました。けれども、このご馳走を食べるのを非常に怖がりました。そして、すぐにランプを売ってくれと、アラジンに頼みました。あのお化けがきつと何か悪いことをするに違いないと考えたものですから。けれどもアラジンは、お母さんの怖がっているのを笑いました。そして、「……この魔法のランプと不思議な指輪の使い方が分かったから、これからはこの二つを上手く使つて、暮らし向きの助けにしようと思う」と言うのでした。

二人は金のお皿を売つて、欲しいと思つていたお金を手に入れました。そして、それをみんな使つてしまつた時、アラジンは、ランプのお化けにもつと持つて来いと言いつけました。こうして、親子は何年も何年も楽しく暮らしていました。

九、お城のお姫様を見染める

さて、アラジンの住んでいる町にあるお城の王様のお姫様は、大変美しい方だということでした。アラジンも、この噂は聞いていたので、どうかしてお姫様を一度拝みたいと思つていました。そこで、いろいろお姫様を拝む方法を考へて見ましたが、どれもこれもみな駄目らしく思われるのでした。なぜかと言うと、お姫様は、いつも外へお出かけになる時は、決まつたように深々とベールを被つておられたからです。けれども、とうとう、ある日、アラジンは王様の御殿の中へ入ることが出来ました。そして、お姫様が湯殿へおいでになるところを、戸のすき間から覗いて見ました。

それからアラジンは、お姫様の美しいお顔が忘れられませんでした。そしてお姫様が好きで好きでたまらなくなりました。お姫様は夏の夜の明け方のように美しい方でした。アラジンは家へ帰つて来て、お母さんに、「……お母さん、私はとうとうお姫様を見て来ましたよ。お母さん、私はお姫様をお嫁さんにしたくなりました。お母さん、すぐに王様のお城へ行つて、お姫様をくださるようお願いしてください」と言つて、せがみました。

お母さんは、息子の途方もない望みを聞いて笑いました。そしてまた、アラジンが氣違ひになつたのではないかと思つて、心配もしました。しかし、アラジンはお母さんが「……うん」と言うまではせがみ通しました。

十、お母さんがお城へと行く

それで、お母さんは、翌る日、王様へのお土産にあの魔法の果物をナフキンに包んで、不承不承に（しぶしぶ）城へ出かけて行きました。お城には、たくさんの人たちがつかめて、訴え事を申し出ておりました。お母さんは何だかいじめてしまつて、進み出て自分のお願いを申し上げることが出来ませんでした。誰もまた、お母さんに気が付きませんでした。そうして、毎日毎日、お城へ出かけて行つて、やつと一週間目に王様のお目に止まりました。王様は大臣に、「……あの女は何者だな。毎日毎日、白い包みを持って来るようだが」と、お尋ねになりました。それで大臣は、お母さんに王様の前へ進むように申しました。お母さんは、少し進んで、地面の上へひれ伏してしまいました。

お母さんは、あんまり恐れ多いので、何も言うことが出来ませんでした。けれども、王様が大層お優しいので、やつと勇気を出して、アラジンにお姫様を頂きたいとお願ひしました。それから、「……これはアラジンが王様への献げ物でございます」と言つて、魔法の果物を包みから出して、差し上げました。あたりにいた人々は、こんな立派な果物を生れて一度も見ることがなかったものですから、吃驚して声を立てました。果物はいろいろ様々に光り輝いて、見ている人たちが眩しがるほどでした。

王様もお驚きになりました。そして大臣を別の部屋へお呼びになつて、「……あんな素晴らしい献げ物をする事が出来る男なら、姫をやつてもいいと思うが、どうだろうか」と、ご相談なさいました。

十一、アラジンは騙されて

ところが、大臣は、ずっと前からお姫様を自分の息子のお嫁さんにしたいと思つていましたので、「……そんなに急いで約束を遊ばせないで、もう三月ほど待たせなさいまし」と、申し上げました。王様も、なるほどそうだなとお思ひになり、それで、アラジンのお母さんには、「……もう三月ほど待ったら、姫をやるう」とおっしゃるのでした。

アラジンは、お姫様がいただけると聞いて、自分ほど仕合せ者はないと思ひました。それから、一日一日が矢のように早く過ぎて行きました。ところが、それから二月も過ぎたある夕方、町中が大層賑やかなことがありました。アラジンは、何事かと思つて、人に尋ねてみると、その人は、「……今晚、お姫様が大臣の息子のところへお嫁にいらっしゃるからだ」と教えてくれました。

アラジンは、まっ赤になつて怒りました。そして、すぐ家へ歸つて、魔法のランプを取り出してこすると、じきにあのお化けが出て来て、何をいたしましうかと聞くのでした。

「……王様のお城へ行つて、お姫様と大臣の息子をすぐ連れて来い」と、言いつけると、お化けは忽ち御殿へ行つて、二人を連れて歸つて来ました。そして今度は、「……大臣の息子をこの家から連れ出して、朝まで外で待たしておけ」と、命令するのです。お姫様は、怖がつて震えていましたが、アラジンは、「……決して怖がらないで下さい、私こそは、あなたのほんとうのお婿さんなのでございます」と申し上げました。

翌る朝早く、アラジンの言いつけた通りに、お化けは、大臣の息子を連れて家の中へ入

って来ました。そして、お姫様と一緒にお城へ連れて帰りました。それからまもなく王様が、「……お早う」と言つて、お姫様のお部屋へ入つてこられますと、お姫様は、涙をぼろぼろこぼして泣いておられ、そして、大臣の息子も、ぶるぶる震えていました。「……どうしたのかね」と、王様がお尋ねになりましたが、お姫様は泣いていて、何にもおっしゃいませんでした。

十二、王様の要求は……

その晩もまた、同じようにアラジンは、お化けに言いつけて、二人を連れて来させました。そして、もう一度、大臣の息子を家の外に立たせておきました。次の日もやはり、お姫様が泣いておられるのを見て、王様は大層お怒りになりました。そして、お姫様が何を聞いても、やつぱり黙つておられるので、なおさらお怒りになって、「……泣くのをやめ、そして早くわけをお話し。話さないで殺してしまふよ」と、お叱りになるのです。

それで、やつとお姫様は、一昨日の晩からの出来事をすっかりお話しになりました。大臣の息子は震えて、どうぞお婿さんになるのを止めさせて下さいまし、とお願ひしました。もう一晚だつて、あんな目に遭うのは、いやだと思つたものですから。そういうわけで、ご婚礼はお取り止めになり、そして、いろんなお祝いもないことになりました。

さて、いよいよ約束の三月の月日が経つてから、アラジンのお母さんは、王様の前へ出ました。それで、やつと王様は、お姫様をこの女の息子にやると、お約束なすつたことを、お思い出しになりました。「……それでは、わしが言つた通りにすることにしよう。だが、わしの娘をお嫁さんにする者は、四十枚の皿に宝石を山盛りにして、それを四十人の黒んぼの奴隷に持たせて寄越さなければいけない。そして王様の召使らしい立派な着物を着た西洋人の奴隷が、その黒んぼの奴隷の手を引いて来るのだぞ」と、おっしゃいました。

十三、お姫様との結婚が許される

アラジンのお母さんは、困つたことになつたと思ひながら家へ帰つて来て、アラジンに王様のお言葉を伝えました。「……アラジンや、そんなことはとても出来ないことじゃないかね」と、そう言つたため息をつくつと、アラジンは、「……いいえ、お母さん、だめじやありませんよ。王様にはすぐ仰せの通りにして御覧に入れますよ」と、潔く言いました。それから、魔法のランプをこすりました。そしてお化けが出て来た時、宝石を山盛りにした四十枚のお皿と、王様が言われただけの奴隷を連れて来いと言いつけました。

さて、それから、この立派な行列が町を通つてお城へ向いました。町中の人々はぞろぞろと見物に出て来ました。そして、群衆は、黒んぼの奴隷が頭の上に乗せている、宝石を山盛りにした金のお皿を見て、びっくりしました。お城へ着いて、奴隷たちは王様に宝石を差し上げました。王様はずいぶんお驚きになりましたが、また、大層お喜びになつて、アラジンとお姫様とが「……すぐに婚礼するように……」とおっしゃるのでした。

十四、お城に出向き、立派な御殿を作らす

お母さんが帰って、このことをアラジンに告げますと、アラジンは、すぐにもお城へ行かなければと言いました。そして、まずランプのお化けを呼んで、香水ぶろと、王様がお召しになるような金の縫い取りのある着物と、自分のお供をする四十人の奴隷と、お母さんのお供をする六人の奴隷と、王様のお馬よりもっと美しい馬と、そして、一万枚の金貨を十箇の財布に分けて、入れて持って来いと命じました。

さて、これらのものがみんな整ってから、アラジンは着物を着替えてお城へ向いました。そして、立派な馬に乗って四十人の奴隷を召しつれて行くみちみち、両側に見物しているたくさんの人たちに、十箇の財布から金貨をつかみ出しては、ばらばらとまいてやりました。見物人たちは、きゃっきゃつと言って大喜びで、それを拾いました。しかし、その中の誰にだって、昔、町でのらくらと遊んでばかりいた怠け者が、こんなになつたとは気が付きませんでした。これはきつとどこかの国の王子様だろうと思っていました。

こんな物々しい有様で、アラジンがお城へ着きますと、王様はさっそくお出迎えになつて、アラジンをお抱きになりました。それから家来たちに、すぐお祝いの宴会と、婚禮の用意をするようにとおっしゃいました。するとアラジンは、「……陛下、しばらくお待ち下さいまし。私は、お姫様がお住みになる御殿を立てますまでは、婚禮はできません」と、申し上げるのでした。そして、家へ帰って、もう一度、ランプのお化けを呼び寄せては、「……世界一の立派な御殿を作れ。その御殿は、大理石と緑色の石と寶石とで作らなければいけない。そして真ん中に金と銀との壁と窓が二十四付いている大広間を作るのだ。それから、その窓は、ダイヤモンドだのルビーだのその他の宝石で飾らなければいけない。けれども、たった一つだけは何にも飾りもしないで、そのままにしておけ。それから、また馬屋も作らなければいけない。そして、御殿の中にはたくさんのお供もいなければいけない。さあ、これだけのことを早くやってくれ」と言いつけるのでした。

十五、王様がその御殿を見ると

翌る朝、アラジンは、世界一かと思われるほどの御殿が立っているのに気が付きました。御殿の大理石の壁は、朝日の光を受けて、薄桃色に染まっていました。窓には宝石がきらめいていました。アラジンは、さっそく、お母さんと一緒にお城へ入りました。そして、今日婚礼をさせて頂きたいと申し入れました。お姫様は、アラジンを御覧になって、アラジンと仲よくしようとお思いになりました。町中はお祝いで大賑わいでした。

その翌る日は、王様の方からアラジンの新御殿をお尋ねになりました。そしてまず大広間へお通りになって、金の銀との壁と寶石を飾りつけた窓とを御覧になって、大変にご感服なさいました。そして、「……これは世界で一番美しい御殿に違いない。わしには、この御殿の中にあるたった一つのものでさえ、世界第一の宝物のように思われる。だが、ここにたった一つ飾り付けをしてない窓があるのは、どういうわけだね」と、お尋ねになりました。するとアラジンは、「……陛下、それは、陛下の貴いお手で飾り付けをして頂きたいと存じまして、わざわざ残しておいたのでございます」と、お答えするのです。

王様は、大変にお喜びになりました。そして、すぐにお城の装飾係りの人たちに、この窓をほかの窓と同じように飾り付けるようにと、お言いつけになりました。装飾係りの人たちは、何日も何日も働きました。そして、まだ窓の飾り付けが半分も出来ないうち

に、持っていた寶石をすっかり使ってしまった。王様にこのことを申し上げますと、それでは自分の寶石をみんなやるから使うようにとおっしゃいました。それを使い果たしても、なお窓は出来上りませんでした。

そこで、アラジンは、係りの人たちに仕事を止めさせて、王様の寶石を全部返してしまいました。そして、その晩、もう一度、ランプのお化けを呼び出し、それで、窓は夜の開ける前に出来上りました。王様と装飾係りの人たちは、驚いてしまいました。

けれども、アラジンは、決して自分のお金持であることを自慢しませんでした。誰にでも優しく、礼儀正しく付き合っていました。そして、貧乏人には親切にしてやりました。それで誰も彼もアラジンに懐きました。アラジンは、また王様のために、何度も何度も戦争に行つて手柄を立てました。それで、王様の一番お気に入りの家来になったのでした。

十六、一方、アフリカの魔法使いは、

さて、遠いアフリカでは、アラジンを懲らしめる悪企みはずっと考えられていたのでした。あの伯父さんだと言って、騙した悪者のおじさんの魔法使いは、魔法の力によって、自分が地の下へ閉じ込めておいた男の子が、あれから助かって、大変な金持ちになったということを知ったからである。そして、怒つて自分の髪を引きむしりながら、「……あいつめ、きつとランプの使い方を悟つたのに違いない。俺は、ランプを取り返す方法を考え付くまでは、忌々しくて夜もおちおち眠ることすら出来ない」と、怒鳴っていたのでした。

それから、やがてまた、しなへやつて来ました。そして、アラジンの住んでいる町へ来て、素晴らしい御殿を見ました。御殿があんまり美しいのと、アラジンがお金持らしいのに腹が立つて、息が止まってしまうほどでした。そこで、魔法使いは商人に化けました。そして、たくさんの銅で作ったランプを持って、「……ええ、新しいランプを古いランプと取り換えてあげます」と、町から町へ、こう言いながら歩きまわりました。

この呼び声を聞いて、町の人たちは、馬鹿げたことだと笑いながらも、珍しそうに魔法使いのそばへ集つて来ました。こんなことを言う男は、気違いかも知れないと思つたものですから。ちょうどこの時、アラジンは狩りに出て留守でした。お姫様は、ただ一人、大広間の窓に寄りかかって、外の景色を眺めておられました。町から聞えて来る呼び声が耳に入ったものですから、さっそく奴隷をお呼びになり、そして、「……あれは何と言っているのか聞いておいで」と、おっしゃるのでした。

すぐに奴隷は聞いて帰つて来ました。そして、さもさもおかしくてたまらないというふうに笑いながら、「……ずいぶん、変なおじさんなのでございますよ。新しいランプを古いランプと取り換えてあげます、と申すのでございます。そんな馬鹿げた商いがございませうでしょうかねえ。ほほほ……」と、申し上げるのでした。

十七、ランプの取り換えと御殿とお姫様の消失

お姫様も、これをお聞きになつて、大層お笑いになりました。そして、すみの方の壁に掛かっていたランプを指さしになつて、「……そこにずいぶん古ぼけたランプがあるじゃな

いか、あれを持って行って、そのおじさんが、ほんとうに取り換えてくれるかどうか、試してごらん」とおっしゃるのでした。

奴隷は、ランプを取り下ろして、町へ走って行きました。魔法使いは、魔法のランプを両手でしっかり受け取ってから、「……どれでも好きなのをお持ちください」と言っていて、新しい銅のランプをたくさん並べ立てました。そして、古いランプを大事そうに抱きしめて、ほかのことは何にも気がつかない様子でした。この奴隷が新しいランプをみんな持つて行ったとしても、きっと気がつかなかったでしょう。

それから、魔法使いは、少し歩いて、町外れへ出ました。そして、誰も通っている人がないのを見すまして、魔法のランプを取り出しました。そして閑かにこすりました。すると、たちまち、あのお化けが目の前へ立ちはだかつて、「……何のご用ですか」と聞きました。「……お姫様を入れたまんまで、アラジンの御殿をアフリカの寂しいところへ持つて行って立ててくれ」と、魔法使いが言うのでした。

すると、瞬く間にアラジンの御殿は、お姫様や家来たちを入れたまんま見えなくなっ てしまいました。まもなく、王様がお城の窓から外をお眺めになって、アラジンの御殿が無くなっているのにお気づきになりました。「……しまった。アラジンは、魔法使いだったのだな」と、王様はこうおっしゃって、すぐに家来を召して、アラジンを鎖で縛って連れて来い、と御命令になりました。家来たちは、狩りから帰って来るアラジンに行き遭いましたので、すぐに捕まえて、王様の前へ連れて来ました。町の人々は、アラジンに懐いていたものですから、アラジンが引かれて行くそばへ寄って来て、どうか酷い目に遭わないようにと、お祈りをしてくれました。

十八、御殿が消えて捕らわれの身に……

王様は、アラジンを御覧になって、大変お叱りになりました。そして家来に、すぐアラジンの首を切れとおっしゃいました。けれども、町の人たちがお城へ押しかけて来て、そんなことをなすつたら承知しませんと言って、王様を嚇かしました。それで仕方なく王様は、アラジンの鎖を解いておやりになりました。

アラジンは、どうしてこんな目に遭うことになったのかと、王様にお尋ねしました。王様は、「……可愛そうに何にも知らないのか。まあ、ここへ来てごらん」と、仰せになりました。そして、アラジンを窓のところへ連れて来て、アラジンの御殿が立っていたところが原っぱになっているのを、指を差して教えてやりました。「……お前の御殿は、ともかく、姫はどこへ行ったのか。わしの大事な大事な娘は、どこへ行ったのだ」と言っていて、王様はお泣きになりました。

アラジンは、驚きのあまり、しばらくは口が利きませんでした。どこへ御殿が行ってしまったのかと、原っぱを見つめたまんま黙ってぼんやり立っていました。しかし、しばらくして、やっと口を切りました。「……陛下、どうか私に一月のお暇をくださいませ。そして、若しもその間に私がお姫様を連れ戻すことが出来ませんでしたならば、その時、私をお殺しになって下さいませ」と、申し上げたのでした。

十九、消えた御殿とお姫様を探し求めて

王様は、お許しになりました。アラジンは、それから三日の間は、気違いのようになつて、御殿はどこへ行つたのでしょうか、と会う人ごとに尋ねてみました。けれども、誰も知りませんでした。かえつて、アラジンが悲しんでいるのを笑つたりしました。それでアラジンは、いつそ身を投げて死のうと思つて、川のほとりへ行きました。そして、土手にひざまずいて、死ぬ前のお祈りをしようとして、両手をしっかりと握り合わせました。すると、その時、知らずに魔法の指輪をこすつたのでした。それで、たちまち指輪のお化けが目の前につつ立つて、そして、「……どんなご用でございませう」と言うのでした。アラジンは、大変に喜んで、「……お姫様と御殿とをすぐに取り返して来てくれ、そして私の命を助けてくれ」と、頼みました。ところが、指輪の家来は、「……それは、あいにく私には出来ないことでございます。ただ、ランプの家来だけが御殿を取り戻す力を持つていたのでございます」と、答えたのでした。「……それでは、御殿があるところまで私を連れて行つてくれ。そして、お姫様の部屋の下へ立たせてくれ」と、アラジンは仕方がないので、こう頼みました。この言葉を、言いきつてしまわないうちに、もうアラジンはアフリカに着いて、御殿の窓の下に立つていました。

アラジンは、大変草臥れていたものですから、そこでぐっすり寝込んでしまいました。しかし、ほどなく夜が明けて、小鳥の鳴く声で目を覚ました。その時は、もうすっかり、元のような元氣になっていました。そして、こんな悲しい目に遭うのは、きつと魔法のランプがなくなつたせいには違ひない、誰が盗んだかを見届けなければならぬ、と、固く決心するのでした。

二十、二人は、アフリカでやつと再会

さて、お姫様は、この朝は、ここへ連れて来られてから初めて、機嫌よくお目覚めになつたのでした。太陽はうらうらと輝いて、小鳥は楽しそうに囀っていました。お姫様は、外の景色でも眺めようと思つて、窓の方へ歩いておいでになりました。そして、窓の下に誰か立っている者があるのをご覧になりました。よくよく見ると、それはアラジンではありませんか。お姫様は、声を立ててお喜びになつて、急いで窓をお開きになりました。この音でアラジンは、ふつと上を見上げたのでした。

それから、アラジンは、いくつもいくつもの戸をうまく通り抜けて、お姫様の部屋へ入つて行きました。そして、嬉しさのあまり、お姫様をしばらく抱き締めていましたが、やがて顔を上げて、「……お姫様、あの大広間の隅の壁に掛けてあつた古いランプがどうなつたか、ご存じではありませんか」と、お聞きになるのでした。すると、お姫様は、「……ああ、旦那様、私どうしましょう。私がうっかりしていたので、こんな悲しいことになつてしまつたんです」と言つて、あのおじさんの魔法使いが商人の風をして来て、新しいランプと古いランプと取り換えてあげると言つて、こんなことをしてしまつたお話をなさいました。そして、「……今も持っていますよ。いつだつて上着の中へ隠して、持ち歩いていますよ」と、おっしゃるのでした。

「……お姫様、私はそのランプを取り返さなきやなりません。ですから、あなたもどうか私に加勢してくださいませ。今晚、魔法使いがあなたとご一緒にご飯を食べる時に、あ

あなたは一番いい着物を着て、そして親切そうな風をして、お世辞を言ってやってくださいまし。それから、アフリカのお酒が少し飲みたいとおっしゃいませ。するとあの男が、それを取りに行きますからね。その時が来たら、私がまたあなたのおそばへ行つて、こうこうしてくださいませ、と申し上げますから」と、アラジンは言うのでした。

二十一、魔法使いを騙して

さて、その晩、お姫様は一番いい着物をお召しになりました。そして、魔法使いが入つて来た時、にこにこしていかに親切そうな風をなさいました。魔法使いが、これは夢ではないかと思つたほどでした。なぜかと言うと、お姫様は、ここへ連れて来られてからというものは、いつもいつも悲しそうな顔をしているか、そうでない時は、怒つた顔をしていらつしやるかでしたから。「……私、たぶんアラジンは死んでしまったのだらうと思ひます。ですから、私、あなたのお嫁さんになりたいと思つています。まあ、それはともかく、さあ、ご飯にしましょう。おや、今日もやっぱりしなのお酒ですね。私、しなのお酒にはもう飽いてしまいましたから、アフリカのお酒を持つて来てくださいな」と、お姫様がおっしゃるのでした。

アラジンは、その間に粉を用意して来て、お姫様にご自分のお杯の中へ入れてください、と頼みました。そして、魔法使いがアフリカのお酒を持つて帰つて来た時、お姫様は、粉を入れた杯にそのお酒をなみなみとお注ぎになりました。そして、これから仲よくなる証ですから飲んでください、と言つて、魔法使いにお差しになりました。魔法使いは喜んで、それに口を付けました。しかし、それをみんな飲み干さないうちに、床の上に倒れて死んでしまいました。

アラジンは、隠れていた次の部屋からとんで出て来て、魔法使いの上着の中を探しまわりました。そして、魔法のランプを取り出して、大喜びでそれをこすりました。お化けが出て来ますと、すぐに御殿をしなへ持つて帰つて、元の場所に立てるようにつけるのでした。

二十二、御殿もお姫様も元に戻る

次の朝、王様は、大層早くお目を覚ましになりました。王様は、悲しくてお眠りになることが出来なかつたのです。ところが、窓のところへ行つて御覧になると、アラジンの御殿が元のところに立っているではありませんか。王様は、嘘ではないかとお思いになりました。それで何遍も何遍も目をこすつては、じつと御殿の方を御覧になりました。「……夢ではないのかしら。朝の光を受けて前よりももっと美しく見える」とおっしゃいました。

それから、間もなく、王様は、馬に乗つて、アラジンの御殿をさして走つていらつしやいました。そして、アラジンとお姫様とを両手に抱き締めてお喜びになりました。二人は、アフリカの魔法使いの話をしてお聞かせしました。アラジンはまた、魔法使いの死骸もお目にかかけました。それからまた、昔のような楽しい日が続きました。

二十三、魔法使いの弟の登場

しかし、まだもう一つアラジンに心配が残っていました。それは、アフリカの魔法使いの弟も、やっぱり魔法を使っていたからです。しかも、その弟は、兄さんよりもっと悪者だったからです。

はたして、その弟が敵討ちのためにしなへとやって来ました。アラジンを酷い目に遭わせて、魔法のランプをぶんどってやろうと決心して来たのです。そして、しなへ着くと、すぐにこっそりと、まずフェアティマという尼さんを尋ねて行きました。そして、上着とベールとを無理矢理に貸してもらいました。それから、このことがほかの人に知られてはいけないと思って、尼さんを殺してしまっただけです。

さて、この悪者の魔法使いは、尼さんの上着とベールとをつけて、アラジンの御殿の近くの町を通りました。町の人々は、ほんとうの尼さんだと思って、ひざまずいてその上着にキッスしました。まもなく、お姫様は、フェアティマが町を通っているということをお聞きになりました。それで、すぐ御殿へ来てくれるようにと使いをお遣りになりました。お姫様は、フェアティマを始終見たい見たいと思っていらいっしたものですから、尼さんが来た時、大変に丁寧にもてなしなさいました。そして大広間へ連れておいでになって、同じ長椅子に腰かけながら、「……この部屋がお気に召しまして」と、お聞きになりました。魔法使いは、ベールを深く被ったままで、「……本当に目が覚めるほどお綺麗でございますこと。ですけれども、私このお部屋にたった一つ欲しいと思うものがございますよ。それは他でもございません、ロック鳥の卵があつた高い天井の真ん中からぶら下がっていたら、もう申し分なしだと思いますわ」と、答えるのでした。

これをお聞きになってお姫様は、何だか急にこの大広間が物足りないように思い始めました。そして、アラジンが入って来た時、大変に悲しそうな顔をしていらっしやいました。アラジンは、何事が起ったのですか、と尋ねました。お姫様は、「……私、この天井から、ロック鳥の卵がぶら下がっていなきやあ、何だか悲しいんですもの」と、おっしゃいました。「……そんなことなら、造作ないじやございませんか」と、アラジンはこともなげに言っつてランプを下ろして、廊下へ出てあのお化けを呼びました。

けれども、ランプのお化けは、その命令を聞くと、大変に怒りました。顔をぶるぶる震わせながら、アラジンを叱りつけました。「……大馬鹿者、そんなことを私がやれるとも思っているのか。お前は、私のご主人（つまりアラジン）を殺して、あの天井からぶら下げてくれと言うのか。そんな馬鹿は、死んでしま方がいいや」と。

お化けの目は、まるで石炭が燃えている時のように、まっ赤になっていました。しかし、やがて言葉を和らげて、「……だけれども、それはお前の心から出た願いでないということとを、私はよく知っているのだよ。それは尼さんの風をしている、悪者の魔法使いが言わせたのだらう」と、言いました。そして、お化けは消えました。アラジンは、お姫様が待っている部屋へ急いで行きました。そして、「……私は、頭痛がしてなりません。尼さんをお呼びくださいませんか。あの方のお手で摩っていたら、きっと治るだろうと思います」と、お姫様に申しました。

すぐに、偽のフェアティマが来ました。アラジンは飛びついて、その胸へ短刀を突き差しました。「……どうなすつたのです。まあ、あなたは尼さんを殺すのですか」と、お姫様は、泣き声で咎めました。「……これは、尼さんではございません。これは私たちが殺し

に来た魔法使いです」と、アラジンは申し上げるのでした。

このようにして、アラジンは、二人の悪い魔法使いの悪巧みから逃れました。そして、もうこの世の中には、誰もアラジンの仕合せの邪魔をする者はなくなりました。

アラジンとお姫様は、長い間、楽しく暮らしました。そして、王様がお隠れになった時に、二人はとうとう王様とお妃様になりました。そして、国をよく治めました。いつまでもいつまでもその国は栄えたということです。(完)

*

*

シンドバッドの冒険

シンドバッドの冒険

一、シンドバッドとの出会い

さて、バクダッドの町にシンドバッドという貧乏な荷担ぎがいました。荷担ぎというのは、鉄道の赤帽のようにお金をもらって人の荷物を運ぶ人です。

ある暑い日のお昼からずいぶん重い荷物を担いで歩いていましたが、静かな通りへ差しかかった時、大層立派な家が立っているのが目に入りました。シンドバッドは、その門のそばで少し休むことにしました。その家は、とても立派でしたので、シンドバッドは、まだこんなに立派な家を見たことがありませんでした。家のまわりの敷石上には香水がまいてありました。シンドバッドの足は、疲れて熱くなっていたものですから、その敷石は大変気持ちよかったです。そして、開いてある窓からも何とも言えぬいい香りが匂って来ていました。

シンドバッドは、まあ、こんな立派な家には、一体、どんな人が住んでいるのだろうかと思いましたが。それで玄関に立っている番人に、「……これは、一体、どなたの家ですか」と聞いてみました。すると、この番人は、随分上等の着物を着ていましたが、シンドバッドの言葉を聞いて目を丸くしました。そして、「……まあ、お前さんは、バクダッドに住んでいながら、私のご主人様の名を知らないというのかい。船乗りのシンドバッド様というて世界中を船で乗り回しては、世界中で一番たくさん冒険をした方じゃないか」と言うのでした。

シンドバッドも、今まで度々この不思議な人の名前とその人が大したお金持であるという噂は聞いていました。それで、ははあ、なるほどと思つて、もう一度、その御殿のような家を見上げました。それからまた、上等の着物を着ている番人をじろじろ見ていました。そのうち、だんだん悲しくなつて来たし、また、妬ましくもなつて来ました。「……ああ、ああ」と、シンドバッドは、そうため息をついて荷を担ぎ上げました。そして、天を仰ぎながら独り言を言ったのです。「……まあ、何てこの家の主人と私とは違ふのだろうか。まるで天と地との違いだ。この家の主人は、毎日毎日、お金を使いたいだけ使つて、その日その日を楽しく遊ぶより他には何にもすることがないのに、私と来たら、朝から晩までせつせと汗水流して働いても、やつと不味いパンを少しばっちしか買うことが出来ないんだ。ああ、ああ、どうしてこの人は、そんなに仕合せになれたんだろう。そしてまた、私は、どうしてこう年がら年じゅう貧乏なんだろうか」と。

そして、三十メートルばかり歩いてみると、一人の召使が追っかけて来て、後からシンドバッドの肩を叩きました。そして、「……家の旦那様がお前さんに会いたいから連れて来いとおっしゃられた。さあ、ついておいで」と言うのでした。貧乏な荷担ぎは、びっくりして、きつとさつきの独り言が聞こえたんだなと思つたものですが、けれども、召使は、そんなことにはお構いなしで、さつさとシンドバッドを家の中へ連れて入り、大広間へ通しました。大広間には大勢のお客様がテーブルを囲んで腰掛けていました。テーブルの上には、美味しそうな御馳走が一杯並べてあります。一番上座に真っ白い髭を生やした立派なおじいさんがどっしりと腰掛けていました。この人がシンドバッドだったのでした。

二、シンドバットが言うには……

シンドバッドは、吃驚びつくりしているシンドバッドの方を向いて、にこにこしながら自分の隣となりへ来て、腰を掛けるようにと手招きをしました。そして、シンドバッドが腰を掛けると、テーブルの上の御馳走ごちそうを取ってやるようにと、召使めしつかいに言いつけました。召使は、シンドバッドの前の皿に御馳走をたくさん盛り上げて、コップには上等のお酒を並々と注ぎました。シンドバッドは、これは、夢ではないかと思ひ始めました。御馳走を食べ終ってから、シンドバッドは、シンドバッドの方を向いて、さつき窓の外で何を言っていたのかと聞きました。シンドバッドは、大層恥ちずかしくなつて、思わずうな垂たれてしまいました。そして、「……旦那様だんなさま、ごめんください。あの時は、大変草臥くたびれていたものですから、つい馬鹿げたことを言つて失礼いたしました。どうぞお氣におかけ下さいませぬように」と言うのでした。

シンドバッドは、「……いや、何で私がお前さんを咎めたりするもんですかね。私は、お前さんを本当に気の毒にくだと思つていますよ。けれどもお前さん、私が始終暢氣のんきに暮らしているのだと思つちやあ困ります。それからまた、樂々らくらくとこの財産ざいさんを作り上げたと思つてもいけませんよ。これまでになるには、何年も何年も全く命がけで稼いだのですから」と言うのでした。それから他のお客様の方へ向き直つて、「……そうです、皆さん、私が今までに出遭であつた数々の冒険は、どなたにだつてお出来になることではありません。私が今日こんにちまでにした七遍しちべんの航海こうかいの話は、まだ一度もお耳に入れたことがありませんでしたが、若しも皆さんが聞きたいとお望みになるのなら、今晚から始めてもいいと思ひます」と、言うのでした。それから召使めしつかいに荷担にかつぎの荷物を家まで届けてやるようにと言いつけました。シンドバッドは、ここに残つて、一番初めの航海こうかいの話はなしを聞くことになりました。

三、一番初めの航海の話

私の父は、かなり沢山の財産を残して死にました。その時分、私はまだ若かつたものですから、それを無駄むだ使いして、もう少しですつかりなくすところまで行きました。しかし、これはうっかりしていると貧乏人になつてしまふぞと、氣がついたものですから、急に大決心おほこころを起おこしました。そして、残つてお金かねを数えてみて、商売しょうばいをすることに決めたのです。それから、私は貿易商人の仲間へ入り、船に乗り込むことにしました。次から次と、船が着く港みなとで持つて行つた品物しなものを売つてお金にしたり、また、あちらの品物しなものと取り替かへつこをしようと思つたからです、まず、私の一番初めの航海が始まりました。

一、クジラを小さな島と

初めの二、三日は、私は大分船に酔たいぶいました。けれども、やがてだんだん慣れて来て酔わなくなつてしまいました。さて、ある夕方のことでした。風がぴつたりと鎮しずまつて、船の揺れもぱつたり止やまつてしまいました。ちょうどその時、私どもは、青々と草の生えた平たい小さな島のそばを走つていたのでした。その島は、まるで牧場まきばのようでその向うに青々とした海が見えていました。船長はみんなにこの島へ上あつて少し休んでもいいと言いま

した。私どもは大喜びで、さっそく、この緑の牧場(まきば)に上(あ)りました。そして、そこらじゅうを歩きまわったり寝転(ねころ)んだりしました。中でも、私たち五、六人の者は、たき火をして晩ご飯を拵(しむ)えようとしたのです。

やっとたき火が燃えついた時分(とき)でした。船から大きな声で、「……早く、帰って来ーい」と言う声が聞えました。私どもが島だとばかり思っていたのは、本当は眠っていたクジラの背中(せなか)だったのです。みんなは、波打際(なみうちぎわ)へ繋(つな)いでおいたボートをめがけて、一目散に走り出しました。けれども、私がまだボートまで行きつかないうちに、早くもこのクジラは、海の中へ潜(もぐ)ってしまつたのです。私は水の中でずいぶん藻掻(もが)きました。そして、やっと板切れに取り付きました。それは、たき火をするために船から持って来たものでした。

ところが、船では何かごたごたがあつて、私のことなんか忘れていたらしいのです。船長は、風が吹き出すと船を出してしまいました。私は、波に揉(も)まれながら、とうとう置き去りにされてしまつたのです。それから一晩じゅう、私は水に浸(ひ)かっていました。そして、朝になつた頃(ころ)には、もうへとへとに草臥(くたび)れてしまつて、死ぬよりほかには仕方がないと思つていました。けれども、ちょうどその時、大変大きな波がやつて来ました。そして、私を持ち上げたかと思つと、ある島の崖(がけ)の下へ打ち上げました。

二、島の牧場(まきば)では馬を放し飼(はな)い

嬉しいことには、その崖(がけ)は、よじ登ることが出来ました。その上は、青々と草の生えた原(はら)っぱでした。そこで、私は、まず何よりも休みました。すぐに気分(なご)が治(なお)りました。けれども、大層(なげ)お腹(なか)が減(へ)つていたので、何か食べる物はないかと探し(さが)に出(い)かけました。少し行くと、美味(おい)しそうな果物(くだもの)の木がありました。その傍(そば)にきれいな水が噴(ふ)き出(い)づみ出ていました。私はそこで、まず食事を済(す)まして、また何か他(ほか)にないかと思つて、島の奥(おく)方(かた)へ歩いて行きました。

すると、ほどなく牧場(まきば)に来(あ)りました。馬(うま)があちこちに放(はな)してあつて、みんな草を食べていました。しばらく、ぼんやり立(た)っていますと、人の話し声(かたご)が聞(き)えて来(き)ました。耳(みみ)を澄(す)ましている、それがどうも地(ち)の下(した)で話(わ)しているようです。まもなく、草(くさ)の間(あ)いに隠(かく)れてあつた穴(あな)から、ぬうーつと人が一人出(い)で来(き)ました。そして、私を見つけると、お前は誰(た)か、どこから来(き)たのかと尋(たず)ねました。

それから、私(わたし)を穴(あな)の中(なか)へ連れて入(い)りました。穴(あな)の中(なか)には仲間(なか)らしい人がたくさんいました。そして、自分(自分)たちは、この島の王(お)様の馬(うま)がかりで、馬(うま)を買(か)ひにこの牧場(まきば)へ来(き)ているのだ、と言(い)いました。私(わたし)に美味(おい)しい食(け)べ物をくれて、「……お前(まへ)さんは、本(ほん)当(とう)に運(うん)がいい人(ひと)だよ。もし、明日(あした)来(き)たら、もう私(わたし)たちは帰(かへ)つてしまつていたからね。道(みち)を教(お)えて上げることは出来(き)やしなかつたんだよ」と言(い)うのでした。

翌(あ)る朝(あ)早く、私(わたし)たちは出(い)立(だ)ちました。そして都(みやこ)に着(き)きました。王(お)様(さま)は、私(わたし)を喜(よろこ)んで迎(むか)えて下(くだ)さいました。私(わたし)が出(い)遭(あ)つた災(あ)難(なん)の話(わ)をお聞(き)きになり、「……この者(もの)に不(ふ)自由(じゆう)をさせないよ(う)うに氣(き)をつけてやれ」と、家(け)来(らい)にお言(い)ひ付(つ)けになりました。

三、波止場(はとば)で自(じ)分の荷物(にもつ)を見(み)つけて

さて、私は、大変船が好きでしたから、そこにいる間、毎日のように波止場に出掛けて行って、ボートから荷物を下ろすのを見て暮らしました。

ある日のこと、いつものようにあちこちの船に積んである荷物を眺めていた時に、その中に私の名を書いた行李がたくさん積んであるのを見つけました。それで、すぐにその船長のところへ行って、その行李の持主は誰ですと聞いてみました。すると船長は、「……ああ、それはね、バクダッドの商人のシンドバッドという人です。その人は、航海に出ると、間もなくむごたらしい死に方をしたのです。ある時、この船に乗っていた人たちが、眠っていた大きなクジラの背中を草の生えている島だと思って、その上に上ったのです。そして、たき火をしました。すると、熱いのでクジラが目覚まして、いきなり海へ沈んでしまったのです。それで沢山の人が死にました。その中にシンドバッドさんもいたのです。そういうわけですから、私はこの品物をすっかり売ってお金にして、あの方の身内とか親類とかいう人でもあったら、お渡ししたいと思っていますのです」と言うのでした。

そこで、私は、「……船長、私とそのシンドバッドですよ。この行李は、みんな私のです」と言うと、船長は、急に恐ろしい顔をして、「……まあ、世の中は油断も隙もあつたものじゃない。おい、お前さんが何と言ったってね、私は、ちゃあんとこの目で、シンドバッドが海に沈んだところを見たのだぞ」と、怒鳴りつけました。

私は、すぐにあれから後のことを何もかも船長に話しました。そのところへちようど船に乗っていた商人たちが出て来て、私を本当のシンドバッドだと言ってくれました。船長は、初めて大層喜びました。そして、「……すぐに荷物をお引き取りください」と言うのでした。私は、その中からなるべく見事なものを選び出して、王様に差し上げました。それから、あとの品はみな売り払って、白檀や肉桂またシヨウガやハッカ或いは丁子香などを買い入れました。それから、もう一度、この船長の船に乗って出かけました。

その帰り路、私はある島で持って来た香料をみんな大変高く売ることが出来ました。それで、いよいよバクダッドへ上る時には、一万円の金貨が出来ていました。家の者たちは、私が帰って来たので大変喜びました。それから私は少しばかりの土地を買って、小さなぱりした家を立てました。そして、安楽に暮らして、怖い目にあつたことなどは、みんな忘れてしまおうとしたのです。

*

*

ここで、シンドバッドは、一番初めの航海の話を終りました。そして、音楽を始めるように、また、もつと御馳走を持って来るようにと言いつけました。

さて、それが済んだ時、シンドバッドは、金貨で百円ほどをシンドバッドにくれました。そして、若しも二度目の航海の話が聞きたかったら、明日の晩の今時分にまたおいでと言いました。シンドバッドは、大急ぎで自分の家へ帰って行きました。皆さん、その夜、まあ、どんなにシンドバッドのお上さんや子供たちが喜んだか、お察しください。

さて、次の晩、シンドバッドは、一番いい着物を着て、シンドバッドの家へ行きました。夕べと同じように大層御馳走が出ました。そして、それが済んだ時、「……皆さん。今晩は、二度目の航海の話をしようと思います。これは、夕べの話よりかもつともつと不思議なことが沢山あります」と、シンドバッドは言うのでした。

三、二度目の航海の話

家へ帰って、しばらくの間は、私も楽しく暮らしていました。しかし、まもなく、私は、ぶらぶらとその日その日を送ることが嫌になりました。そして、海の上へ乗り出して、波の上を飛ぶように走ったり、帆づなをびゅうびゅう鳴らしながら、吹いて行く風の音を聞いたりしたくてたまらなくなりました。

そこで、私は、急いでいろいろの品物を買集め、もう一度、外国へ商売に出かけることにしました。それから、都合のよさそうな船に乗って、大勢の商人たちと一緒に、船は路々いろんな港に着きました。私どもは、その度毎に持って来た品物売って、大層儲けました。そして、すっかり品物売り払ってしまつてから後のことでした。ある日のこと、私たちは、ある島に着きました。

その島は、ほんとうに美しい島でした。エデンの園かと思われるほど綺麗なところでした。たくさんの花が虹のように咲き乱れて、熟した果物が美味しそうに房になつて生っていました。私は、まずその木の下へどっかりと腰を下ろしました。そして、周辺を見まわしてみると、そこら一面、見れば見るほど美しい景色でした。私は、持って来た食べ物を食べたり、お酒を飲んだりしました。それから目をつぶりました。そばを静かに流れている、小川の流れの音が歌のように聞こえて来ました。そのうちにぼーっとして来て、私は眠ってしまいました。

一、ロックという大鷲とその卵

それから、一体、どれだけ時間が経つたのか分かりませんが、ふと目を覚ますと、一緒に来た人たちは、一人もいなくなっていました。びっくりして、海の方へ捜しに行つてみますと、まあ、どうでしょう。船はとっくに出てしまつていはいないではありませんか。そして、はるか向うまで走つて行つて、ちようど白い点を打つたように見えるだけです。私は、この島に置き去りにされてしまったのです。こんなことになるくらいならば、どうしてあのまま家にじつとしていなかったのかと泣いて残念がりましたが、仕方がありませんでした。私は、どうにかして島から出て行くことは出来ないものかと思つて、高い木に登つて、方々を見まわしました。初めに海の方を見ました。けれども、海には何にもありませんでした。それで、今度は陸の方を見ました。すると、島の真ん中ほどに大きな白い円屋根のようなものが見えました。今まで一遍もそんなものを見たことがないので、それが何だかちつとも分かりませんでした。

私は、ともかく木から降りました。そして、大急ぎでその白い円屋根の方へ走つて行きました。しかし、いよいよ傍まで行つても、それは皆目何だか分かりませんでした。ちようど大きなまりのようで、すべすべしていて、とてもよじ登ることなど出来ませんでした。また、そうかと言つて、中へ入つて行こうにも、戸らしいものや入口らしいものが一つもありませんでした。どうにもしようがないので、私はただぐるぐるその周辺をまわつていました。すると、にわかにかがく空が曇つて来て、見る見る夜のように真つ暗になつてしまいました。それで、恐る恐る空を見上げますと、大きな鳥が舞い降りて来て、その大きな両翼の影のためにこんなになつたのだということが分かりました。鳥は、瞬く間に降りて来て、白い円屋根の上へ止まりました。

この時、ふと私は思い出したことがありました。それは、水夫たちに聞いていたロックという鳥のことです。それで、すべすべした円いまりは、その鳥の卵に違いないと思えました。こう思いつくと、すぐに私は頭に巻いていた布を解いて綱を作りました。そして、それを自分の腰のまわりに回して、両方の端をしっかりとロックの足に結びつけました。「……しめたぞ。この鳥は、今に飛び上るに違いない。そして、きつと私をこの島から連れ出してくれるに違いない」と、私はこう独り言を言つて喜びました。

二、深い谷底には沢山の黒い蛇が

はたして、間もなく私は地から持ち上げられました。そして、雲に届くかと思うまで高く上つてしまいました。それからまた、だんだん下へ降りて行きました。そして、地に着きました。私は手早く頭巾の布を解きました。そしてロックから離れました。ロックに較べると、私はお話にならないほど小さいものでした。それでロックは、まるきり私に気がつかなくなつたらしいのです。ロックは、すぐに傍に寝ていた大きな黒いものの方へ飛びかかつて行きました。そして、それを口ばしで啜えて、飛び上つてしまいました。

皆さん、それから私がつくづくと他にもたくさん寝ていた黒いものを見た時に、まあ、どんなに驚いたか、お察しください。それは、みんな黒い大きな蛇だったので。なお、よくよくあたりを見ますと、ここは岩の重なり合つた深い谷底でした。どちらを向いても、屏風のように険しい山が聳えていました。そして、その岩の間には、この恐ろしい蛇よりほか何にもいないのでした。「……ああ、こんなことなら、いっそあの島にいた方がましだった。わざわざもつと酷い目に遭うために、この島へ来たようなものだ」と、私は泣き泣き独り言を言いました。

そして、じつと岩を見つめていますと、何だかきらきらとよく光る石が、そこら一面に散らばっているではありませんか。不思議だと思つてずつと寄つて見ると、それがみんな大変大きなダイヤモンドでした。ちょうど小石くらいの大きさのものです。私は、跳び上るほど喜びました。しかし、すぐに恐ろしい蛇が私に噛みつきこうとして狙っているのに気がつきましたから、その喜びは、どこへやら背中にぞつと寒気が立ちました。

蛇は、どれもこれも大層大きなもので、象でも一口に飲みそうなものばかりです。昼間はロックが恐いのでじつとしていても、夜になると、のたりのたりと這い回つて食べ物を捜すのでした。私は、日が暮れないうちに岩の中の穴を見つけて、その中にしゃがんで震えながら、夜の開けるのを待ちました。そして朝になつてから、もう一度、谷へ出て行きました。——さて、これからいつたいどうしたらいいのだろうと、じつと座つて考えていますと、ちょうど目の前へ、ころころと大きな生の肉の切れが転がって落ちて来ました。それからまた、同じようなのが落ちて来ました。そして、次から次と落ちて来て、見る見る盛り上つてしまつたのです。

三、鷲の巣とダイヤモンド谷

この時、私はふとある旅行家から聞いた、ダイヤモンド谷の話の思い出しました。それは、毎年、鷲が卵をかえす時分になると、商人たちが高い山へ登つて行つて、生の肉の

切れを谷底をめぐりかけて転がし落すのでした。すると、谷に散らばっているダイヤモンドが、その肉の中へはまり込みます。その肉を鷲が雛にやるために啞えて帰って来るのです。商人たちは、そこを待ち構えていて、鷲を巣から追い出して、肉の中のダイヤモンドを取るという話でした。

やがて、鷲が舞い下りて来て、肉の切れを啞えて飛び上って行きました。それを見ているうちに、ふとある考えが浮かびました。それでとてもだめだと思つて憤っていた私は、元氣を出しました。そこで、まずあたりを探しまわつて、なるべく大きなダイヤモンドを拾つて、ポケットに詰め込みました。それからまた、肉の一番大きな切れを見つけ、それをあの頭巾で作った綱で体へしつかりと結び付けました。鷲がまたすぐに獲物を取りに降りて来るだろうと思つたからです。それから、肉の切れの下に潜つて、地面の上へ寝そべりました。そして、どうなることかとじつと待つていました。

すると、まもなく鷲がすうーつと降りて来ました。そして、私の体に結ばれてあつた肉を掴んでさつと飛び上りました。そして、高い高い山の上の岩の間の巣の中へ、私を落とし込みました。すると、思つた通り、すぐに岩の後から人が出て来て、大きな声で鷲を追い立てました。鷲は、びっくりしてそのまま飛び去つてしまいました。

この人は、この巣の番をしている商人で、肉の中のダイヤモンドを探しに来たのですが、私を見て、びっくりして、後へ飛び退きました。けれども、すぐに、「……お前さんは、一体、ここで何をしているんだ。ああ、分かつた。ダイヤモンドを盗みに来たんだな」と、怒鳴りつけました。しかし、私は、落ちついて、「……まあ、お待ちください。私は決して泥棒ではありません。私の話をお聞きになったら、きっと私を気の毒に思つて下さるでしょう。そして、きつとお咎めにはならないでしょう。それから、お望みのダイヤモンドなら、ここに少し持つて来ましたから」と言うのでした。

四、ダイヤモンドをみんなに分ける

そこへ、ほかの番をしている商人たちもやつて来ました。私はみんなに今までの危ない目に遭つた話をして聞かせました。商人たちは、私の勇氣とそんな危ない目からうまく逃れた智慧とにびっくりして、ただただ目を見張っているばかりでした。それから私は、手に一杯ダイヤモンドを掴み出しました。そして、みんなに見せました。みんなは、そんな立派なダイヤモンドを見たのは初めてのようでした。「……さあ、がっかりなさつたかわりに、どれか一つお取りください」と、怒鳴りつけた商人に言いました。

すると、その人は、「……では、この小さいのを一つ頂きましょう」と言つて、きらきら光っている中から一番小さいのを一つ取り出しました。私は、もつと大きいのお取りなさい、と勧めましたが、その人は首を振つて、「……これ一つあつたら、私が欲しいと思つた財産をつくるのが出来ます。私はもうこんな危ない思いをしてダイヤモンドを探しには来ますまい」と、言うのでした。

それから、みんなで港をさして出かけました。そして、そこから船に乗つて、家へ帰ることになりました。帰り路でもいろいろ危ない目に遭いましたが、ともかく、バクダッドへ帰つて来ることが出来ました。私は、ダイヤモンドを売つて大変お金を儲けました。そして、沢山のお金を貧乏人に施しました。そして、前よりもつとお金持になつて、

人からちやほやされるようになったのです。

*
ここで、シンドバッドは、話を止めました。そしてまた、百円をシンドバッドにくれました。それから、シンドバッドは、家へ帰って行きました。次の日の晩も、また、お客様たちは集まりました。シンドバッドも、やっぱりやって来ました。シンドバッドは、また、危ない目に遭った話を始めました。すなわち、三度目の航海の話であります。

四、三度目の航海の話

私は、しばらく家にいて、楽しく暮らしているうちに、だんだん苦しかったことや怖かったことを忘れて行きました。そしてまた、新しい冒険がしてみたくまりました。それに、まだ私は、家で静かにしてぶらぶら暮らしている年ではないと思えました。それで、この前の時のように、品物を買集めて、商売の旅に出ました。

商売は、どの港でも大変都合よく行きました。品物がどんどん売れて行きました。そして、今度こそは、酷い目にも遭わないで済みそうだと思っている矢先、ある日、大嵐がやって来ました。船は、すっかり方向が分からなくなってしまう、船長でさえも風下のある島の影へ来るまでは、どこをどう進んでいるのか皆目分らないというほどでした。仕方がないので、私どもは、ともかくも、その島の影で嵐を避けるために錨を下ろしました。けれども、船長がこの島をつくづくと見た時に、急に髪の毛を引きむしって、「……しまった、ここは猿の山に違いない」と、叫んだのでした。

一、猿の山と大入道

それから船長は、この島へ来て、生きて帰った者はないのだ、という話をしました。なぜかと言うと、この島には、人よりも猿によく似たものがたくさん住んでいて、おまけに大そう喧嘩好きだということです。船長のこの話が終らないうちに、もう小さなやつが大勢、海岸へ出て来たかと思うと、船をめぐってぼちやぼちやと泳いで来はじめました。

それが近づいて来た時、よくよく見ると、一寸法師のようで、猿よりも憎らしいのです。そして、体中に赤い毛がぎっしり生えていました。やがて船に泳ぎ着くと、みんなして船を海岸へ引っぱって行きました。そして、私どもを陸に追い上げて、今度は自分たちばかりが船に乗って、ほかの島をさして漕いで行きました。

私どもは、怖々そこらじゅうを歩いてみました。そして、果物や木の根を見つけて食べました。夕方になってから、向うに高い御殿が立っているのが見分かりました。それで、そこに隠れるところがあるかも知れないと思って、行って見ることにしました。御殿には黒檀の大きな戸が閉まっていました。押すと、すぐに開きました。私どもは、中庭へ入って行きました。誰もいないで、ひっそりとしていました。

しかし、しばらく見まわっているうちに、骨を小山のように積み重ねてあるところへ来ました。そこには、物を焼く時に使う金串が一杯散らばっていました。わけが分からないものですから、私たちは、だいぶ長い間、じっとそれを見ていました。すると、太い雷のような音が聞えて来ました。みんながその方を振り向くと、ちょうど黒檀の戸がそろそ

ろと開きかかっているところでした。そして、紅と金を混ぜたような夕焼けの空の中に、ぬうーつと現われたのは、恐ろしい大入道でした。

その大入道は、松やにのよにまつ黒な色をしていて、棕櫚の木のよに背が高いのです。額の真ん中に一つまつ赤な目がありました。それはちようど石炭が燃えている時のよにぎらぎら光っていました。口は真つ暗な井戸のよで、唇は、駱駝のよに胸までぶら下がっていました。そして、耳は象のよに大きくて、肩の辺まで垂れていました。また爪は、鷲のよに尖っているのです。

二、毎晩、一人金串に刺して食べる

私どもは、この大入道を一目見るやいなや氣を失って、そのままそこに倒れてしまいました。やがて、息を吹き返してみると、大入道は、私たちを一人ずつつまみ上げて、そのまつ赤な目で丁寧調べているところでした。すぐに私がつまみ上げられました。私は、高いところでぶらんぶらんしていました。大入道は、ぐるぐる私をまわしながら体の方々をつねってみるのです。太っているかどうかどうかこうして調べるのです。やがて、私が骨と皮ばつかりに痩せているのが分ると、下へぼーんと投げました。それから、また、仲間の一人をつまみ上げました。この人もくるくる回されたりつねられたりして苦しうでした。その次には船長をつまみ上げました。この人は、みんなの中では一番太っている人です。大入道は、にやりと笑って、船長を金串にぶすりと差し込みました。そして焼き始めました。それから船長を夕飯にして食べてしまうと、ぐうぐう眠り始めました。そのいびきは、一晚中、雷がごろごろ鳴り響いているようでした。

そして朝になると、私たちには目もくれないでさつさと出かけて行きました。すぐに、私どもは、寄り集まって自分たちの不運を悲しみ合いました。そして、どこかほかに隠れ場所を探そうと思つて、御殿を出て行きました。しかし、島じゆうどこにもそんなところはありませんでした。夜になって、仕方なく、また御殿へ帰つて来ました。すると、まもなく大入道も外から帰つて来て、また仲間の一人をつかまえて、昨日の船長と同じようにして食べてしまいました。

三、筏を作り始める

次の朝、大入道が出かけて行つた後、私どももやつぱり出かけました。今度は、もう一度、この御殿へ食べられに帰つて来るくらいなら、いつそ海へ身を投げて死ぬ決心でした。それから、方々探してもやつぱりどこにも隠れ場所はありませんでした。そして、出るともなく海岸へ出てしまいました。すると、仲間の一人が、「……私たちは、もう神様に見離されてしまったのです。あんなにして一人一人殺されて行くよりも、いつそみんな一緒に死んでしまおうじゃありませんか」と言いました。「……なるほど、それももつとです。しかし、まあ皆さん、私の考えも一つお聞きください」と、私はそれに答えてから、口を切りました。それから、「……このあたりに流れついている流木を拾つて、筏を作りますしよ。そして、若しもあの大入道を殺すことが出来なかつたら、それに乗つて、逃げたらよいじゃありませんか。いかがです」と相談してみました。すると、みんなこの

話に賛成してくれました。

四、大入道の目を金串で刺す

そして、夕方までに筏を作り上げて海岸につないで置きました。さて、それから、帰りたくもない御殿へ、いやいやながら帰って行きました。きつと今晚も誰かが殺されて食べられてしまうに決まっています。大入道は、また一人をいつものように夕ご飯にして食べると、大いびきで寝てしまいました。そこで私どもは、静かに大きな金串を二つ取り上げました。そして、かっかっかと石炭が燃えている中へつつ込みました。そして、それがまっ赤になるのを待って、こっそりと大入道の寝ているそばへ近寄って行きました。それから、みんなで力を会わせて、その金串を大入道の目の中へ突き刺しました。

大入道は、恐ろしい唸り声を立てて、痛いのと腹が立つのとで飛び起きました。そして、腕を伸ばして私どもを捕まえようとしていました。けれども、もうめくらになっっているものですから、私どもはうまく逃げまわって隅の方にうつ伏せになっていました。それでとうとう一人も捕まえられませんでした。

大入道は、わあわあ泣きながら、やつと黒檀の戸のところまで行きました。そして、手さぐりで戸を開けて、真っ暗な闇の中へ消えて行ってしまいました。その泣き声がいっまでもいつまでも夜の空にゴーンと鳴り響いていました。

私どもは、すぐに筏を繋いであった海岸をさして走って行きました。そして、そこで大入道が死んでしまったのか、まだ生きているのか分かるまで待つことにしました。けれども、やっぱり私たちは運が悪かったです。夜が開けて行くに従って、雷のような足音が聞えて来はじめました。それは、怒ったあの大入道が仲間を二人連れて来る足音でした。二人ともさっきの大入道に負けず劣らずの恐ろしく背の高いやつでした。私どもは、それを見るやいなや大急ぎで筏に乗りました。そして、沖へ向って漕ぎ出しました。すると、大入道たちは、岩を拾っては、筏をめがけて投げ始めました。そのために私の筏よりほかの筏は、みんな海に沈んでしまいました。

私の筏には、ほかに二人の仲間が乗っていました。三人ともどうしてもここから逃げたいと思いました。それで、ある限りの力を出して漕ぎました。それで、まもなくほかの島へ着くことが出来たのです。この島には大そう美味しい果物がありました。私どもは、食べたり休んだりして、しばらく疲れを癒やしていました。

五、木の上で大きな蛇を逃れる

すると俄に、ぎーぎーと恐ろしい響きが聞えて来ました。そして私どもは、何だか急に気分が悪くなってしまうました。仕方がないのでじっとしていますと、とても大きな蛇がぬうーっと這い寄って来ました。そして、あつという間に仲間の一人を呑んでしまいました。「……ああ、やつと一つ逃れたと思えば、今度は前よりもつと悪いことがやって来る。ほんとうにどうしたらここから逃げて行くことが出来るのだろう」と言って、私たちは嘆きました。それでも助かった二人は、走り続けて、やつと高い木の下まで来ました。そして、大急ぎでその木へ登りました。その木には、運よくも果物がなっていました。そ

こで二人は、まずお腹をこしらえました。

その夜、私は、一番高い枝に登っていましたが、また蛇のざーぎー言う音で目を覚ました。すると、どうでしょう、蛇は、木にぐるぐると巻きついて、今にもたった一人の私の仲間を呑もうとしているのです。そして、あつという間もなくまた大きな口を開けて、ぺろりと呑み込んでしまいました。「……ああ、こうなっちゃ、もうどうしたってだめだ。番に呑まれるのをじっと待っているよりも、いっそ崖の上から海へ飛び込んで死んでしまおう」と、こう私は独り言を言いました。けれども、海辺まで来てみますと、そんなことをするのは、あんまり意気地がなさ過ぎると考えたのです。

そこでまた引き返して来て、木の枝だの葦だの茂たのをできる限り集めました。そして、それを束にして、しっかりと結わえ、それで以て木の下に円い小屋のようなものを立てました。そして、その天辺を固く固く結び合わせて、どこにも蛇が入って来る隙間がないように丁寧に作り上げました。

さて、その晩も、恐ろしいざーぎー言う音が聞えて来ました。けれども、蛇はただ小屋のまわりをぐるぐるとすべり回っているだけでした。私は、恐ろしさのあまり死んだ人のようになって震えながら夜を明かしました。こうしてまた、私は助かりました。そして、海辺へ出て行きました。今度こそは、もう身を投げて死のうと決めて行つたのです。あんな恐ろしい目に遭うのは、とても我慢が出来ないと思つたものですから。

しかし、有り難いことには、海辺に立つて沖の方を眺めていますと、一艘の白帆がこちらへ近づいて来るのが見えました。私は頭巾を取って夢中になって振り回しました。すると、まあ何て嬉しいことでしょう、その船からはボートを下ろしました。私を助けに来るのです。まもなく、私はその船に乗ることが出来ました。そして、一切の話をしました。誰も彼も私を可愛そうに思つて、大変親切にしてくれました。そして、新しい着物を出して来て、「……そのぼろぼろになった着物とお着替えなさい」と、言ってくれる人もありました。そのほかいろんなことをして私を慰めてくれたのです。

六、港でシンドバットの多くの荷物が

そんなににして、航海を続けているうちに、白檀の木が一杯生えている島へ着きました。そこで錨を下ろして、商人たちは、島の人たちと取引をするために陸へ上って行きました。そのあとで船長が私を呼んで言うには、「……実は少しお願いしたいことがあるのですが、聞いて下さいませんか。ほかでもありません。まあ、この沢山の荷物を見てください。これはみんなこの船に乗っていたバクダッドの商人のものなのですが、気の毒なことには、その人がある島へ置き去りにしてしまつたのです。それで私は、この荷物をみんな売り払って、そのお金をその商人の家の人にあげたいと思つているのですが、あなたこれを陸へ持って上って売って下さいませんか。もちろん、分け前は差し上げるともりなんです」と言うのです。

そこで、私は、「……それは結構なお考えです。だがその商人の名前は何と言うのですか」と聞いてみました。すると、船長は、「……シンドバッドと言うのです」と、答えただけではありませんか。私は、行李についている私の名前を調べてみました。それから船長に、「……その人は本当に死んだのですか」と聞きました。船長は、「……それが気の毒

なんです。とてもあの島では助かっている見込みはありません」と答えました。そこで、私は船長の手を取って、「……船長、私の顔をよくご覧ください。あなたは、この顔に覚えはありませんか。私こそ、そのシンドバッドです。あのロックの島に取り残されたシンドバッドです」と言いました。そして、船長にいろいろ怖い目に遭った話をして聞かせました。そのうちにだんだん私がシンドバッドだということが分かって来ました。そして、大喜びで品物を（みんなと今までにほかの島で私の品物を売って儲けたお金とを）私に渡してくれたのでした。

それから、間もなく、私たちはバクダッドに着きました。私は、今度の商売では、とても数え切れないほどお金を儲けていました。それでもっと多くの土地を買い、また、たくさんのお金を貧民たちに施しました。そして、間もなく、危なかったことや苦しかったことをみんな忘れてしまいました。

*

*

そこで、三度目の航海の話は、終りました。シンドバッドは、また、ヒンドバッドに百円やるようにと、召使に言いつけました。それからまた、ヒンドバッドは、四度目の航海の話（はなし）を聞きに来るのでした。

五、四度目の航海の話

三度目の航海の後（あ）は、私は大変豊かに仕合せに暮らしていました。しかし、皆さん、呆（あ）れてはいけません。また私は、ただお金持でぼんやり家にいるのでは、どうも満足が出来なくなりました。旅をして、いろいろの冒険をしたいと思う心が、抑（お）えても抑（お）えてもどうしても止（や）みませんでした。

私は、また商品を買集めました。そして、仲間の商人と一緒に船に乗って、外国の港をさして出かけました。船は、いろいろの港に着きました。私どもは、それぞれお金儲けをしました。ところが、ある日、大嵐（あらし）がやって来たのです。そして、船長でさえも船をどうすることも出来なくなってしまうました。

帆（ほ）は風のためにぼろぼろに千切られて、まるでリボンのようになってしまいました。波は、何遍（なんべん）も何遍（なんべん）も甲板（かんぱん）の上を洗って、そのうちに船はどうとう沈み始めました。乗組員とお客様の大部分は、溺（おぼ）れてしまいました。しかし、私ども二、三人は、やっと板切れに取り付くことが出来たのです。そして、一晩中（じゆうちゆう）、恐ろしい思いをしながら波に漂（た）っているうちに、ある島へ流れ着きました。「……生きているより、死んだ方がましだった」と、そう思いながら、夜が開けるまで海岸に倒（た）れていました。

一、人喰（く）いの野蛮（やばん）人の群（ぐ）れが

やがて、朝になつてから、何か食べるものが欲しくなつたので、島の奥（おく）の方へ歩いて行きました。大して歩きもしないうちに、まっ黒な野蛮（やばん）人の群（ぐ）れに行き会いました。この野蛮（やばん）人どもは、すぐに私たちを取り巻いて、自分らの小屋の方へ引っぱって行きました。そして、まず初めに食べ物をくれました。私の仲間（仲間）は、それをががつ言（い）って食べました。けれども私は、もともと用心深い（用心）人たちですから、食べる風だけしておきました。なぜかと言

いますと、どうもこの野蛮人どもは、人間の肉を食べているらしく思われたからです。

でも、本当に食べないで良かったのです。私の仲間は、食べ物呑み込むとまもなく気を失ってしまいました。そして、やがて気がついた時にはもうすっかり気違いになっていました。これはどう見ても、野蛮人どもが何か企んでるのに違いないと思えました。その次にまた、ご飯の上にやしの油をどっさりかけて持って来ました。この時は、「……はーあ、こうしてみんなを太らせておいてから食べるんだな」と分かりました。それで、私は一層怖くなりました。それからはいよいよ何にも食べませんでした。それで大変痩せてしまい、誰だつて殺して食べようとは思わないほどになってしまったのです。

さて、ある日、年取った野蛮人がただ一人番をしているきりでみんな出て行ってしまったことがありました。それで私はやすやすと抜け出すことが出来ました。私はできる限り大急ぎで森の中へ走って行きました。そして、そこで七日ほど過ごしました。しかし、やがてまた走り出て、とうとう島の反対の川へ行きつきました。そこには、西洋人たちが、コショウ取りに来ていました。そして私を見て、大変びっくりしました。それから私の話を聞いて、なおなお驚いてしまいました。「……あの野蛮人どもは、誰だつて見つけ次第、殺して食べてしまうのです。無事に逃げ出して来たのは、きっとあなた一人でしょう」と言うのでした。

二、馬の鞍作りと島の娘との結婚

それから、私を自分たちの船に乗せて、その国へ連れて行きました。そして、王様のお目通りへと連れて出ました。それから、みんなはなかなか親切にしてくれましたが、王様も特別にお取り立て下さって高い位につけて下さいました。

さて、その島は、大変お金のたくさんある島でした。そして、都では盛んに商売が行なわれていました。私もすぐに仕合せになって満足していました。しかし、この島で驚いたことには、誰も彼も馬によく乗るのですが、鞍やあぶみや手綱を使う者がいないのです。それで、ある日、私は王様に、「……陛下、なぜこの国では鞍を付ける人がいないのですか」と伺って見ました。すると王様は、不思議そうな顔をなすって、「……何を言ってるのかね。わしはまだそんな言葉を聞いたことがないよ」と、おっしゃるのでした。

そこで私は、なめし皮を作る職人の中から、利巧そうなのを一人連れて来て、立派な鞍を作ることを教えました。そして、私もまたあぶみだの拍車だの手綱だのを作りました。そして、これらがみんな出来上ってから、揃えて王様に差し上げました。そして、どういふふうに使おうということもお教えしました。すると、すぐに王様はそれをお使いになって大層お喜びになりました。また、それを見て、身分の高い人たちは、誰も彼も欲しがりました。それで私はまたみんなに作ってやりました。

さて、そのうちに私は、この島でも指折りの金持になって行きました。王様は、とうとう私にこの島の美しい娘と結婚をして、この島の人間になってしまおうようにとおっしゃいました。私は、その美しい娘というのを見ました。すると、王様のご命令通りにしたくなりました。それから二人は、一緒に仲よく暮らして行きました。私は、そろそろバクダツドのことを忘れ始めました。

しかし、ある日のことでした。大変なことが起ってしまいました。というのは、私がふ

だん仲良くしていた近所のお上さんが死んだのです。大変気の毒に思ったものですから、すぐお悔やみに行きました。そして、「……あんまりよくよなさらないように。お上さんはああして早くお亡くなりなすつても、そのかわりにあなたが長生きがお出来になりましょうよ」と、私は言いました。

三、その島の衝撃的な掟とは……

その人は、俯いたままじつと私の言うのを聞いていましたが、やがて、「……よししてください。どうして、あなたは、私がこれから長生きが出来るなんておっしゃるのです。私はもう二、三時間したら家内と一緒に埋められてしまう身じやありませんか。」「……ああ、あなたはまだこの国の掟をご存じなかったのですね。ここでは妻が死んだら夫はそれと一緒に埋められるのです。そして、もし夫の方が先に死ねば、妻がそれと一緒に埋められるのです」と言うではありませんか。「……まあ、何て恐ろしいことだろう。そんなことは、とても本当とは思われぬ」と、私はそれを聞いて、こう叫びました。

そこで、王様にこのことを伺いました。すると王様は、ただそれはこの国の掟なんだからそうされるのだ、とおっしゃったきりでした。それから誰に聞いても、これを不思議に思っている人はありませんでした。まあ何て怖いことだろう、何て嫌なことだろう、と思っているうちに、とうとうそれが私の身の上に降りかかって来ました。ある日のこと、私の妻が病氣になったのです。そして、わずかの患いの後、とうとう死んでしまったのです。すると、町の人がやって来て、妻に一番いい着物を着せました。そして、髪には寶石を飾り付けました。それから高い山の上へ運んで行くのでした。

山の上には石が一つ置いてありました。その石を持ち上げると、下は深い深い穴になっていました。そしてその中へ私の妻は落されてしまいました。私は、どうか助けてくださいとずいぶん頼みました。しかし、誰も私が何を言っているのか聞こうともしませんでした。せつせと小さいパンを七つと水差しに一杯の水とを用意していました。そして、それを私に持たせて、穴の中へつき落とし、石の蓋をしてしまいました。

私はたった一人、暗い穴の中に閉じ込められてしまったのです。しばらくの間は、泣くにも泣かれませんでした。それから七日の間は、ともかくも、少しながらもパンと水がありましたから生きていることが出来ました。しかし、それもとうとうなくなってしまう時、私はいよいよ死ぬのだなと思いました。その時、急にほら穴の向う側に何か生きた物が跳び込んで来たのが目に入りました。そして、その小さなねずみ色をしたものが、私の前をびよんと跳んで行きました。

四、その島から抜け出ると

私は、はっと立ち上りました。そして、その後を追いました。すると、まもなくそれが岩の割れ目の中へ入って行きました。私もまた思い切つてその中へ飛び込みました。中は大へん窮屈でした。おしつぶされるような思いをしながら、なおもそのあとをつけて行きました。そして、これはずいぶん来たもんだな、と思つた時でした。気持のいい海の風が熱くなつていた私の頬にさつと吹いて来たのです。まもなく私は、ほら穴から抜け出すこと

が出来ました。そこは青々とした空の下の海辺でした。

私がついて来た小さな獣は、きつとこの道から入ったのでしよう。それで出る時、私に道案内をしてくれたようなものでした。それからまた、私は勇気を起して元来た道へ引き返しました。そして、ほら穴の中に散らばっていた宝石を拾い集め、それを行李に詰めて、また海辺へ出て来ました。そして船が来るのを待つことにしたのです。

一日中、私はじつと沖を見つめていました。やつと次の朝になって、うれしや、とうとう一隻の船を見つけることが出来ました。私は、さつそく頭巾を解いて振りました。それから、大きな声で叫びました。すると、まもなくボートが下ろされて、私の方へ漕いで来ました。「……どうしてこんなところへいらつしやつたのです。私たちはまだこの海岸に人がいたのを見たことはありませんよ」と、ボートの水夫たちは言うのでした。

その時、私は、どうしても墓穴から出て来たのだとは言うことが出来ませんでした。もしも元のところへ連れ返されたら、大変だと思ったものですから。それで、「……二、三日前、難船して、やつとこの行李だけ持って上ったのです」と、言っておきました。都合のいいことには、水夫たちはもう何にも問いませんでした。そして、すぐにボートを漕ぎ出して、私を本船へ連れて行ってくれました。

こんなふうにして、また無事に帰って来ました。もちろん、前よりも一層金持ちになりました。そして、あんな恐ろしい目に遭っても助かったとは、まあ何て有り難いことだろうと思つたのでした。

*

*

ここで、シンドバッドは、止めました。そして、ヒンドバッドは、また百円もらい、また明日の晩も来るようにと、その時は、五度目の航海の話をするからと言うのでした。

六、五度目の航海の話

さあ、これから五度目の航海の話を始めようと思います。(それは、翌の晩、みんながテーブルのまわりに腰を掛けた時に、シンドバッドは、こう口を切りました。)

ご存知のように、今までずいぶん酷い目に遭っているながら、私の冒険好きはやつぱり止みませんでした。家の中にじつとして居ることが焦れつたくて、またまた海へ行きたくてたまらなくなつたのです。

そして、今度は他人の船に乗らないで自分の船を作りました。そうすれば、どこへだつて行きたいと思うところへ行けますし、従つて、したいと思うことをやって商売が出来るわけです。さてこの船は、かなり大きなものであり、ほかに五、六人の商人も乗り込んでもらいました。そしてまた、海へ乗り出しました。それから、五つ六つの港へ着きました。商売は、とんとん拍子に運びました。そうするうちに、ある日のこと、不思議な白い円屋根のある沙漠のような島へ来ました。私はすぐに「……ははあ、ロックの卵だな」と思いました。しかし、ほかの人たちは、まだ誰も見たことがないと言うのです。そして、ぜひ見てみたいから上らせてくれと言うのです。仕方がないので許しました。

その人たちは、近づいて行って、不思議そうに見ていました。ちょうどその時は、ロツクのひなが今にも孵りそうになっていた時で、少し口ばしで殻を破ろうとしておりました。すると商人たちは、私が止めるのも聞かないで、この卵を壊してしまいました。そして、

ひなのロックを引き出して、料理をし始めました。私は、そんなことをすると、きつとあとで怖い目に遭うに違いないから、およしなさい、およしなさい、と言って止めました。しかし商人たちは、構わずどんだんいろんな御馳走を作っていました。

一、大きな鷺に襲われて

すると、それからすぐでした。急に空が真つ暗になって、あのロックの大きな黒い両翼が私たちの頭の上へ覆い被さって来ました。私たちは命からがら船へと帰って、船長は、さつそく船を出しました。親鳥が大変怒っているということが分かりましたから。

恐ろしい大きな鳥は、すぐに海の上へ追っかけて来ました。空は見る見る真つ暗になってしまいました。見上げると、大きな両翼がびゅーんびゅーんと風を切っています。尖った爪の間には、大きな石を幾つも幾つも持っていました。それは石というよりも、岩と言いたいくらい大きなものです。

船の真上へ来た時、持っていた石を一つ落しました。石はびゅーつと唸りを立てて落ちて来ました。幸い、それは船には当たりませんでした。すぐ近くの海がまっ二つに裂けて、船のまわりには海の底の砂の混じった波が、まるで壁のように立ち上りました。やれ、うれしやと思つて上を見上げると、まあどうしましよう、もう一羽ロックがやって来ているではありませんか。そして、しつかりと狙いを定めて、今にも石を落そうとしているのです。ああ、とうとう船はだめでした。みじんに砕かれてしまいました。つぶされて死ななかったものは、海の中へ放り出されて、波のまにまに沈んで行きました。

二、ある島でお爺さんを肩車に

しかし、運のいいことには、私は浮いていた板に取り付くことが出来ました。そして、足をぶらぶらさせているうちある島へ着きました。ほんとうに全くこの島にこそは、私は驚いてしまいました。きつと世界で一ばん美しい島だろうと思います。今まで食べたことのないような美味しい果物や、それはそれは美しい花がそこら一面にあつて、綺麗な小川がさらさらと流れていました。私は、これまでの恐ろしさも疲れも忘れてしまつて、涼しい木蔭に休みました。

翌る朝、散歩かたがた果物を取りに出かけました。そして、何だか哀れに見えるお爺さんが小川の堤にじつと座っているのに会いました。その人は、大層年を取っているらしいのです。そして、さもさも弱っているようでした。私は大変可哀想になつてしまいました。それで、「……もしもし、ここで何をしていますか。難船でもなすつたのですか」と聞いてみました。けれども、そのお爺さんは、悲しそうに首を振つただけでした。そして、この小川を渡らせてくれと手まねで頼みました。私は、機嫌よく、よろしいと言つて、しゃがんで、その人を肩車に乗せました。お爺さんは、思ったよりも重うございました。

私は小川を渡りました。それからその人を下ろそうとしました。するとどうでしょう、お爺さんは、降りようとはしないで、両方の足でますます私の首を強く締めていくのです。私は息が出来なくなりました。そして、とうとうあつと言つたきり気を失つてしまいました。

た。それから、しばらくして気が付きましたが、やっぱりお爺さんは、私の肩に跨がって
いました。そして、痩せて尖ったその膝で私をうんうん突き始めました。それがとても痛
いのです。私はたまらなくなつて、起きてまた歩き始めました。そして、その人が行けと
いう方へ行くよりほかどうにもしようがありませんでした。

それから、毎日毎日、口では言えないほどの苦しみをしました。一分間も変なお爺さ
んは、私の肩から降りようとしません。私が寝ている時でもそうなのです。そして、
初めのように尖った膝でうんうん私を突いては、おつ立てて行くのです。そして、自分
しよつちゆう果物を取つて食べているのです。私も元より取つて食べました。そうしな
ければ、お腹が空いて死んでしまいそうでしたから。

三、お爺さんが葡萄酒を飲むと

さて、ある日のこと、私どもは大変たくさん瓢箪が生つているところへ来ました。そ
して、そのうちにたった一つ中が空になつて日干しになつている瓢箪がありました。私
はそれを取つて、その中へ葡萄酒の汁を絞り込みました。そして、日のよく当たりそうなと
ころへぶら下げおきました。それからまた、あちらこちらと歩きまわつて、四、五日経
つてから、瓢箪のところへ行つて見ますと、どうでしょう、美味しい美味しい葡萄酒が
出来ているではありませんか。

私は、大喜びでぎゅうぎゅう飲みました。すると急に元気が出て来て、何だか嬉しくな
りました。そして、思わず歌を歌つたり踊つたりしました。肩にいたお爺さんは、吃驚し
てしまいました。そして、手真似で自分にも飲ませてくれと言いました。私は仕方がない
ので瓢箪を渡しました。その瓢箪は、大変大きなものでした。それでお酒もずいぶん入
つていたわけです。お爺さんは、それを一滴も残さないまで飲んでしまいました。それか
ら、変な声で何かしやべり始めました。そして、次第に足をゆるめて行きました。私は、
この時とばかりうんと力を込めて、お爺さんを地面の上へ放り出しました。お爺さんは、
投げ出されたまんま起き上ろうともしませんでした。

私は、やつと重荷を下ろしてせいせいしました。そして、にこにこしながら海辺の方へ
歩いて行きました。ちょうど海辺には五、六人の水夫が、樽を持って水を汲みに上つて来
たところでした。私を見て目を丸くしながら、「……お前さん、こんな島へ何をしに来た
んだね」と、こう尋ねました。私は、船が壊れてからの一部始終を話しました。すると、
その人たちはますます驚いてしまいました。そして、「……そんな危ない目にあつても、
助かつたなんて、まあ、なんてお前さんは運のいい人なんだろう。だが、その肩に乗つて
つたというお爺さんはね、海爺と言つて、そいつに捕まつたが最後、助かりっこはな
いんだよ」と言いました。それから、私を船へ連れて行きました。

四、猿を使つての椰子の実狩り

そのうち、船は大きな港に着きました。その港の町の家は、みんな石で作つてありまし
た。そこで今まで大変親切にしてくれた一人の商人が、私にみんなと一緒に椰子の実を取
りに行かないかと勧めました。そして、「……これをお持ちなさい」と言つて、大きな袋

を渡しました。それから、「……決してみんなにはぐれて勝手な所へ行っちゃいけませんよ。みんながするようにするんですよ」と言いました。

さて、それから私たちは、随分遠い椰子の木ヤシの森へ行きました。椰子の木は、大層背が高くて、まっすぐでおまけに幹がすべすべしていました。私は、これではとても登れないだろうと思いました。そして、一体どうして実を取るのだろうかと待っていました。

それから、みんなはうんと椰子の木のそばへ近づきました。その時、私は、木の枝に猿がたくさん登っているのに気がつきました。そして、その猿は、私たちを見つけてるが早いか、ぐんぐん上の方へ登って行きました。すると、みんなは一斉にこの猿に向って石を拾っては投げ、拾っては投げ始めました。私は、ずいぶん酷いことをすると思いましたが。それで、「……どうしてそんなことをするんです。猿は何にも悪いことなんかしやしないじやありませんか」と聞きました。

しかし、すぐにその訳が分かりました。猿が椰子の実を挽いで、どんどんこちらへ投げ始めましたから。私たちは、大急ぎでその椰子の実を拾って袋へ入れました。それから、またまた石を投げました。すると、猿もますます椰子の実を投げてよこしました。みんなの袋が一杯になってから町へ帰りました。そして商人に売りました。

私は、それから間もなくバクダッドへ帰って来ました。帰り道、方々の島へ寄ってハツカダの伽羅キョラの木だの真珠だのを買い集めました。そして、家へ帰ってから、それらの品々を売りました。すると、どうして使っていないか分からないほどたくさんのお金が入りました。

*

*

ここで、シンドバッドは、御馳走を持って来るようにと言いつけました。そして、シンドバッドが家へ帰る前に、また百円やるようにとも言いました。召使はその通りにしました。次の夜、たくさんのお客様と荷担ぎのヒンドバッドとが、いつものところへ腰を掛けた時に、シンドバッドは、六度目の航海の話を始めました。

七、六度目の航海の話

今度は、まる一年家に居ました。その間、また航海に出る支度をしていました。友達とか親類の者たちは、行かせまいとしているんなことを言っ引き止めにかかりましたが、私はどうしても承知しませんでした。まもなく今度は、うんと長い航海をするつもりで出かけました。けれども、この航海は、初めから都合よく行きませんでした。すぐに酷い大嵐にあつて、風のまにまにあちらこちらと流された挙げ句、とうとう船長も水先き案内もどこをどう走っているのか、だんだん頼りなくなつて行くばかりでした。

すると、ある時のこと、俄に船長が頭巾を脱ぎ捨てたかと思うと、ぐんぐん髪の毛を引きむしって気違いのようになつてしまいました。みんなはびっくりして、ばらばらと船長のそばへ駆け寄って行きました。「……どうしたんです、どうしたんです。気をしっかり持つてください」と、てんでに言いました。すると船長は、「……もうだめです、もうだめです。船は危ない潮の流れの中へ入ってしまったました。もう二、三分したら、何もかも微塵に砕けてしまうでしょう」と言うのでした。

まったくでした。船長の言葉が終るか終らないうちに、船は、気味悪くすうーつと走り

出したかと思うと、見る見る険しい山の裾の岩の折れ重なった海岸へどんと突き当たってしまいました。そして、粉微塵こなみじんになってしまいました。けれども、みんな不思議に助かりまして、積んでいた荷物と少しばかりの食べ物と一緒に岩の上へ打ち上げられたのです。海岸には難破船なんぱせんのかけらとまっ白になった骨ほねとがたくさん散らばっていました。

一、難破船が漂着した海岸は

船長は悲しげに、「……さあ、皆さん。死ぬ用意をしましょう。今までにこの海岸に打ち上げられて助かった人はないのです。ご覧の通り、後あとはとも登ることの出来ない山ですし、また、助け船が来ることの出来るところでもありませんから」と言いました。しかし、そうは言っても、食べ物をみんなに分けてくれました。ともかくも、生きていられる限りは、生きていた方がいいと思ったからでした。

さて、この島で私が驚いたことは、大変きれいな川が山から流れ出ているのですが、それが海へ流れ入らないで海岸に沿って少し流れてから、また山すその岩で出来ているほら穴の中へ流れ込んでいることでした。そして、そのほら穴の中を覗いてみますと、その入口の岩は、寶石がはめ込んであるように沢山たくさんきらきら光っています。川底にもダイヤモンドの寶石だのが散らばっていました。それから、海岸のどんな隅すみこのようなどころにも難破船から打ち上げられた荷物が転がっていました。

二、筏いかだで岩穴の中を流れて行く

さて、私の仲間は、食べ物なくなるに従って、一人一人と死んで行きました。それは、次から次と埋めてやりました。そして、とうとう私一人になってしまいました。私は、もともと、何でもほんの少ししか食べないたちでしたから、それで私の食べ物が一番おしまいまで残っていたのでした。「……ああ、悲しいことだ。私が死んだら、誰が埋めてくれるのか。ああ、どうしてももう自分の国へ帰ることは出来ないのか」と。

ある日のこと、そんなことを思いながら川の縁かみを歩いていました。そして、岩穴の中へ流れ込んで行く水をじっと見つめていました。そのうち、ふとある考えが浮かびました。それは、この川は、一たんは山の中へ流れ込んでいるけれど、きつとまたどこかへ流れ出ているに違いない。そして、この川を下くだってみたら、ひよつとしたら助かることが出来るかも知れないということでした。

それから、急に元気が出てきて、海岸に散らばっている木や板を拾ひろって来て、丈夫な筏いかだを組みました。そして、たくさんのダイヤモンドだのルビーだの難破船の荷物だのを積みました。それから忘れないで少し残っていた食べ物も積みました。そして、よくよく気をつけて筏いかだを岸から離はなしました。すると、すうーつと気持よく走り出して、すぐに真まつ暗くらなほら穴の中へ入りました。どんどんどんどん私はその真まつ暗くらな中を流れて行きました。川幅は、だんだん狭はばくなって、天井も次第に次第に低ひかくなって行きました。そして、頭をこつんこつんと打うってだんだん苦くるしくなりました。それで私は、筏の上へべちゃんこに腹はら這はってしまいました。

三、筏の流れ着いた先は……

やがて食べ物も、とうとうみんな食べてしまいました。今度こそ、いよいよ死ぬのだと私は諦めました。そして、いつの間にか眠ってしまいました。何時間も何時間もそのままでした。——ああ、その時、どんなに喜んで飛び起きたか、お察してください。私の目には青々とした大空が入ったのです。川は静かに広々とした田んぼの中を流れていました。

変な声だと思ったのは、黒んぼが大勢寄って集って、私の筏を土手の方へ引っばって行こうとしていたのです。私には黒んぼの言っていることがちつとも分かりませんでした。しかし、その中にたった一人アラビアの言葉を話せる男がいました。それがこう言うのです。「……まあ、静かにしていらいしやい。……あなたは、一体、誰ですか。どこからいらっしたのですか。私どもはこの国の者です。田んぼへ出て働いていますと、筏が流れて来て、その上にあなたが眠っていらっしやるので、お助けしたのです。さあ、どうか、ここまでいらっしやったわけを話してください」と。「……ありがとうございます、いや、どうもありがとうございます。お話ししましょう。ですけども、その前に何か食べる物を下さいませんか。お腹が減って声が出そうもないのです」と、言いました。

四、島のセレンジブ王の御殿へ

黒んぼたちは、すぐに食べ物を持って来てくれました。それで私はやっと力がついて、気分もよくなりましたので、何もかも詳しく話してやりました。すると、みんなは、「……この人を王様のお目通りへ連れて出よう」と口を揃えて言いました。それから、私に王様はセレンジブ様というお名前で、世界中で一番偉くて一番の金持だと話して聞かせました。私は、喜んでついて行くことにしました。もちろん、宝石などの入れてある行李も持って行きました。

セレンジブ王の御殿は、大変立派なものでした。私はまだ生れて一度もあんな立派な御殿を見たことがあります。王様は、大層私を労ってくださいました。そして、私の申し上げる話を大変面白そうにお聞きになりました。そして、私がどうぞ自分の国へ帰らせて下さいませとお願いしますと、すぐに船を出すようにと家来にお命じになりました。それから、ご自身でバクダッドの王様へ宛てて手紙をお書きになって、私には立派な土産物を下さいました。

こんなにして私は、バクダッドへ帰って来ることが出来たのです。そして、すぐにカリフ様の御殿へ行って、手紙とセレンジブ王から頂いた土産物とを差し上げました。「……まあ、このコップはたった一つのルビーをくり抜いて拵えたものじゃないか。おやおや中には、まあ、立派な宝石で模様が描いてあるんだな。おや、これはまた象でも飲みそうな大きな蛇の皮じゃないか。ああ、背中の紋がまるで金のように光ってるな。これさえあれば、どんな病気だって治せる」と、こんなふうにかリフ様は、手紙と土産物を持って大喜びなさいました。それから、「……さあ、シンドバットや、セレンジブ王がどんなにお金持でどんなに立派であるか話してごらん」と、おっしゃるのでした。

私は、「……陛下、それはとても私のつたない言葉では申し上げることが出来ないかと

存じます。セレンジブ王は、いつも大きな象に乗っておいでになります。おそばには金色の着物を着た千人の騎兵が仕えているのでございます。そして、王様の金の鎧には、エメラルドで飾りが付いております。まあ、申してみれば、ソロモン王のような暮らしを遊ばしていらつしやるとでも申しませうか」とお答えしました。

王様は、熱心にお聞きになりました。そして、私にご褒美を下さいました。私は、家の者や友達が待っているだろうと思って、大急ぎで家へ帰りました。それから持って帰った宝物を売って、貧乏人に施しをしました。その後は、静かに楽しい日を送りましたので、今までの恐ろしかったことや辛かったことは、遠い昔の夢ではないかとさえ思うようになったのです。

*

*

これで、シンドバッドは、第六度目の航海の話を終りました。そして、お客様たちに明日の晩もまた来て下さいと言いました。翌晩、また、お客様がみんなテーブルについて御馳走が済んだ時に、シンドバッドは、いよいよ一番最後の航海の話を始めました。

八、一番最後の航海の話

さて、六度目の航海の後は、私はもう決してどこへも行くまいと心に決めていました。もう冒険がしたいとも思いませんでした。しかし、ある日、友達を呼び集めて、御馳走をしております時に、召使の一人が入って来て、「……ただ今、カリフ様のお使がお見えになって、旦那様にお目にかかりたいとおっしゃいます」と言うのでした。

私は、お使を通させて、さて、「……どういうご用でございませうか」と聞きました。すると、お使は、「……カリフ様がお召しでございませう。すぐにおいでください」と言うのでした。仕方がないので、私はすぐに御殿へ出かけました。そして、王様の前に出ました。「……シンドバッドや、一つお前に頼みたいことがあるのだがね。それは他でもない。わしは、セレンジブ王に手紙と贈り物を差し上げたいと思うのだが、お前、持って行ってくれまいか」と、王様がおっしゃるのでした。

私は、はつと首をうな垂れました。私の顔は、きっと死んだ人のようにまっ青になっていたことでしょう。「……陛下、せつかく陛下のお頼みではございますが、私はもう決して旅へは出まいと神様にお約束しましたので」と、やっとうお答えしました。それから、ぼつりぼつりと今まで六遍の航海で出遭った実様な冒険のお話をしました。

王様は、びつくりなさいましたが、それでも、「……どうしてもこの使いにだけは行ってくれ」と、おっしゃるのでした。お断りがし切れなくなつて、私は、とうとう「……承知しました」と申し上げてしまったのです。

一、帰途、海賊に襲われる

カリフ様のお使いの船は、バクダッドを出立しました。それから穏やかな航海を続けた後、セレンジブの島へ着きました。町の人たちは、大喜びで迎えに来てくれました。私は、さっそく御殿へ伺つて、役人に私の来たわけを話しました。役人は、私を御殿の中へ連れて行きました。やがて私は、王様の前に出ました。王様は、「……おお、シンドバ

ツド、よく来てくれたね。わしはあれからも時々お前のことを思い出して、もう一度会いたいと思っていたんだよ」とおっしゃるのでした。

私は、カリフ様のお手紙と見事な贈り物とを差し上げました。王様は大変お喜びになりました。二、三日居た後、私は帰ることにしました。そして、自分の国をさして船を急がせました。けれども、またまた帰りの船で悪いことに遭ってしまったのです。ほかでもありません、私たちは海賊に遭ったのです。そして、船は取られるし殺されなかった者は、みんな奴隷に売られてしまいました。私もまた、ある金持の商人のところへ奴隷に売られてしまったのです。

二、奴隷の身で象牙狩りをする

商人は、私を買って帰ってから、「……お前は、職人かね」と聞きました。「……いいえ、商人です」と私は答えました。すると、「……では、矢を射ることが出来るかね」と聞きました。それで私は、「……出来ます」と言いますと、商人は、私に弓と矢を渡して、大きな森へ連れて行きました。それから木へ登れと言いました。そして、「……そこでじつと番をしていて、象がやって来たら射るのだぞ。もしうまく当たったら、すぐに知らせにおいで」と言って、帰って行きました。

一晩中、私は見張っていました。けれども、とうとう来ませんでした。しかし、夜が明けてから、とてもたくさん象がぞろぞろとやって来ました。そこで私は、矢つぎばやに五、六本射てみました。すると、大きな象が一匹ごろりと地の上へ倒れました。ほかの象は、驚いてみんな逃げて行きました。

私は、木から降りて、主人の商人のところへ知らせに行きました。それから、また主人に連れられ帰って来て、大きな象を地に埋めて、そこに印しを付けておきました。こうしておいて、あとで牙を取りに来るのです。その後、ずつと私は、この仕事ばかりさせられました。そのうち、また怖い目に遭うことになったのです。

三、ある象が象の墓地へと導く

ある晩のこと、象が逃げて行くと思いのほか、私の登っている木のまわりを取り囲んで、大きな声で唸りながら足踏みをはじめたのでした。それは、まるで大地震のようでした。そして、とうとう木の根を引きちぎってしまいました。木は、めりめりと大きな音を立てて、倒れて行きました。私は、あまりの恐ろしさに氣を失ってしまいました。しかし、すぐに気がつきましたが、その時、象は、その鼻で私をぐるっと巻いて高く持ち上げ、ぴよんと背中に乗せました。私は一生懸命に背中にかじり付きました。

すると象は、私を乗せたまま歩き出しました。やがて森を抜けて、小山のふもとに着きました。この小山には私は驚いてしまいました。白く晒された象の骨と牙とで埋まっているのです。象は、静かに私を地の上へ降ろすどこかへ行ってしまいました。私は、びっくりして、この象牙の山をしばらく見つけていました。そして、象がこんなに賢い知恵を持っているのに感心したのでした。

象は、私をここへ連れて来て、自分たちを殺さないでもこんなにたくさん象牙が取れ

るということを教えるつもりだったのに違いありません。私は、ここはきつと象の墓地なのだろうと思いました。私はさつそく牙を二、三本拾って町へ急いで帰りました。主人にこのことを話して聞かせたいと思つたものですから。

主人は、私の顔を見ると走って出て来ました。そして、「……まあ、シンドバッドや。私は、あの木の根が掘り返されていたもんだからね、お前は死んだものだと思ひ込んでいたのだよ。もうお前には会えないとばかり思っていたのだよ」と言つて、うれし涙を流しました。私は、さつそく象牙の小山の話をしました。主人は、それを聞くと、喜んで飛び上がりました。それから二人で一緒に小山へ行きました。私の言つた通りだったものですから、主人はますます目をぱちくりさせて、しばらくは物さえ言いませんでした。

四、象牙船に乗ってバクダッドへ

やがて、「……シンドバッド、もうお前を奴隷でなくしよう。これからはお前の好きなようにおし。それからこの象牙をお前も取つたらどうだね。うんと取つて、お金を儲けたらいいだろう。」「……ああ、今まで私の奴隷が何人も何人もこの象狩りのために命を捨てていたが、もうこれからはそんなことをしなくてもよくなったんだねえ。まあ、これだけの象牙があつたら、今に島じゅうが大金持になつてしまふ」と言うのでした。それで私は、もう奴隷ではなくなりました。そして、大変丁寧にしてもらいました。

やがて、象牙船が入つて来る時分になつて、私は、この島にさようならをしました。そして、象牙とほかの宝物を船に一杯積んで故郷をさして帰つて来ました。バクダッドに着くと、私はすぐその足でカリフ様の御殿へ参りました。カリフ様は、私を見て、大変お喜びになりました。そして、「……シンドバッドや、わしはずいぶん心配していたよ。何かまた変なことが起つたのではないかと思つてね」と、おっしゃるのでした。

それで私は、海賊の話と象の話とお聞かせしました。カリフ様は、びっくりなさいました。そして、私の七遍目の航海の話をすっかり金の字で書き印して、カリフ様のお宝物として大事にしまつておくようにと、家来にお言い付けになりました。それから私は、家へ帰つて来ました。そして、それから、ずっと長閑に家に暮らしているのです。

九、最後は……

これで、シンドバッドの航海の話は、終わりました。それから、シンドバッドの方へ向いて、「……さて、ヒンドバッドさん。これでどうして私がこんな金持になつたかがお分かりになつたでしょう。もう私がこうして暢気に暮らしているのを不都合だとは思ひにならないでしょうな」と、言いました。すると、ヒンドバッドは、シンドバッドの前へ出て、丁寧にお辞儀をして、その手にキッスをしました。「……旦那様、あなた様は、そんな辛い目にお遭いになつても、よく我慢をなすつたからこそ、こんなお金持にお成りになつたのでございます。あなた様のなすつた苦勞に比べますと、私の苦勞なんか足元へも寄れないほどでございます。あなた様は、きつと行末永くお仕合せにお暮らしになるでございましょう」と言うのでした。

シンドバッドは、この答えを聞いて、大変喜びました。そして、ヒンドバッドにこれか

ら毎晩ご馳走ちそうをするから食べに来るようにと言いました。そしてまた、金貨きんかを百円やりま
した。それで、その後のち、ヒンドバッドは、とうとうシンドバッドの冒険の話を残らず覚え
てしまいました。(完)

*

*

美女と野獣

美女と野獣

一、ラ・ベルの家族構成

昔々、ある所に、お金持の商人がいて、三人の息子と三人の娘と都合六人の子供を持つていました。商人には、お金よりも子供のほうがずっとずっと大事であり、子供たちが誰もみな賢く幸せに育つようにと、そればかり願っていました。

三人の娘たち、誰もきれいに生まれついて来ている中で、一番末の女の子は、綺麗というだけでは足りなく、それこそ照り輝くように美しく、まだ三つ四つの幼子の時から、ラ・ベル（美し姫）と呼ばれていたのが、大きくなるに従い、美人という言葉は、この娘一人のためにあるようになりました。顔かたちの美しいばかりでなく、心の素直で善い子の娘とは裏腹に、二人の姉たちは、あいにく意地悪でねじけていて、妹の美しい美しいと褒められるのが憎らしくてなりませんでした。それに、この姉たちは、威張りやで見え坊で、世界一大金持のように思い上がって、ほかの商人たちの仲間を見下しながら、侯爵とか伯爵とか貴族の屋敷に呼ばれて、舞踏会やお茶の会の仲間になることを、この上ない名誉に思っていました。そして、妹のラ・ベルがいつも家に引込んでいて、慎ましくお父様に仕えているのを、「……あの子は馬鹿だから」と言って嘲りました。なにしろ、家がお金持なので、娘さんをお嫁にと言ってくるものは、断り切れないほどありました。上の姉たちは、自分より上の身分の者のほかはまるで相手にしませんでしたし、末の妹は、まだわたしは子供で、当分、亡くなった母の代りに父の世話をしなさいと思ひますからと言つて断りました。

二、商売の破綻

ところで、人間の身の上は、いつどこでどう変わるか分かりません。さしも大金持だった商人が、ふとした躓きから、一遍に財産をなくしてしまい、残ったものは、田舎のさやかな住居ばかりになってしまいました。そこで商人は、三人の男の子に言い含めて、てんでんに広い世間へ出て、その日その日のパンを稼げることにしましたが、女の子たちのうち、二人の姉は、自分たちは町に大勢ちやほやしてくれる男のお友だちがあつて、いくら貧乏になつても、きつとその人たちは見捨てずにいてくれると威張っていました。けれど、いざとなると、誰も知らん顔をして、よりつこうともしないどころか、これまでお金のあるのを鼻にかけて、高慢に振る舞っていたものが、そんな様になって、いい気味だと言つて笑いました。それとは違って、末の娘のことは、誰も気の毒がつて、びた一文持たないのは承知で、ぜひお嫁に来てもらいたいという紳士は、後から後へと絶えませんでした。娘は、こうなると、よけいお父様のそばを離れることは出来ないと思つて、どんな申込みも断るのでした。

三、田舎暮らしへ

こんな次第で、一家は、否応なしに田舎の小さな家に移りました。そして、三人の男の

テーブルにはちゃんと一人前のご馳走とお酒の支度がしてありました。

商人は、なにしろ肌の下まで雪が染み通っていたので、構わず炉の火で体を乾かしながら、独り言のように言いました。「……ごめん下さい。いづれ出ておいでになることと思いますが、このお家のご主人様なりお召使の方なりどうか火に当たらせていただきます」と言うのでした。

六、寝て起きた翌朝、薔薇を一枝折ると、突然、

こう言つて、しばらく待つていましたが、誰も出て来るものがありません。時計は、十一時を打ちました。が、もうお腹が減つて気が遠くなりそうなので、テーブルにあつた若鶏を一切れおつかなびつくら食べてしまい、ぶとう酒も四、五杯飲みました。これでお腹ができる元気も出てきて、ゆつくりとそこらを見まわしました。やがて、十二時を打つた時に、商人は、開いている戸から広間を抜けて出て、幾つも幾つも素晴らしい部屋を通つて、最後に、寝心地よさそうなベッドの置いてある部屋にきました。それをみると、もうとても草臥れ切つていたので、着物を脱ぐなり、ごそごそと入り込みました。

翌る朝十時を打つまで、商人は目を覚ましませんでした。目を開いてみて、驚いたことに、昨日まで着ていたぼろぼろ着物がさっぱりと新しいものに替わっていました。これで誰か心のいい妖女が、この御殿の主のだと思つて、窓から外をふと覗きますと、夕べの雪がきれいになくなって、花で覆われた東屋のあるきれいな花園になつていたので、いよいよそれに違いないと思ひました。さて、もう一度、夕べ食事をした大広間へ戻つて来てみますと、もうちゃんとテーブルに朝食の支度がしてありました。今度は遠慮なく食事を済ませると、馬はどうしたかと思つて見に行きました。すると、途中、薔薇の花棚の下を通つたので、ふと末娘のラ・ベルに頼まれたことを想い出して、お土産に一枝、薔薇を折りました。途端に、ううという、もの凄いいなり声がありました。そして、見るからに恐ろしい一匹の怪獣が現われるなり、背中を立てて向かつて来たので、商人は怯え上がつて気が遠くなりかけました。「……恩知らずの畜生め」と、その獣は、恐ろしい声で叫びました。「……おれは、お前の命を助けて、この御殿に泊めてやつたのではないか。それを何よりおれの大事にしている薔薇の花を盗むとは何事だ。その代価は、お前の命の血で払わせるぞ」と言うのでした。

七、命乞いをする……

商人は、可哀そうに震え上がつて、怪獣の前にぺたりとひれ伏しながら、「……殿様、お許し下さい。お叱りを受けることは存じませんが、つい娘からお土産に一輪薔薇の花をと望まれたのですから。どうぞ、命だけはお助け下さいまし」と言うのと、「……おれは、殿様ではない。ただのけだものだ」と、怪獣は言うのでした。「……おれは、おべんちやらは嫌いだ。口先の甘い言葉でつべこべ誤魔化すことは止めてもらおう。だが、お前、娘があるそうだな。その中に一人ぐらい、たぶん来て、お前の命に代ろうというものもあるだろうから、それでお前は許してやる。万一、それが嫌だと言うなら、三月のうちに、お前が必ず戻つてこなければならぬぞ」と言うのでした。

商人は、娘たちの内の一人だって、自分の代りに死んでもらおうなどは夢にも思いませんでしたが、さしあたり家へ帰って、娘たちの顔を見て、死にたいと思いました。それで、必ず戻って来る、と誓いますと、怪獣もそれなり許してくれた上、空手で帰ることはないからと言って、夕べ眠った部屋へ、もう一度、行って見よと言ってくれました。そこには大きな箱があるから、この御殿の中にありそうなもの、何でもそれに一杯詰めて行くがいい、いずれあとから箱は家まで届けてやると言うのでした。

八、家へと帰る

商人は、せめて子供たちに持って行ってやるお土産の出来たことだけでも喜んで、言われた通り行って見ますと、なるほど大きな箱があつて、そのそばの床に金貨が山と積まれていました。商人は箱に金貨を詰めると、それなりまた、とぼとぼ家へ帰って行きました。摘み取った薔薇の枝は、そのまま手に持っていて、子供たちが出迎えますと、まず末の娘に薔薇の花を渡しなが、「……さあ、ラ・ベルちゃんや、これを上げるが、その花一輪がこの哀れなお父さんにどんなに崇ったか、考えもつくまいよ」と言って、家を出てからの話を一通りして聞かせました。

そう聞くと、二人の姉は、大声を上げて、わあわあ泣き喚きながら、ラ・ベルがつまらないものをおねだりして、大事な父親とかけ替えにしたと言つて責めました。なぜ着物か、指輪にしなかつたか、馬鹿な子だと言つて罵りました。けれど、ラ・ベルは、自分がしでかした過ちのために、涙一滴流しませんでした。それよりか自分一人を投げ出して、父親の命に代る覚悟をはっきり決めていたのでした。

九、御殿へと向かう

妹の決心を聞くと、今度は、男の兄弟たちが一斉に叫び立てました。「……いけない、いけない。そんなことをさせるくらいなら、われわれが行つて、その怪獣のむこうを倒すか、こちらが倒されるか、勝負をつけてやる」と言うのでした。

けれど、商人は、息子たちを抑えて、それは、相手がどんなに恐ろしい野獣だか知らないからだ。それに手向かいをしても、どうせ無駄に決まっている。それよりか、兄弟たちお互いに助け合つて、このうち永く幸せに暮らしてもらいたい。それで安心して、お父さんは、また戻って行って、残りの命を怪獣へ犠牲に献げるつもりだと言つて、それなり自分の部屋へ寝に行きました。ところが、驚いたことに、悲しみに紛れてとうに忘れていた約束を、怪獣はちゃんと果たしてくれていて、部屋の中に例の御殿で見た通り、大きなお土産の箱一杯金貨を詰めたままで、そっくり置いてありました。商人は、でも、このことを娘たちに話さないことにしました。それはお金が入つたと聞くと、さつそく、町へ帰ろうと言つて、やかましく責めるに決まっていたからです。

さて、そのうち三月は立ちました。末娘のラ・ベルの覚悟には、少しの揺るぎもありません。いよいよ父親について一緒に行くことになりました。兄弟たちは、泣いて涙のお別れをしました。ただ、二人の姉だけは、ネギかニラで目をこすつて、無理に出した涙でした。二人を乗せた馬は、ちゃんと道を覚えていて、例の不思議な御殿へ連れて行つてくれ

ました。そして、いつもの馬屋へずんずん入って行きました。

十、二人は、野獣の御殿の中へ

父親と娘は、別れて大広間に入ると、今度もこうこうと明かりが灯っていて、テーブルには、ちゃんと二人前の御馳走が用意してありました。食事が済むと、たちまち凄まじい物音をさせて、怪獣が部屋に現われました。娘は震え上がって、つつ伏していますと、怪獣はそばにやってきて、「……ここへ来たのは、自分から進んで来たのか」と尋ねました。娘は、消えそうな声で、「はい」と答えました。「……それはどうもありがとう」と、怪獣は、唸るように言いました。それから、父親に向かって、「……さあ、それでお前さんには明日の朝すぐ帰ってもらおう。もうそれなりここへ来ないでもらいたい。では、ラ・ベル、今夜はお休み」と言い、「……お休みなさい、ラ・ベート」と、娘は言いました。この「ラ・ベート」というのは、意味は「野のけもの」ですが、「けものさん」という代りに、このお話の中では、「ラ・ベート」と呼んでおきましょう。

そのあとで、商人は、もう一度、娘に頼んで自分だけ残して、このまま帰ってもらおうと思つて、ひと晩じゆう、掻き口説きました。けれど、父親に代ろうという娘の決心は、びくともしませんでした。父親もついに諦めて、「……怪獣だって、恐らく、不憚に思つて、ラ・ベルに何も危ないことはないだろう」と、思うようになりました。

十一、ラ・ベルの部屋に入ると

さて、父親がしよんぼり帰って行つたあと、ラ・ベルもさすがに唸が重くなりましたが、無理に涙を払い除けて、御殿の中じゆう歩き回ってみました。そうするうち、ふと、一枚の扉に、「ラ・ベルの部屋」と書いてあるのを見つけて驚きました。慌てて開けてみますと、中は小綺麗にお飾りの出来た部屋で、本棚があり、ハーブシコードが置いてあつて、音楽が楽しく聞こえていました。（まあ、どうしたのでしょうか。どうせ今日一日で命を取られるに決まっているわたしのために、こんな立派なお部屋の支度が、どうしてあるのでしょうか。）

こう思いながら、試しに一冊の本を開けてみますと、金の文字で、「……あなたが望んだり、言い付けたらすれば、すぐその通りになります。あなたは、この御殿ではすべての上に立つ女王です」と、書いてありました。（まあ、わたしの望みと言ったら、お父様が、今どうしていらつしやるか知ることですわ。）

ラ・ベルがこう心に思いながら、ふとその姿を見覗いてみた時に、ちやうど父親の家へ帰ったところがそこに写りました。姉たちが出迎えに出て来て、悲しそうな顔はしながらも、ほんとうは妹の居なくなつたのを喜んでるのが分かりました。幻は、一瞬で消えましたが、ラ・ベルは、自分の望みを怪獣が叶えてくれたことを有り難いと思ひました。

十二、一緒に、夕食を……

お昼になると、ちゃんとテーブルにお昼の食事が並びました。食事の間、美しい音楽

がずっと聞こえていました。でも、聞こえるだけで誰も出て来るものはありません。夜になつた時、怪獣は出てきて、一緒に夕食をしようと言ひ出しました。ラ・ベルは、頭の天べんから足の爪先までぶるぶる震わせながら、それでも嫌ということは出来ません。それを怪獣が見て、自分を随分醜いとは思わなかつたと言つて尋ねました。「……はい、おつしやる通りです」と、娘は答えました。「……だつて、私、心にもないことは申せませんもの。でも、とてもいい方だと思つております」と、そんなことでだんだん打ち解けて、楽しく食事が済みました。すると、突然、怪獣が「……ラ・ベルちゃん、あなた、私のお嫁さんになつてくれますか」と言ひ出したので、娘はびっくりしてしまいました。びっくりしながら、それでも一生懸命、「……わたし、嫌でございませう」と答えるのでした。

怪獣は、家じゅう震えるほど大きな溜息をつきました。そして、悲しそうな声で、「……お休み、ラ・ベル」と言ひ残して、部屋を出て行きました。娘は、ほつとしながらも、やはり人のいい心から「気の毒に」と思うのでした。

十三、父親の重い病気を鏡で見つて

こんなふうで三か月ほど立ちました。怪獣は毎晩やつて来て、一緒に夕食を食べました。そのうち、娘は、だんだん怪獣の醜い姿かたちになつて来て、それよりか余計その優しい心を好ましく思うようになりました。ただ、相変わらず、お嫁にならないかと言ひ続けるのが気の毒で苦しくなりました。それで、ある時、もうお嫁になることはやめて、いつもお友だちでいましょうと言ひますと、怪獣は喜んで、そうやっていつまでもここから離れない約束してくれるように、と言ひるのでした。

ところで、その朝、例の姿見に映つたところでは、ラ・ベルの父親が娘がもう死んでいふと思つて大変悲しがつて、重い病氣になつていふことが分かりました。しかも二人の姉は、よそへお嫁に行つていて、男の兄弟たちは、兵隊に出ていました。それで、娘は、怪獣にそのわけを話して、このまま長くここを出ることが出来ないなら、父親のことが心配で死んでしまうかも知れないと言ひました。すると、怪獣は言ひました。「……いいや、決してそこまでして、お前を止めておこうというのではない。お前にそんな思ひをさせるくらいなら、怪獣のわたしがお前をなくした悲しみのために死んだ方がましだ」と、言ひるのでした。

そこで、娘は、ほんの一週間したら、また帰つて来るからと固く約束して、父親の見舞いに行くことを許されました。ただ、出て行く時、鏡の前に指輪を残しておいて行つてくれればいと、怪獣は言ひ、いつもの通り、お休みなさいをして、出て行きました。

十四、家に帰り、十日後、御殿に帰ると、

その翌る朝、目が覚めると、ラ・ベルは、ちゃんと田舎の小屋に運ばれて来ていました。父親は、娘の無事な顔を見ると、病氣は、けろりと治つてしまひました。

父親は、さつそく姉たちを迎えに人を出しました。姉たちは、それぞれ夫と連れ立つてやつて来ました。お嫁に行つたものの、この姉たちは、いっこう楽しく暮らしてはいませんでした。一人の夫は、威張り屋で見えばかり飾つて、ほんとうの愛情を知らない男でし

た。もう一人の方は、悪口屋で他人の粗ばかり見つけて喜んでいるような男でした。それで、姉たちは、死んだと思った末の妹が無事でいて、しかも、食べ物にも着物にも何一つ不足なく、豊かに暮らしている様子を見て、妬ましくなりました。それで、どうかしてもう二度と怪獣の御殿に帰れないように、帰れば、すぐと怒られて食い殺されてしまうようにと祈って、一週間という約束を無理やり破って、いつまでも引き留めておく企みをしたのでした。

さて、その十日目の夜でした。ラ・ベルは、姉たちのわざとちやほやもてなす中で、夢を見ました。それは、気の毒に怪獣が半分死にかけて、夜、草原の上に喘ぎ喘ぎ倒れている夢でした。娘は、涙に浸りながら目を覚ましました。それでいったん床から起き出して、指輪を鏡の前の台において、また床の中に入って、ぐっすり眠りました。さて、目を覚ましますと、いつかまた御殿へ運ばれて来ているので、ほっと安心しました。それから、晩の食事の時まで、さんざん待ち遠しく暮らして、早く怪獣に会うことばかり思っていました。ところが、八時が打ち、九時が打つても、怪獣は姿を現わしませんでした。「……ああ、私、本当にあの人を殺したのではないかしら」と、そう叫んで、娘は、庭へ飛び出しました。そして、夢でみた草原の所へ来ますと、その通り怪獣は気を失って倒れていました。娘は、はっとして、そのからだを抱き抱えました。すると、心臓がまだ打っているのが分かったので、近くの泉から清水を汲んで来て、その顔にふっかけました。すると、怪獣はかすかに目を開いて、虫の息で言いました。「……お前が約束を忘れたので、私は物を食わずに死ぬ覚悟をした。でも、帰って来てくれたから、これでせめて楽しく死ぬことが出来る」と言うと、「……いいえ、ラ・ベートは死んではなりません」と、ラ・ベルは言いました。「……あなたはいつまでも生きていて、わたしの夫になっていただきます。今、私は、ほんとうにあなたを愛していることが分かりました」と言うのでした。

十五、魔法が解けて……

さて、この言葉が叫ばれた途端、御殿中、火事のように明るく輝き出しました。五色の火花が大空に飛び散りました。盛んな音楽の響きが大地を震わせました。恐ろしい怪獣の姿は、どこにも見えなくなりました。その代わりに、神々しいまでに立派な王子がそこにいて、娘の足元に膝まづいていました。そして、娘の真心の力で長年解けなかった「魔法の呪い」が解けて、ほんとうの姿にかえられたことを喜んでいました。

でも、娘にはまだそれが分からないのです。それで、心配そうな目で怪獣の行方を追っていました。「……まあ、お気の毒なラ・ベート、わたしの怪獣さんは」と言うと、「……その怪獣が私ですよ」と、王子が言いました。「……ある意地悪な妖女が、私を苦しめるために魔法で呪って、醜い獣の姿に変えてしまったのです。その呪いを解くには、いつか心の清い乙女が私の醜い姿かたちを忘れて、真心から労ってくれるまで待たなくてはならなかったのです。それがあなただったのですよ」と。

さて、これからあとのお話は、詳しくするまでもないでしょう。ある日、突然、不思議にも姿の見えなくなった若い君主の行方を尋ねまわっていた民たちの所へ、再び、その若き君子は、帰って行って、喜びを以て迎えられたのでした。それも一人でなく、この世に二人とない「美しい顔かたち」、そして、それよりも「もっと美しい優しい心を持った

ラ・ベル姫」を連れていたので、二重の喜びよらに国じゆうが沸わき立ったのでございませす。

*

*

フランダースの犬

フランダーズの犬

一、二人の関係

まず、ネロとパトラッシュ——この二人はさびしい身の上同志でした。二人ともこの世に頼るものなく取り残された一人ぼっち同志ですから、その仲のいいことは言うまでもありません。いや、「仲がいい」くらいな言葉では言い表せません。兄弟でもこれほど愛し合っている者はまずないでしょう。ほんとにこれ以上の親しさは考えられないほどの間柄でした。しかも、二人、と言っても人間同志ではないのです。ネルは、フランスとベルギーの境を流れるムーズ河の畔の田舎町アンデルスに生れた少年。パトラッシュは、フランダーズ産の大きな犬なのです。この二人は、年数から言ったら、いわゆる同じ年ですが、一方はまだあどけない子供ですのに、一方はすでに老犬の部類に入っています。二人が友達になったそもその始まりは、お互いに同情し合ったのがもとで、日を経るに従って、その気持はますます深まり、今ではもう切っても切れない親しさに結びついてしまいました。村外れの小さな小舎、それが二人の家でした。

二、村の周辺の風景

この村というのは、ベルギーの首府アントワープから一里半ばかり離れたフランダーズの一村落で、まわりには麦畑や牧場が広々と連なっていて、その平野を貫く大きな運河の岸には、ポプラや赤楊樹の長い並木が、そよそよ吹く微風にさえ枝をゆすぶっています。村には家屋敷がおよそ二十ばかり、その鎧戸は、みんな明るい緑色か青空そのままの色に塗られ、屋根は、多くは紅い薔薇色、または黒と白のまだらに塗られています。壁は雪のように真白で、太陽に輝いている時は目が痛くなるほどでした。村の中央には、苔むした土手の上に風車がそびえ立っています。この風車は、この辺一帯の低地の目標ともなっているものでした。ずっとずっと昔、この風車は翼も何もかもすっかり真紅に塗られたこともありましたが、今はもうその燃えるような赤い色も風雨にさらされて汚なく色褪せてしまい、回り具合も、よぼよぼのお爺さんのように、止ったり動いたりという有様になってしまいました。とは言え、まだこの辺の人たちの麦搗の役は充分足りています。この風車と向き合って古ぼけた小さな教会堂が建っています。その細長い塔の上の鐘は、朝に夕に静かな悲しげな音を響かせるのです。東北の方広々とした平野の彼方にはアントワープの旧教寺院の尖った塔がそびえ立っているのが望まれました。平野には果てしもなく青やかな穀物の畑が広がって、まるで一面海のようでした。

三、小屋の主人のお爺さん

さて、その村外れの小屋の主人というのは、大変年取った、そして大変貧乏な、ジェバン・ダースというお爺さんでした。このお爺さんも、ずっと以前は軍人で、あのナポレオンの大軍がこのベルギーに攻め入って来た時には、戦いに出た経歴も持っています。しかもこのお爺さんが、その戦場から持ち帰ったものとしては何一つなく、ただ、大きな傷を

受けて、一生跛を引き摺らねばならないことだけでした。

ジェバン爺さんが八十才になった時に、爺さんの娘がアンデルスというところで死に、二才になったばかりの男の子をお爺さんの手に残しました。自分一人の暮しさえやっとなあるこの貧乏なお爺さんは、それでも愚痴一つこぼさず、この厄介者を引き受けました。そして、この厄介者は直に、お爺さんにとって可愛い尊いなくてはならない大切なものになったのでした。その忘れ形見のネロ——実の名はニコラスというのだが、それを可愛らしく呼んでネロとしたのです——は、この上ないお爺さんの慰め手となって、この小さな小屋はほんとうに平和でした。小屋は粗末な掘つ立て小屋に過ぎませんでしたが、お爺さんは、いつもきちんと片づけ、貝殻のように白く塗り立てて、まわりには、ささやかな豆や薬草や南瓜などの畑を作っていました。

四、お爺さんと孫それに一匹の犬

このお爺さんと孫とは、おそろしく貧乏で、全く何も口にすることの出来ない日が幾日もあり、たとえどんなにうまく行った日でも、これで十分というほど食べられることなど決してありませんでした。ですから二人にとっては、これで腹一杯というだけ食べられれば、それがもう天国へ登ったほどありがたいことなのでした。しかし、こんなに貧乏でも、お爺さんは、親切でやさしく、孫のネロも、嘘を言わない無邪気な素直な心を持っているのでした。

二人は、もうほんのわずかなパンの皮とキャベツの葉っぱで満足して、その上は何にも望みませんでした。ただ一つ、願いと云っては、犬のパトラッシュがいつまでも側にいてくれればいい、と言うことだけでした。ほんとうにパトラッシュがいなかったら、今頃、このお爺さんと孫はどうなっていたことでしょう。

パトラッシュは、彼等にとつて全くなくてはならないものでした。この犬一匹が、彼等——老いぼれた不具者と頑是ない幼児——にとつては、ただ一人の稼ぎ人、ただ一人の友だち、ただ一人の相談相手、杖とも柱とも頼む、ただ一つの頼りなものでした。フランダースの犬は、一体に頭も四本の脚も大きく、耳は狼のようにぴんと立っていて、何代も何代も親譲りの荒い労働で鍛え上げたがっしりしたその足は、何れも外側にひらいてふんばっていて、見るからに異常な筋肉の発達を示しています。全くフランダースの犬は、親子代々、一生、激しい惨たらしい労働にこき使われ、力尽きて、ついには路上に血を吐いて行き倒れる、という運命を持っているのでした。そうした犬を両親にしてパトラッシュは生れました。彼は悪罵と鞭とに育てられ、一疋前の犬となる前に、すでに荷車を引く擦傷の痛さと頸環の苦しみを味わいました。彼は生れてやっとな一年経つや経たずで、もう、ある金物行商人の手に売られ、そこで、思い出すも恐ろしい生活を強いられたのでした。その主人というのは、飲んだくれの情知らずで、食物などろろく与えず、山のような荷を引かせ、絶え間なく鞭を振り下すのでした。幸か不幸か、パトラッシュには力がうんとありました。根がこう言つた残酷な労働をするように生れ落ち、慣らされて来た鉄のような血統を受けているのですから、大抵の労働には、へたばることなく、したがって苦痛は増すばかりでした。重荷、鞭、飢渴これらの苦しみが、この憐れな犬のその主人からもらうただ一つのお給金のようなもので、その他には何一つ報いられるものはありませんでし

た。

五、パトラッシュの仕事

こんな、地獄のような苦しみを、二年ばかりも堪えて来た後のある日のことでした。その日、パトラッシュは、いつもの通り、あの有名な画家ルーベンスが生れたアントワープの町に通ずる埃っぽい気持ちの悪い道を、喘ぎ喘ぎ、車を引いて行きました。車には、鍋類、鉄皿、鉄瓶、バケツ、その他いろんな瀬戸物類、真鍮類、錫類などが山と積んでありました。丁度夏の真盛りで、その暑さと言ったらありません。そうした中をパトラッシュは、一日中何も食わず、その上半日も水を口にしないのでした。パトラッシュは苦しげに喘ぎました。けれども主人は知らぬ顔で、のっそりのっそりついて行くばかり、時たま犬の方を見るかと思えば、すでに鞭は打ち下されて、その長い革ひもの先は、擦傷も露わな犬の腰にぐるぐる巻き付くのでした。金物屋は、道ばたに酒屋でも見つければ、忽ち入り込んでビールをひっかけるのですが、犬には、運河の水を一飲みするだけの暇さえ与えず、ただもう追い立てに追い立てて鞭を鳴らすのでした。

くわツと照りつける太陽に、焼けるように熱くなった道。飢え切ってきりきり痛む腹、渴き切ってひりひり痛む喉、目は砂ぼこりがかすみ、腰に結びつけられた重荷の軛の情け容赦のない重さ。さすがのパトラッシュも、ぼつと気が遠くなり、生れて初めてよたよたとよろめいて、口から泡をふいて倒れてしまいました。これを見ると金物屋は、彼独特の気付け薬を取り出しました。ああ、それは蹴ることでした。怒鳴ることでした。堅い樫の棒で殴りつけることでした。しかし、どんなに蹴ってみても、怒鳴ってみても、殴ってみても、今度はもうパトラッシュには利目がありませんでした。彼は、ただもうぐつたりと身動きもせず、白っぽい埃の中に横たわったきりでした。しばらくして行商人は、もうこれはとでもだめだと分かるかと、さも忌々しげに舌打ちをして、手荒く梶棒から解き放し、犬の体を、どん、と草の繁みへ蹴飛ばして、このやくざ野郎め、蟻に刺されると、鳥に突かれるとも、勝手にしやがれ、と口汚く罵って、それから、ふんふん怒りながら今度は自分の車を坂の方へ引いて行きました。丁度その日は、向うのルーヴァンの町でお祭りがある前の日でした。で、金物屋は、早くその市場へ行き着いて、金物の店を出すのに都合のいい場所を取ろうと急いでいるのでした。ですからこんなことになった今、金物屋の痛癩は大変なものでした。そのルーヴァンまでは、まだなかなかあるものですから、金物屋は、どこかに飼主にはぐれた犬でも居ないものか、いたら、なるだけ大きな奴をひっ捕えて、縛りつけてやろうと、悪ごすい目をきよさきよさせながら、さもやり切れないように車を引いて行きました。パトラッシュは蹴り込まれたままです。茫茫と草の繁った溝の中に……。

六、パトラッシュとの出会い

その日、その街道は大変な賑わいでした。てくてく歩く人、驢馬に乗る人、あるいは二輪馬車、四輪馬車を走らす人、いずれも、お祭り気分です浮かれながらぞろぞろ行くのでした。もちろんその人たちの目にも、倒れた犬は写ったでしょうが、みんなそのまま行き過

ぎてしまいました。要するにたかが死んだ犬一匹、——それが、この地方で何の珍しいものですか。世界中どこへ行つたつて、やはり何でもないことになるのでしよう。

しばらくすると、人波に揉まれながら、腰の曲つたよぼよぼの跛のお爺さんが、やつて来ました。別にお祭りに出かけるらしくもなく、みずぼらしいぼろを着て、埃の中を黙り込んでやつて来ました。このお爺さんがパトラッシュを見つけると、不思議そうに立ち止り、生えている雑草を分けてそばへ寄り、親切な目付きで、しげしげと犬のからだを調べてみるのです。

お爺さんのそばには、三才ばかりの薔薇のような頬つぺたの、髪の毛の房々とした瞳の黒い子供がくっ付いていました。生えている雑草は、その子の胸までもあるのです。子供はお爺さんにつかまり、これは大変だ、と言わんばかりに目を丸くして、可哀そうな犬をじつと見つめています。こうして二人ははじめて会つたのです。——子供のネロと大きな犬のパトラッシュとが。——

七、二人の世話でパトラッシュは元気に

さて、ジェバン爺さんは、いろいろと骨を折つて、ようやく犬のからだを直近くの自分の小屋へ運び込み、息の絶えたこの犬を心を込めて介抱してやりました。しかし、パトラッシュの倒れたのは、暑さと饑渴と疲れで、一時目がくらんだためですから、日蔭へ静かに寝かしておくうちに、やがて、元氣を取り戻して来ました。そうして、はや、よろめきながらも立ち上ろうとさえするのです。それから何週間もの間、パトラッシュは、力もなく、役にも立たず、全くの病犬で、死にはすまいかと案じられるほどでした。しかしその間、犬は決して荒く怒鳴られることもなく、痛い鞭も受けませんでした。ただ受けるのは、可愛らしい子供の片言まじりの慰めとお爺さんの親切な労りばかりでありました。まことに、この寂しい年寄りとお爺さん、この二人だけが心を尽くして病気の犬を見守るのです。小屋の隅には枯草を山のように積んで犬の寝床が出来ました。そうしてお爺さんと幼い子供とは、じつと耳を澄まして犬の寝息を伺い、その息さえ聞こえれば、ほっと安心するのです。

犬は、ようやく元氣になつて、初めて、一声吠えてみると、それを嬉しがつて、お爺さんと子供とは、どっと笑うのです。そして、元氣になつてよかつたとうれし涙をこぼすのです。殊にネロは、夢中になつて喜んで、すぐ駆け出して行って、野菊を摘み集め頸環を拵えて来て、それを荒毛のパトラッシュの頸にかけてやり、子供らしい赤い柔らかい唇で、何度も何度も接吻するのでした。こうしてパトラッシュは、すっかり元氣を取り戻して、元通りの大きながっしりと力が満ちた犬になりました。はじめ、パトラッシュは、以前と様子の違っているのが気がかりな風でしたが、間もなく、すべてのことが分つて来たので、すっかり安心しました。こうしてお爺さんと子供の親切な心が分ると共に、パトラッシュの心の内には、生れて初めて愛というものが非常な力で湧き上つたのです。そして、その愛は、その後一生、パトラッシュが死ぬまで、一度も鈍つたことはありませんでした。パトラッシュは、恵まれた、今度の新しい生活のすべてを知ろうとして、その澄んだ目で、じつと注意深く、お爺さんと子供のすることを見守っていました。

八、お爺さんの仕事は……

さて、このジェバン爺さんの仕事というのは、毎朝、近所の牧場主たちの牛乳を、小さな手車で、アントワープの町へ運ぶことでした。村の人たちは、このお爺さんを憐れんでそうした仕事を与えていたのです。何しろ極めて正直者ですから、牛乳を運んでもらうばかりでなく、村にいて、その他の仕事としては、畑の番、牛小舎や鶏小舎の番、小さな田の番、その他いろいろ頼まれるのです。しかし、もうそろそろお爺さんには、仕事に難しくなつて来ました。なにしろ八十三という年寄になつたのですから。アントワープへ行くにしても、三里からの道を歩かねばならないのです。

パトラッシュは、初めて、しゃんと起き出た日、お爺さんが持つて出たり持つて帰ったりする牛乳缶を、じつと気をつけて眺めていました。鶯色の頸に野菊の花環を巻かれたままで、日向ぼっこをしながら。そして、その翌る朝になると、パトラッシュは、お爺さんがまだ車に手をかけない先に起きて行つて、ぴつたりと車の梶棒の間からだを置きました。それは丁度、私は車を引くことを知っています。どうかせめてこんな仕事なりでも、ご恩返しをさせて下さい、と言うかのようなのでした。が、このお爺さんは、犬に車を引かせるのは、神様が犬を作られた御心ではない、と信じている人でしたから、それを長いこと許さずにいました。しかし、パトラッシュはどうしてもそれを止めません。お爺さんが、自分のからだを梶棒に結び付けてくれないと知つて、今度は、歯で啞えて引いて行こうとするのでした。これには、さすがのお爺さんも根負けがし、また、自分の助けた動物の、恩を返そうとする心の健気で熱心なのに打たれて、とうとうそれを承知してしまいました。そこで、犬が引きよいように車を作り直し、お爺さんの命のある限り、それを毎朝犬がせつせと引くことになつたのでした。冬になると、お爺さんは、ルーヴァンの祭りの日に、死にかかった犬を溝から救い上げてやったことの仕合せを、つくづく感謝するのです。何しろ、年老いて、衰える一方のお爺さんです。もしこの忠義な犬が骨身惜しまず働いてくれなかつたとしたら、雪道やぬかるみの深い轍の跡を、重い牛乳缶をつけて引つ張つて行くのが、どんなに辛いことだつたでしょう。

九、一方、パトラッシュは

ところで、パトラッシュにとつては、こうして働くことがまるで天国のように思われました。あの因業な昔の主人に山なす重荷を付けられて、一足毎に鞭でびしびし打たれた身には、このお爺さんの緑色の小さな手車にびかびか光る真鍮の缶を乗せて行くことなど、思ひも掛けなかつた楽しさでした。まして親切なお爺さんが、絶えず優しい声をかけてくれたり、抱き締めたりしてくれるのですから。なお有り難いことには、一日の仕事が三時か四時には済んでしまつて、あとはパトラッシュの自由な時間なのでした。日向ぼっこをしようが、子供と一緒にふざけようが、近所の犬と遊ぼうが、全くしたい放題。パトラッシュは、もう満足し切っていました。殊に運のいいことには、前の主人の金物屋は、あのルーヴァンのお祭り騒ぎに酷く酔っぱらつた挙げ句、喧嘩をして殺されてしまつたのです。生きていて、若しも見つけ出されでもしたら、パトラッシュは否応なしにこの新しい居心地のいい家から、引き摺られて行かねばならなかつたでしょう。

十、六歳になつたネロ

それから二、三年が経ちました。ジェバン爺さんは、それまで悩んで来た跛の上に、今度はリュウマチを患って足が酷く痺れるようになり、もうこの上は、車について出かけられなくなつてしまいました。この時、六才になつていたネロは、それまで何遍となくお爺さんに連れられて行って、アントワープの町の様子も知り尽くしていましたので、お爺さんに代つて車について行くことになりました。牛乳を売つて代金を集め、それを、それぞれの牧場主に届ける。その様子がいかにもいじらしくて気の毒なので、見る人の心を感じさせずにはおきませんでした。

ネロはほんとうに美しい少年でした。黒目勝ちな涼しい瞳、薔薇のように生々した頬、そして艶やかな髪が、ふさふさと華奢な襟元まで垂れていました。で、この少年と犬と牛乳車をモデルにする画家が、たくさん出て来ました。——緑色の牛乳車に輝く真鍮の缶、それを引くのは大きな鶯色の猛犬。梶棒につけた小鈴が、一足毎に可愛い音を立てて、つきそうのは可憐な美少年。小さな白い素足に大きな木靴を履いて、ルーベンスの名画から抜け出して来たような楽しげな邪気ないその顔は、どんなに人を惹きつけたことでしょうか、大勢の画家たちが我勝ちにと画いたのも尤もなことでした。

十一、毎日の生活ぶり

ネロとパトラッシュとはすっかりこの仕事に慣れ、また、心からこの仕事を好いていたので、夏になつてジェバン爺さんの病気が良くなつても、もうお爺さんは出かけて行かなくとも済むのでした。お爺さんは、日当たりのいい小屋の入口に腰を下して、ネロとパトラッシュがいそいそと畑の木戸をくぐり、やがて、その姿が遠くへ消えてしまうまで見送り、とろとろと居眠りをして短い夢さえ見るのでした。やがて目を覚ましてお祈りをしたり、畑のものなど見廻つたりするので、そうこうするうちに時計が三時を打つと、表へ出て、ネロたちを待ち受けるのでした。家へ近づくと、パトラッシュは嬉しそうに一声高く吠えます。そして梶棒を外してもらつて、ゆっくりとくつろぐのです。ネロは、その日の賃金を得意そうに計算し、やがて、みんな揃つてライ麦のパンに牛乳やちよつとしたスープを添えて食べるのでした。

目を上げれば、野は次第次第に暮れて行き、宵闇が遙かな旧教寺院の尖った塔をぼかし始めるのです。それから、お爺さんにお祈りをしてもらつて、みんな安らかな眠りに就くのでした。こういう楽しい暮しが、幾日と続き、幾年と続きました。そして、ネロとパトラッシュの生活は、相変らず幸福で平和でした。

十二、春夏秋冬の生活ぶり

春と夏とは、ネロたちにとって一番楽しい時でした。一体フランダースというところは、見渡す限りどこまでも牧場や田畑が連なっているだけで変化に乏しい、あまり面白いとは言えない土地ですが、そこにはまた、この地方独特の景色もあるというものです。

運河の岸の梢鮮やかな長い並木道、水際には高い藺(草)の間に花が咲き、古ぼけた荷足り舟が、青い樽を積み、様々な旗をひらめかして、静かに滑って行く。変化に乏しく退屈であつても、ネロとパトラッシュにとつては実にこの上もない楽園でした。二人は仕事で済むと、きつと連れ立って出かけて来て、運河の土手の滴るような青草の繁みに身を埋めて、浮び来る、浮び去る重たげな舟を眺めるのでした。すると、芳しい夏花の匂いと、爽やかな潮の香りとが混り合つて漂つて来るのでした。一人は、優しげな満ち足りた瞳をして、いつまでもいつまでもそうして坐っているのです。

しかし、冬はほんとうに辛いのです。二人はまだ暗いうちから起き出るのに、それでも昼のうちに仕事がつかり終るようなことは滅多になく、それに小屋は、暖かい時には思いもしなかつたような隙間や節穴が一ぱいで、冬の夜更けには寒い冷たい風が吹き込んでまるで家畜小屋にでもいるような気がするのです。春から秋にかけて、実らないながらもその繁った緑の葉で小屋を包んでくれた葡萄も、冬になるとみすばらしく枯れ果てて、黒い汚い蔓が絡み付いているばかりです。誤つて水を床に零したりすれば、じきそれが凍り付いてしまうのです。広い荒野は雪に埋れて、ネロの華奢な手足は痺れパトラッシュの頑丈な脚も氷柱で傷ができました。しかし二人は健気にも泣き言一つ言わず、梶棒の鈴の音も朗らかに毎朝三里の道を行くのでした。アントワープの町の人々はみないじらしがつて、パン切れにスープを添えて持ち出して来てくれるお上さんや、帰りの空車の中へ薪の束を入れてくれる人なども現われました。また同じ村の女などでわざわざ牛乳など取つておいて、二人の帰りを労つてくれる人もあるのです。

そういうわけで、知る限りの人々に愛され、労られて、この小さな藁小屋の中は、いつも愉しげな笑い声が満ちていました。

十三、パトラッシュの唯一の心配は……

パトラッシュは、ほんとうに幸福でした。同じ炎天の下でも、同じ氷雪の路でも、昔と今では地獄と天国の相違です。たとえひどく空腹を感じ、足の傷がひりひり痛むことがあつても、お爺さんの親切な労りと少年の優しい接吻とは、すべての苦痛を補つて余りあるものでした。パトラッシュは、この上、何を望みましよう。けれどもそのパトラッシュにたつた一つ、不安と言えは言えるものがありました。それはこうでした。アントワープの都には、古代石造建築の名残りがたくさん残っています。今はもうアントワープは、俗っぽい商業地になつてしまいましたが、それでも、尊いお寺やお社が昔の名残りを止めているのです。

世に名高い大画家ルーベンスは、この町に生れたのです。アントワープが商業地以外に芸術の都としても世に知られるようになったのは、ひとえにこのルーベンスのおかげでした。彼の尊敬すべき偉大な魂は、今もなおアントワープの町の上をさまよい、見守つていると言えましよう。ほんとにアントワープ到るところにルーベンスを感じ、ルーベンスを感じるによつて、この町のすべてが清められ深められるとも言えましよう。

そのルーベンスの白い墓標は、アントワープの中央、セントジャック寺院内の、いと物静かなところに立っています。その静けさの上を、時折、穏やかなオルガンの音と讚美歌の合唱が流れて行くのです。芸術家の墓のうちでも、こんないい場所にこれほど立派

に立っているのは少いでしよう。

さて、パトラッシュの心配というのは、これでした。この厳かに聳えている古びた石造建築の中に、時折、ネロの姿が消えてしまう。その暗いアーチ型の玄関の奥にネロが吸い込まれてしまつて、パトラッシュだけがぼんやり敷石の上に取り残されるのでした。

パトラッシュは、一体どんな面白いものがあつて、自分と離れたことのない仲良しをいつもいつもあの門内へ誘い込んでしまうのだろうか、不思議でたまらないのでした。一、二度、彼はそれを見極めようとして、牛乳車をくつ付けたまま入口の石段をガラガラ上りかけたことがあります。その度、黒服に銀の鎖を付けた脊の高い門番に一言の下に追い帰されてしまうのです。パトラッシュは仕方なく、小さい御主人に変わりがなければいいかと案じながらじつと寝そべつて、ネロが出て来るのを辛抱強く待っているのです。

十四、なぜ、ネロは町の大寺院へ行くのか

パトラッシュは、どここの村の人たちも教会へ行くことを知っています。大勢揃つて、あの赤い風車の向かいの古ぼけた教会堂へ出かけるのも見ていますから、ネロがお寺へ入るのが別に心配というわけではありません。ただ、気になるのは、その町の寺院から出て来る時のネロの顔色なものでした。非常に興奮したように赤く火照つた頬をしているかと思えば、また酷く青ざめている時もある。そういう日に限つて、家へ帰つてからも、ぼんやり夢みるような眼をして座り込んだり、一向遊ぼうともしないのです。そして、運河の彼方に暮れていく空を眺めては、いかにも思い沈んだ悲しげな様子をしているのでした。

パトラッシュは、心配で心配でたまりません。これは一体どういうわけなのでしょう、何にせよ、こんな小さい子供が、こんな真面目くさつた顔つきになるのは、普通ではない良いことでもない。パトラッシュは口にくそ出さぬが気を配つて、ネロの行くところは野と言わず、市場の人混みと言わず、片時もそばを離れないことに決めたのでした。

おかしいことには、ネロは、村の教会へは行くこともしません。ただ行きたがるのはあの町の大寺院だけです。パトラッシュは、その寺院の大門の外に取り残されて脊伸びをしたりため息をついたり、はては大声に吠えたりしますが、どうにもなりません。やがて門の扉が閉められる頃になつて、ネロはようやくつまみ出されるようにして追い出されて来るのです。そして、すぐ犬の頸に抱きついて、その広い鶯色の額に接吻しながら、いつも決まったように、「……パトラッシュ、僕は見たかつて——一目でいい。見さえすれば——」と、きれぎれに呟くのでした。それは一体何のことでしょう。パトラッシュは、思いやりの籠もつた目で、じつと少年の顔を見つめるのでした。

十五、ネロの願いは、堂内の二つの画を見ること

ある日、門衛がいなくて扉が開いたままにしてあるのを幸い、犬は少年のあとを追つてこつそり内へ入り込んで見ました。少年はうっとりとして「キリスト昇天」の画の前に蹲つていましたが、うしろに犬の来ているのに気がつく、立ち上つてやさしく犬を胸のあたりまで抱き上げました。その顔は、涙に濡れていました。ネロは、堂内の両側に掲げてある二つの画をぴつたりと覆つた厚い布を指して、言いました。「……パトラッシュ、

貧乏でお金が払えないから、あの画が見られないなんて情ないことだろう。貧乏人には見せられないなんて、どうしてあの画の作者が言うものか、いっだって僕らに見せるつもりだったんだ、毎日見てもいいと思つたに違いない。それなのに、こんなに覆つてしまふなんて、金持が来て、金を払わなければ、いつまでも美しい画に光りも当てないなんて。ああ見たいな、見たいな見さえすれば僕、死んでもいいんだが——」と。

パトラッシュは、初めて知りました。あんなにもネロの心を惹きつけ誘い入れたものが、この覆われた二つの大きな画だつたということ。しかし、パトラッシュにもどうすることも出来ませんでした。「キリストの昇天」と「十字架上のキリスト」この二つの名画の見物料を儲け出すことは、ネロにとつてもパトラッシュにとつても、丁度この寺院の高い尖塔によじ登ると同様全く思いもよらぬ難事だつたのです。二人は、余分なお金など、それこそ一文もありはしません。炉に焚く薪の一束、薄いスープの一鍋さえ思うに任せぬ憐れな身なのですから。

しかしながら、ネロの心は、このルーベンスの二つの名画を見たいという願いを、どうしても諦めることが出来ず、いや、ますます燃え盛るのみでした。身は水呑百姓の子供の憐れな牛乳配達に過ぎなかつたけれど、ネロの心は常に高く、大画家ルーベンスを夢見ていました。ひもじさ寒さも気に留めず、いつも心に描いて楽しんでいたのは、かつて見て知っている『キリスト昇天』のその神々しい顔つき、金髪を肩に波打たして、その額に消えることなき栄光の照り輝いている図でした。貧しい中に育ち、何の教育も受けていないが、少年ネロは、まさしく天才の素質を持つていたのです。もとより、誰一人そんなことを気づく者はなく、ネロ自身も、そんなことは思つたこともありません。ただそれを知っているのは、ネロのそばを離れたことのない犬のパトラッシュだけでした。パトラッシュは、ネロがよく白墨で石の上などへ動物や植物などをいろいろと描くのを、また、一緒に枯草の床に眠る時など、そうしてそんな時のネロの顔が、どんなにばあつと輝いているかを見知っていました。ネロが大画家ルーベンスの魂に向かつて、いろいろな賛め言葉や思いつめた祈りを捧げているのを聞きました。また、度々、喜びと悲しみとが混り合つたような、何とも言うことのできない涙が、この小さな子供の瞼から溢れ落ちて、パトラッシュの皺の寄つた鳶色の額へかかるのも知っていました。

十七、ネロの夢とお爺さんの願い

その頃、ジェバン爺さんは、病気になつて床に付いていました。「……ネロやお前が早く大きくなつて、せめてこの小屋でも自分のものにして、田の一反でも持つて、近所の衆に旦那と言われるようになってくれたら、お爺さんも安心して目がつぶれるがな」と、お爺さんは、床の中で何遍もこんなことを繰り返して言っていました。このあたりの百姓の望みと言つたら、土地を少しでも持つて、村の人たちに旦那と呼ばれるようになる、それがもう何よりの最大の望みなのでした。このお爺さんも、若い時には飛び出してあらゆる地方を流れ歩き、しかも何一つ儲けて帰つたというでもなく、とうとうこんなに年寄つてようやく一つ所に落ちつき、やっぱり百姓は百姓の分相応な望みで暮すのが一番だと悟つて、可愛い孫のために、ひたすらそれを願つたのでした。

だが、ネロは、黙っていました。ルーベンスやヨーンデンスあるいはヴァン・グリなど

の大芸術家、その人たちの天才と同じものが少年ネロの血にも流れていたのです。ネロの考えている未来は、お爺さんの考えとは全く違っていきます。わずかばかりの土地を耕して、小つぼけな家に住み、自分より貧乏な人や、せいぜい同じくらい貧乏人同志から、旦那と呼ばれる満足するなどと言うことは、ネロにとつては思いも寄らぬことです。赤々と燃える夕映えの空、うつすらと狭霧の立ち籠める朝などに、遠く聳えるあの大寺院の尖塔は、ネロの心とお爺さんの言葉とは全く違ったものを告げているのです。しかし、少年がこれを話すのは、犬のパトラッシュだけで、まるで赤ん坊にでも言い聞かすように、ゆっくりゆっくりその耳に囁くのです。車について野原を行く時にも、風そよぐ運河の岸の叢に並んで寝転ぶ時にも決まって、これを囁くのです。

十八、風車小屋の一人娘アロア

パトラッシュのほかにもう一人だけ、ネロは話相手がありました。それはアロアという小さな女の子で、あの丘の上の風車の家の娘で、お父さんの粉挽屋は、この村一番のお金持でした。アロアは、まだほんの幼い少女でした。ぼっちゃり肥えて、何か紅い花のような子でした。そのぼっちゃりした黒い瞳の愛らしさと言ったらないのです。アロアは、よくネロやパトラッシュと遊びました。野原で鬼ごっこをしたり、雪投げをしたり、野菊を摘んだり、胡桃拾いに行ったり。ある時は手をつないで教会堂へ行ったり、水車小屋の大きな炉ばたに座り込んだり。――アロアは、その金持な粉挽屋のたった一人娘でした。いつもさっぱりと可愛い着物をつけて、お祭りの時など両手に持ち切れないほどお菓子だの玩具だの買うことが出来るのです。アロアがはじめて洗礼式に出かけた時、その捲毛の金髪の上へ被った帽子は、おばあさん譲りのクリン織のとても見事な贅沢なもので、万事がそういう風ですから、アロアはまだやつと十二なのに、もう近所の人々の口の端に上って、あの娘をうちの息子のお嫁にもらったらさぞいいお嫁さんになるが、などと噂されました。しかし、本人のアロアは、一向無邪気な可愛い子供で、自分の家の財産のことなど知りもせず、とにかく、一番好きなのは、ジェバン爺さんとその孫と犬とでありました。

十九、一方、アロアの父親は

アロアの父親は、コゼツの旦那と言われているいい人だが、少し頑固でした。ある日、彼が水車小屋のうしろの畑を通りかかると、丁度ネロとアロアが遊んでいました。娘が真ん中の高く積んだ枯草の上ですわり、パトラッシュの大きな鳶色の頭を膝に乗せている。あたりにはひなげしや矢車草などと色とりどりに散らばっていて、それをネロが松の削り板に、写生しているところでした。コゼツの旦那は、立ち止って、その写生を眺めました。その画は、ぼちゃぼちゃした頬、黒い瞳、不思議によく似ていました。彼は、この一人娘を目に入れても痛くないほど可愛がっていたのです。ふいに彼は、何を思ったか、お母さんが呼んでいるのに、なぜぐずぐずしているのかとアロアを叱りつけ、アロアがびつくりして泣き出すのも構わず、家の方へ追いやってしまいました。そして振り返って、ネロの手からその板切れを取り上げました。

そして、「……なぜ、こんな馬鹿げた真似ばかりしているんだ」と言うと、ネロは赤くなつてうな垂れ、「……僕は見えるものを何でも写生するんです」と、小さい声で言いました。コゼツは、黙っていました。だが、やがて五十銭銀貨を一つ差し出しました。「……それは悪い暇つぶしというものだ。だがこれは大層よくアロアに似ているから、うちの母さんに見せたら喜ぶだろう。この金をやるから、この絵はわしにくれ」と言うと、ネロは、顔を上げ、手を後ろへやって、「……いいえ、僕、お金なんか入りません。この絵がよかつたら持つてください。いつもあなたは親切にして下さるのですから」と、こう無邪気に言つて、そして少年は犬を呼び、畑を横切つてさつさとそこを立ち去りました。「……あの銀貨をもらつていたら、あれが見られたんだが、でも僕はあの絵を売ることは出来ない。たとえあれが見られるにしても」と、少年は犬に向つて呟くのでした。

二十、父親は、家族に向かつて

その夜、コゼツは、「……あの子供をあまりアロアと遊ばせちゃいかんね。あとできつと心配事が起つて来るよ、あの子供は今年十五だし、娘は十二だ。それにあの子は、ちょっとした顔つきでもあるし」と、お上さんに話しかけました。お上さんは、ストーブの上に置かれたさつきの絵につくづく見入りながら、「……それにまじめな子で、一本氣のようでもございますしね」と言うと、「……そこじやて。それをわしは思うのじや」と、コゼツは、煙草をつめながら言いました。「……ほんとにそうでございませぬ。あなたのお考え通りになります」と、おかみさんは口ごもりながら、「……大層結構のように思われますわ、娘だつてこの財産を継ぎますれば、二人の一生は安楽ですし、それに越した二人の幸福はありませんわ」と言うのでした。すると、「……だから女は困るといふのじや、ばかな」と、主人は、パイプをテーブルに打ちつけて、「……あの子供が何じや、乞食じやないか。おまけに画家にならうなどと自惚れているからなお始末が悪い。これ、よく注意して、もう決して遊ばせてはならんぞ」と言うのでした。

お上さんは、ネロを可愛がつていましたが、氣の弱い人だったので、そのまま黙つて、主人の言う通りになることにしました。けれども、母親として、娘が一番仲良くしている友たちを裂こうとする事も出来ず、また、主人としても、貧乏ということ以外には何一つ欠点のない子供に対して、そう酷いことを仕向けることも出来ませんでした。が、わざわざそんなことをしなくても、コゼツの目的は、達せられたのでした。

二一、ネロの氣持ちとアロアの氣持ち

ネロは、男らしく、静かで感じ易い少年でしたから、もうそれ以後は諦めて、たとい暇があつても、丘の上の赤い風車の方へは、足を運ばなくなつたのでした。何があんなにコゼツの旦那の氣にさわつたのか、ネロには分りませんでした。ただ大方、牧場でアロアを写生したことがいけなかつたんだろうと思つていました。で、時として、アロアが彼を見つけて飛んで来て、手にすがりつくことでもあると、彼は悲しげに微笑んで、いろいろと宥めるのでした。「……ね、アロアちゃん。お父さんの御機嫌を悪くしないで下さいね。お父さんは、僕があなたを怠け者にでもするように思つていらつしやるんだからね。だか

ら僕と一緒に遊ぶのがお気に入らないでしょう。でもお父さんはいい方で、ほんとにあなたを可愛がっていらつしやるんだから、僕たちは、御機嫌を損ねるようなことをしてはいけない。ね、アロアちゃん。よく分ったでしょう」とは言え、それは、悲しさや寂しさを抑え抜いた言葉でした。

ネロにとつては、微風にそよぐポプラ並木の朝の景色も、もはや以前のようには、愉しげに晴々しくは見えませんでした。その古ぼけた赤い風車は、ネロにとつては一つの目印で、そこまで来ると、一休みするのが決まりでした。そして、往きにも帰りにも、水車小屋の人たちに元氣よく挨拶すると、その低い水車小屋の木戸の上にアロアのお金髪がちらと揺れて、やがて、アロアの小さなみじのような手に、パトラッシュの御馳走のパンの皮や魚の骨などが持つて来られるのが常でした。――が、いまは――パトラッシュは、不思議そうな目付きで、木戸が固く閉じられてあるのを眺めます。少年はさっさと通り過ぎて行くが、その心の中では辛いのです。

アロアは、窓の中で編物をしてる手にほろつと涙を落す。主人のコゼツは、粉袋や粉挽機械の間をせつせと働きながら、いよいよ心を頑なににして独り言を言うのでした。「……こうして離しておく方がいいのじゃ。あの子供はどうせ乞食みたいで、その上画家になるうなどと、とんでもない馬鹿げた夢を見ている。まかり間違えば、このちどんな不幸せが起つて来るかもしれん、用心用心」と言うのでした。

こうした間にも、例の松の板切れは、粉挽屋の食堂のストープの上の置時計と十字架像の間に、大事そうに飾られてありました。ネロは、時々、絵だけがこうも歓迎されて、それを描いた自分はなぜ除けものにされるのかしらと、悲しい、寂しさを抱くのですが、ネロは決して恨みがましいことは口に出しませんでした。一人ずつと心の中の悲しみに堪えているのが彼の性(分)でした。ジエバン爺さんは、よく彼に言い聞かせました。「……わしらは貧乏人じゃ、何でも神様が下されたものをそのままお受けせねばならぬ。それにはよいことも悪いこともある。だが、貧乏人は、えり好みをするのがやない」と。

少年は黙つて、お爺さんの言葉を聞いていました。彼は何にもその言葉に逆いませんでした。しかし、「……いや、貧乏人だつて、時には選ばねばならぬこともある。偉くなる道を選ぶ、それを誰がいけないと言うものか」と、ネロは汚れない心に一途にこう考えているのでした。

二四、ネロとアロアの会話

ある日、運河の畔の麦畑にネロがたった一人で佇んでいると、ふとそれを可愛らしいアロアが見つけて駆け出して来ました。そして、ネロに寄り添いながらしく泣き出すのでした。明日は、アロアの誕生日なので、これまでなら、ネロを招いて、おいしい御馳走をしたり、大きな納屋で遊びまわったりして、楽しく過ごせるはずなのに、今年に限つてお父さんもお母さんも、ネロを呼んではいけないと言ひ渡されたのでした。ネロはやさしく少女に接吻して、そして、深く胸の中に決心したことを囁くのでした。

「……ね、アロアちゃん、僕もいつかはきっと偉くなつて見せますよ。やがて時が来れば、お父さんが持つていらつしやる僕の描いたあの松の板切れだつて、あの大ききの銀を出しても買えない程な値が出ますよ。そうなつたら、お父さんだつて、戸を閉めて僕を入

れないようなことはなさらないでしょう。ただ、アロアちゃん僕を忘れないでね。忘れないで下さいね。僕きつと偉くなるから——」と言うのでした。すると、「……まああたしがあんなを忘れるって言うの、そんなこと言うならいいわ」と、愛らしく泣き濡れたアロアは、頬をふくらましてすねたように叫びました。その眼には、真心が頭れていました。少年はそれを見ると胸が迫って、急いで目を逸らしました。遙か彼方には、宵闇にほの白く、あの旧教の大伽藍がそびえ立っていました。少年の顔には、一瞬間、何か崇高な輝きが閃きました。アロアはちよつと怖くなったほどでした。

二五、ネロの決心とその夢

さて、「……僕は偉くなる」と、少年は深い息をして呟きました。「……アロアちゃん、偉くなれなかつたら、僕は死ぬ」と言うのと、「……死ぬんですって、じゃあたしを忘れてしまふのね」と、アロアは少し苛立つて、ネロを押し退けました。少年は頭を振って微笑み、脊丈ほどもある黄色に熟れた麦の影を、家の方へと帰って行くのでした。少年の目には幻が浮んでいました。——今にきつと幸福になれる時が来る。名を成して再び故郷に帰って来て、改めてアロアのお父さんに挨拶したら、その時、お父さんはどんなに僕を喜び向かえてくれるだろう。村の人たちも僕を見ようとして集まって来て、隣れだった昔のことなど思い出し、よけいその成功を喜んでくれるだろう。その時が来たら、ジェバンお爺さんには、あのセント・ジャック寺の中に描いてある偉いお坊さんのように、毛皮や紫の着物を着せてあげて、その肖像を描いてあげよう。それから忠犬パトラッシュの頸には金の頸環をつけてやり、自分のすぐそばへおいて、集まって来る人々に、「……この犬が、前には私のたった一人の友だちだったので」と紹介しよう。住む家は、あの大寺院の塔の見える丘の上へ大理石の宮殿のようながいい。そこへ多くの貧乏な淋しいそして大きな望みを抱いている少年たちを集め、明るく楽しい生活を与えてやって、彼らを励まし、もし彼らが自分の名を褒め讃えるようなことがあれば、「……いや、私に感謝する程のことはない。ルーベンスに感謝しなさい。もしルーベンスがなかったら、私は何にもなれなかつたらう」と言おう。——こんな空想が全く清らかにあどけなく、微笑ましく少年の胸を掩い包むのでした。

このアロアの誕生日の夜、ネロとパトラッシュは薄暗い小屋で、まず粗末な夕食を取っていました。丁度その頃、水車小屋の中では、村の子供たちがすっかり招かれて、明るい灯の下で、美味しい珍しいお菓子や御馳走を頬張りながら、笛や胡弓に合せて、踊り狂っているのですから、ネロにとつては、よい気持のしない日であるにも関わらず、彼はよく堪えて、小屋の入口に犬と並んで腰かけ、「……ね、パトラッシュ。くよくよするのは止そうよ」と、こう言いながらパトラッシュの頸を抱いて接吻してやるのでした。粉挽場の方からは、楽しい笑い声が伝わって来ます。「……いいさ、いいさ。今にだんだん変わって来るからね、辛抱おしよ」と言うのでした。

少年は、未来のことを確く信じていますが、パトラッシュはさすがに犬ですから、現任うまい肉の御馳走にありつけないことには、将来にどんな沢山の御馳走を思い浮べて見ても、それでは償いがつかないのです。で、その日以後、パトラッシュはコゼツの旦那の姿を見れば、忌々しそうに唸り声を上げるのでした。

二六、ネロとお爺さんとの会話

「……今日はアロアさんの誕生祝いの日だろう」と、お爺さんは、小屋の隅っこの床の中から聞きました。少年は黙って頷きました。お爺さんがそれを覚えていたのが、少年はどんなに切なかつたでしょう。「……じゃどうしてお前出かけないんだい」と、お爺さんは、また問いかけました。「……お前、いつの年だつて行かないことはないじゃないか」と。「……だつて僕、お爺さんが病気だし——」と少年は、俯いて言葉を濁しました。「……何の、何の、わしのことなら気にせんで行つといで。出がけにビュレットのおばさんに頼んで行つてさえくれれば、すぐ来て見てくれるよ。——ネロ、お前どうしたんだ。まさかあそこのお嬢さんの悪口でもしゃべつたんじゃないか」と、お爺さんは、不思議でならないのでした。「……いいえ、お爺さん。悪口なんか——」と、少年は口早に答えましたが、そのうな垂れた顔は赤くなりました。「……何でもないの、お爺さん。ただ、コゼツの旦那が、今年は僕を招ばなかつただけ。あの人、ちよつと僕に思い違いをしてるらしいの」と言うと、「……だつてお前、何にも悪いことはしなかつたんだろう」と聞くと、「……それが、いいか悪いか、僕には分らないんです。僕は、アロアちゃんの顔を、松の板切れへ写生しただけなの」と言うと、「……ああ、そうか」と、お爺さんは黙ってしまいました。ネロの無邪気な言葉を聞いて、お爺さんにはすつかりわけが分つたのです。

老いぼれて、長い間、掘立小屋の中に寝たきりではありましたが、お爺さんは、まだ、世間がどういふものかということ、忘れてはいませんでした。お爺さんは、優しく孫の美しい顔を自分の胸の辺りに引き寄せて、「……お前は貧乏な子だからのう」と、その声は掠れて震えました。「……ほんとに貧乏なんだからのう。お前も辛い目を見るのう」と言うと、「……いいえ、お爺さん。僕は金持と同じだよ」と、ネロは囁きました。実際のところ、ネロはそう信じていたのです。自分は強い力を持っている。王様の力でもどうすることも出来ないほどの力を持っているように思えました。少年は立ち上つて、再び戸口に佇みました。秋の夜は、静かで、高いポプラの枝が微風に揺らいでいます。空は夥しい星でした。少年は目を開けて、じつとそれを眺めました。粉挽屋の家の窓という窓は赤々と灯が洩れて、時折、笛の音が響いて来ます。涙が少年の頬を伝わりました。まだ何と言つてもほんの子供ですから、悲しいのでした。けれども、にっこり笑顔を作つて、「……なあに将来だ」と、独り言を言うのでした。夜が更けるまで彼はそうして佇んでいましたが、やがてパトラッシュを抱いて床につき、寂しくも穏やかな眠りに落ちて行くのでした。

二七、ネロの大作と秘密の部屋

さて、少年には、パトラッシュのほかに誰にも知らせない一つの秘密がありました。小屋には小さな次の間があつて、そこはネロだけが入るところになっていました。ひどく荒れた部屋ですが、北側から光線が入ります。この部屋で、ネロは、木片で無細工な画架を拵えて、それに大きな紙を張り、そこへこれぞと思うものをぜひ一つ描き上げようと一生懸命になっているのでした。ネロは、誰にも画の描き方を教わつたことはありません。むろ

ん、絵具を買う余裕などありません。ただ、白と黒の使い分けで目に写るものを描くだけでした。今、彼が木炭筆で描いたばかりの大きな画は、一人の老人が、倒れた樹に腰を下しているところ、ただそれだけです。少年は以前、年取った樵夫のネットセルが、夕方になると、そんな様子で休んでいるのを度々見たのでした。輪廓の具合や影の描き方など、誰に教わったでもないけれど、ネロは、自分の考え一つで、さも老いぼれた疲れた老人を描きました。宵闇が迫って来る暮れ時に、倒れた樹に腰を下して、あらゆる世の苦勞をなめ尽くしたような疲れた顔付きで、じっと思い沈んでいるこの老いた樵夫の様子は、全く詩の趣きがありました。もとよりその画は素人らしく、欠点もありますが、しかし、ほんとうに自然な素直な画です。いかにも、悲しさに咽んでいるようで、ある美しささえ持っています。パトラッシュは、いつも何時間でも動かずにこの画が出来上っていくのを眺めていました。そして、ネロの心に希望が燃えているのを悟りました。その希望というのも、恐らく、向う見ずな無駄なことかも知れませんが、ネロはこの画を出品して、年額二百フランの賞金を得るために競争してみようとしているのです。その頃、アントワープの町では、十八才以下の天分ある少年は、身分に関わらず、鉛筆画か木炭画の自作の作品を出して、その中から一枚だけが選ばれて、この賞金をもらうことになっていたのです。ルーベンスに縁の深いこの町では、一流の画の大家が三人審査員になって、それらの作品の優劣を決めることになっていたのです。

二八、完成した絵を決められた場所に置く

春と夏と秋を打つ通して、ネロは、この大作の完成に余念がありませんでした。もしこれがうまく栄冠を担えれば彼にとつては、年来の宿望に向って第一歩を踏み出すことなのです。ネロは、この企てを誰にも言いませんでした。お爺さんに言ったところであつてはもらえないし、それはアロアは、もう彼にとつて、ないも同じでした。打ち明けるのはただ犬のパトラッシュだけ。そうしていつも、「……ああルーベンス、ルーベンスの魂が知っていたら、きっと僕を選び出してくれるのだが」と呟くのでした。パトラッシュもまた、こんなことを考えていました。ルーベンスという人は、きっと犬を愛していたに違いない。もし犬を深く愛していたんでなければ、あんなに正しく美しい犬が描けるものではないと――。

出品する画は、いずれも十二月の一日に運ばれて、その月の二十四日に結果が発表されることになっていました。で、もしうまく入選すれば、クリスマスには二重の喜びを持つるわけでした。身を切るような寒風の吹き荒ぶその日、ネロは波打つ胸を抑えて、いよいよ出来上った苦心の画を、牛乳車に乗せて、パトラッシュと一緒に町へ運んで行きました。そして、決められた通りに展覧会の入口のところに置きました。「……大抵だめだろう――僕には分らない――」と、ネロは、妙に臆病になって、何か胸が痛いほどでした。画は置いて来たものの、考えてみれば、ずいぶん向う見ずな話です。靴下もないようなこの貧乏な子供が、自分の名さえろくろく書けない無学の身で、恥ずかしくもなく、そんな一流の大家たちに自分の画を見せたらうなんて――。

だが、ネロは、大寺院に近づくに連れてだんだん元気を取り戻しました。威厳のある王様のようなルーベンスの姿が、暗い中からすつと浮んで来て、ネロに微笑みかけ、囁く

ように思われたからです。「……気を落してはいけないよ。私だって、アントワープに名を残すようになったのは、決して弱い心では出来なかったことだよ」と。

二九、パトラッシュの老いと衰え

ネロは、冷たい夜をわが心を励ましつつ帰って行きました。彼は全力を尽くしたのです。あとはもう神様の御心に任せる他ありませんでした。

その夜、ネロが家へ帰ってから雪が降り出し、幾日も幾日も降り続けました。田も畑もあぜ道もすっかり雪に埋もれてしまい、川という川はみんな固く凍り付いてしまいました。もうこうなると、牛乳を持ちまわるのは、実に辛いのです。吹きさらしの野、夜明けの暗い人気のない町は、余計寒さが堪えるのです。殊に犬のパトラッシュは、少年が年毎に次第に力を増して行くのに反し、ますます老いぼれて行くのみで、骨の節々が硬ばって来て激しく疼いて苦しいのです。「……パトラッシュ、お前はもう家で寝ておいでよ。お前ももう隠居してもいい頃だ、大丈夫、僕一人で車は引けるから」と、ネロが無理にも止めようとしたのは、一朝や二朝のことではありませんでした。が、パトラッシュは聞きません。毎朝、起きると、彼はちゃんと棍棒のところへ行っています。そして、今まで長の年月通い慣れたその野道を、雪を蹴って進むのです。ただ少年に以前より手数をかけるのは、牛乳車の輪が凍った轍の跡にはまって動きの取れない時は、後ろから棒を差し込んでもらうのです。これだけ昔より力が衰えたのです。「……死ぬまでは休息と言うことはない」と、パトラッシュは、いつもこう考えていました。が、時々、ふっとその最後の休息が間近に迫って来たように感じられて、何だか目が前ほどはつきり見えなくなつたし、教会堂の鐘が五つ鳴って、パトラッシュに起きて働かねばならぬ時が来たこと知らせると、ぱつとはね起きるのに変りはありませんが、それが前と違って非常な苦痛に感じられるのです。「……かわいそうなパトラッシュ。お前もわしと一緒に安楽往生をするのかい」と、ジェバン爺さんは、痩せこけた皺だらけの手で犬の頭をなでました。このお爺さんと老犬とは、いつもパンの皮を分けて食べました。そしていつも同じ心で年を取るのを嘆きつつ行末のことを案じ合うのです。お互いが死んでしまったら、あとに残るあの可愛いネロはどうなるのでしょうか。

三十、粉挽場の火事で主人から疑われる

ある日の午後のこと、少年と犬とがアントワープからの帰り道でした。雪は凍って、まるで大理石のように広い野原に敷きつめていました。ふと足許を見ると、可愛らしい人形が落ちていました。五、六寸の大変美しい太鼓叩きの人形で、ちっとも傷のついていない立派な玩具でした。ネロは拾い上げて、いろいろ探して見ましたが、落し主が分らないので、それをアロアにやったら、さぞ喜ぶだろうと考えました。落し主が分らないのだから、それを長い間の仲良しにやっても別に悪いことではあるまい、と彼は思ったのです。

ネロが粉挽屋のところを通った時は、もう静かな晩になっていました。アロアの部屋の小さい窓はよく分っています。その窓のすぐ隣から斜下につき出た屋根、彼はその屋根によじ登って、静かに窓を叩くと、中で小さな灯がつかまりました。アロアは窓を開けてび

つくりしました。ネロは、太鼓叩きの人形をアロアの手握らして、小さな声で口早に言いました。「……アロアちゃん、お人形だよ。雪の上で拾ったの。とっておきなさいよ、ね、神様が下すつたんですもの」と。

ネロは、すると屋根を滑り降りて、アロアが「ありがとう」と言う間もなく、闇の中に消えてしまいました。その夜、粉挽場が火事になって、水車場と母屋だけは助かりましたが、納屋と沢山の麦が焼けました。村中は大変な騒ぎで、アントワープからは、雪を蹴立てて、蒸気ポンプが駆けつけて来ました。幸い、保険がつけてあったので、大した損害にはなりませんでしたが、主人のコゼツは、かんかんに怒って、この火事は、過ちからではなく、きつと誰かがつけ火をしたに違いないと怒鳴りました。この時、ネロも、円かな夢を破られて、びっくりして駆けつけて来ましたが、コゼツの旦那は、荒々しく彼を突き退けて、腹が立ってたまらないように、「……貴様は宵にこころをうろついていたな。俺はちゃんと知っているぞ、貴様こそ今夜の火事には一番覚えがあるはずだ」と怒鳴りました。ネロは、あまりのことにぼんやりしてしまって口が利けませんでした。場合が場合だから、聞いている人は、それを冗談だと聞き過ごしてくれないだろうと、全く途方に暮れてしまいました。

三一、ネロは「村八分」状態に……

粉挽屋の主人は、翌日になっても、近所の人の前で大っぴらにこの言葉を口にしました。すると、中には、ネロがその夜、別に用もないのに粉挽場の辺をうろろしていたの、アロアと遊ぶことを断られたので、ネロがコゼツの旦那を恨んでいたのと、陰口を聞く者も出て来、その上何とかしてこのお金持に取り入って、その一人娘を息子の嫁にもらい、財産にありつこうという腹黒い人たちも交って、ジエバン爺さんの孫は、全く可哀な立場に置かれてしまいました。

村の人たちは、誰もまさかコゼツの旦那の言葉を信じるわけではないのですが、何しろ、狭い村のことではあり、村一番のお金持の気に逆っては何かと自分たちの損ですから、あんまり親切そうにしていると、村一帯をコゼツの旦那に見られては面倒だと、みんな申し合せたように、ネロを避けるようになってしまったのです。ですから、それからは、ネロとパトラッシュが、毎朝アントワープへ運んで行く牛乳の御用を聞きにまわっても、牧場主たちは、以前のように何かと親切に計らってくれず、素気ない態度であまり口も利いてくれないのです。

粉挽屋のお上さんは、涙ぐんで恐る恐る主人に言いました。「……あなた、それではあんまり可哀想ですわ。私、あの子が気の毒でたまりません。あの子はほんとに無邪気な正直者ですもの。いくら悔しく感じたことがあったとしたって、夢にもあんな大それた悪いことをするような子ではありませんわ」と。

けれども、コゼツの旦那は、一徹者ですから、一度、自分の口から言いふらしたことは、是が非でも押し通さねば済まないのです。たとえ心の奥底で悪かったと気づいていたとしても。——憐れなネロ、いかに身が潔白なれば構わないとは言え、そこはまだ子供です。「……なあに。僕の画さえ入選したら、村の人たちだって少しは僕に同情してくれるだろう」と、気を取り直し取り直しても、パトラッシュとたった二人でいる時など、止めよう

もない涙が溢れ落ちるのでした。全く幼い時から会う人毎に可愛がられ、褒められて大きくなつた身が、突然あられもない汚名を着せられ、その頼りにしていた世間の打つて変わった冷たい素気ない態度を堪え忍んで行くことは、死にも勝る苦しみでした。雪が降り続き、村の人たちは、みんな炉端に集まるのにネロとパトラッシュは除者で、もう用はないのです。隙間の多いあばら家に二人はしよんぼりとお爺さんのお守りをするだけで、炉は、いっしか火が消えて冷たく、食卓の上には食べものもない時が続くのでした。それもそのはず、近頃、アントワープから驢馬を仕立てて、毎日牛乳を買い出しに来る商人が現われたのです。そうして、少年を憐れんで、その商人の牛乳を買わず、緑色の小さな牛乳車を待つていてくれる家は、ほんの三、四軒に減つてしまい、そのために、パトラッシュが引かねばならぬ車の荷は軽くなつたものの、ネロの財布に入る端金はいよいよ僅かになつてしまつたのでした。

犬は、いつも止まる家の前にはちゃんと車を止めますが、その門は、もはや彼等のためには開かれませんでした。憐れみを乞うようにじつと見上げる犬の眼は、見る人の胸を打ちましたが、みんな無理に目をつぶつて心を鬼にして閉め出すのでした。パトラッシュは、力なく空車を引いて行きます。誰だつて人情のないものはありませんが、コゼツの旦那の気にさわるのを恐れたからでした。

三二、クリスマス近くのお爺さんの死

いよいよクリスマスは近づいて来ました。寒さは一層厳しくなり、雪は六尺も積もり、氷は、牛や人間がどこを踏んでも大丈夫な程厚くなりました。この季節がこのあたりでは一番楽しい時なのです。どんな貧乏な家にも、温かな美味しい御馳走やお菓子が用意され、ストーブの上には、スープ鍋がさも美味そうに湯気を立てていて、部屋は色美しく飾られて、愉しげな笑い声が洩れるのでした。馬という馬はみんな鈴を付けられ、その音がいたるところに賑やかに響くのでした。また外には、若い娘たちが美しい頭巾に厚い上着をつけ、キャツキヤツとはしやぎながら雪道をあちこちの集まりに行きつ戻りつしています。その中に、ただネロの小屋だけが暗く冷たいのでした。

ネロとパトラッシュは、全くの二人つきりになつてしまいました。クリスマスの一週間前、とうとうジェバン爺さんは息を引き取つてしまつたのです。お爺さんは、寝ている間に死にました。明け方の薄明りに、初めてそれを知つた二人の嘆きは、どんなだったでしょう。お爺さんは、長い長い間、病の床にいたきりで身動きもならず、二人のために何をしてやることも出来ませんでした。お爺さんは、どんなに彼等を愛し抜いていたことでしょう。お爺さんは、長い長い間、病の床にいたきりで身動きもならず、二人のために何をしてやることも出来ませんでした。お爺さんは、どんなに彼等を愛し抜いていたことか——その亡骸を松板の棺に納め、小さな教会堂の隣の名もない墓に葬つた時、二人は悲しみ極まつて、雪の上に泣き崩れたまま立ち去ろうともしませんでした。ああ、犬と少年——彼等は全くこの世に頼るものなく取り残されたのでした。

今度こそは憐れに思つて心も解けるだろう、と信じたお上さんの心頼みも空しく、粉挽屋の主人は、そのささやかな葬式が門前を過ぎるのを見ても、眉を寄せたまま悔やみ一つ咳こうとはしませんでした。気の弱いお上さんは、取りつく術もなく涙をふきふき、そ

つと凋しぼまない花を花環はなわに編あんで、アロアにそれを墓場へ持って行かせ、今は少年も立ち去つて、人影ひとかげもないその墓はかの上にうやうやしく置かせたのでした。

三三、二人の悲しみと家賃の滞納

ネロとパトラッシュは、張り裂けるような悲しい胸を抱いて墓場を立ち去ったが、その帰り行く小屋こやさえも、なお二人に慰なぐさめを与えることをしませんでした。それは、この小さな家の地代が一月遅れになつてしまつていたところへ、この悲しい葬式のために、ネロは、最後の一銭まで払つてしまつたのです。小屋の持主というのは、靴屋のおやじで、世の中に金ほど可愛いものはないと思つている人情知らずでした。彼は、ネロの詫言わびごとに耳をも貸さず、家賃や地代が払えないなら、その代り小屋にあるものは、鍋なべから釜かまから、木片きざれ一つ、石塊いしくれ一つに至るまで、すっかりおいて明日限り立ち退くと、酷むごい宣告を下したのでした。小屋は、貧しく小さかつたが、ネロたちは、どんなに懐なつかしい思い出をそこに持つてゐることでしよう。夏になれば、一面に纏まとひ付いて繁しげるぶどう。朝早く、露を含んで彼等に微笑ほほえみかける畑はたけの豆の花。彼等かれらのどんな喜びも、どんな悲しみも、みんな見守つていたこの小屋。どんなに疲れて帰つて来ても、安らかに憩いこわせてくれたこの小屋。——その晩、ネロとパトラッシュは、一晩中、火の気のない炉端ろばたで灯ともも付けず抱き合つていました。めいめい心の中に、この小屋の過ぎ去つた日のことを思い起しながら——。

三四、二人は、小屋を出て町をさ迷う

やがて一夜が開けました。それはクリスマスの前の日でした。ネロは震えながら、冷え切つた両腕で固く犬を抱きしめては、大粒の涙がはらはらと犬の額ひたいにかかりました。「……パトラッシュ、行こうよ。ね、行こう。僕らはじつとして蹴けり出されるまでもない。ね、さ、行こう」と。二人は、悲しげに並ならんで小屋を出ました。どんな大事なものも、どんな懐なつかかしいものもすっかり残して、全くの着のま着のみままで——。緑色の牛乳車の前を通る時、パトラッシュは、さも切せつなげに頸くびを垂たれてしまいました。ああこれももう二人のものではないのでした。

彼等は、通かよい慣れた道をアントワープの方へ辿たどりました。まだ太陽は登らず、道に沿そうた大抵たいていの家は、まだ戸を閉めていました。町には、二、三の人影ひとかげもありましたが、誰も少年と犬を振り向く人はありません。ネロは、ある家の前に来ると、立ち止つて、訴えるような目付きで家の中を覗のぞきました。それは、お爺おじいさんが元気だった頃に、よくやって来たことのある人の家でした。「……もし、パンの堅皮かたがわがありましたら、犬にやって下さいませんか。これはもう老いぼれてる上に、昨日のお昼から何にも食べてないのです」と、ネロは、恐る恐る言いました。すると、家の女の人は、素早く戸を閉めて、この頃は「……麦こむぎが高たかくつて」というようなことをぶつぶつ呖やぶくのでした。ネロとパトラッシュは、取り付く術すべもなく、またとぼとぼと疲れた足を引きずつて行きました。町に着いた時には、もう鐘は十時を鳴らしていました。「……僕が何か売れそうなものを持つてたら、パトラッシュにパンを買つてやれるんだがと。だが、ネロが身に付けているものといつたら、ぼろぼろの着物と汚よごれた木靴きくつだけでした。パトラッシュは、ネロの心持を悟さとつて、鼻先をネ

口の掌の中に押しつけ、どうか、自分のためなら心配してくれるな、何もいらぬからと、頼むような様子を見せるのでした。

三五、例の面の審査の結果発表

さて、その日の十二時には、例の面の審査の結果が発表されることになっていました。その会場の入口には、もう大勢の少年が集まっていました。みんなお父さんやお母さんに連れられているいろいゝ囁き合っているのです。その群に入り込んだ時、ネロの胸は激しく波打って、痛いほどでした。彼はパトラッシュをしっかりと抱き締めました。やがて町の大鐘が音高く鳴り渡りました。十二時になったのです。と同時に、玄関の扉が開いて、大勢はときめく胸を抑えながらなだれ込みました。当選の面は、上段においてある台の上に飾られることになっていたのでした。はっと思った瞬間、ネロは目が暗み、頭がぼーっとして、からだは崩れ折れかかりました。ようやく気を鎮めて、もう一度その飾られた面を見ましたが、ああ、それは彼の描いた面ではありませんでした。やがて、よく響き渡る声で、当選した面は、アントワープ生れの埠頭場主の子、ステファン・キイスリングの作であると告げられるのでした。

三六、パトラッシュは雪の中に革袋を見つける

ネロが気がついた時は、彼は玄関先の石の上に倒れていて、パトラッシュが一生懸命彼を正気づかせようと鼻をすりつけていました。少し離れたところでは、アントワープの少年団が入選した名誉ある友だちを大騒ぎをして取り囲みながら、これからその埠頭場の家まで威勢よく送って行こうとしているところでした。ネロは、よろよると立ち上って、パトラッシュをしっかりと抱き締めました。「……ああ、もうだめだ。パトラッシュ、もう何もかも」と、ネロは、幾度も倒れそうになるのをようよう踏み堪えました。もう、お腹が空き切って辛抱できないほどでした。やっぱり村へ引き返すほかはないのです。犬は頭を垂れて従いました。パトラッシュの強い足も、もう疲れ果てているのです。雪はますます降りしきり厳しい北風が吹きつけました。野原は殊に凄まじく、慣れた道を横切るにも、並大抵ではないのでした。やつとの思いで村に近づいた時、鐘が四つ鳴りました。突然パトラッシュは立ち止まりました。何か雪の中に嗅ぎつけたものと見え、妙な吠え方をして、咬え出したのは小さな革袋で、それをネロに渡しました。丁度その近くに小さな十字架像があつて、その下にささやかなお燈明があつたので、ネロは気のない様子で、その薄明かりに袋を近づけて調べると、コゼツという名が書いてあり、中には六千法という大金の切手が入っていました。これを見るとほんやりしていた少年の気持が、しゃんとして来ました。彼は、早速それを懐に押し込んで、犬を撫でて歩き出しました。パトラッシュも小走りに続きました。

三七、ネロはその革袋を届けに行く

ネロは、まっすぐに粉挽小屋へ駆けつけて、入口の戸を叩きました。開けたのはお上さ

んで、目を泣き張らしていました。アロアもそばにすがりついていました。「……ああ、お前さんだったの、可愛そうに」と、お上さんは、涙をこぼしこぼし優しい声で言いました。「……でもね、早くお帰りよ。旦那さんが見たらやかましいからね。今夜、うちでは大変な心配事が出来たんだよ。旦那さんがさつき馬でお帰りの途中、大金の入った革袋を落してね、今探しにお出かけなすったところなの。生憎この雪ではねえ——。もし見つからなかったら、うちは丸潰れになってしまふんだよ。ほんとにうちの人が、お前さんに辛くした報いが今来たのですよ」と言うのでした。

三八、革袋を手渡し、パトラッシュを残り、

少年は、革袋を取り出し、パトラッシュを家の中に呼び入れました。「……この犬がこれのお金を今見つけたんです」と、ネロは、口早に言いました。「……どうぞ旦那様にそうおっしゃって下さい。もうこの犬も老いぼれて来ましたから、どうかこの犬だけ宿を貸して飢えないようにしてやって下さい。お願いです。僕の跡を追いますから、どうか優しくなだめてやって——」。

待つて、と言う間もなく、少年は、身をかがめて犬に接吻したかと思うと、素早く扉を閉め、闇の中へ走り去ってしまいました。お上さんもアロアもあまりの喜びと驚きに言葉も出ませんでした。パトラッシュは、閉め込まれた櫪の扉に腹立たしく吠えかかったが、もうだめでした。お上さんもアロアもネロのことは気になりましたが、何事も父親が帰ってから、今はせめてパトラッシュだけでもと菓子や肉を一杯出して来て、一生懸命なだめ、炉ばたの温いところに誘おうとしましたが、それは何の甲斐もありませんでした。パトラッシュは石のように扉の前に頑張ったまま見向きもしないのです。

しばらく経って、別の入口から主人のコレツがしょんぼり帰って来ました。どつかと腰を下すと、呻くように言いました。「……ああ、もうだめだ。提灯をつけて残らず探して見たのだが、もうない。——娘にゆずる分も何もかもすっかりなくなってしまった」と言うのでした。お上さんは、革袋を差し出して、事の次第を話しました。聞いているうちに、コレツはたまらなくなつて、ぶるぶる震えるからだを投げ出し、両手でしつかりと顔を掩つてしまいました。「……ああ、わしはあの子に辛く当つて来た。わしのような人間が、どうしてあの子の親切を受けることが出来ようか」と、彼は身悶えして呻きました。小さなアロアは、それに元気づいて父のそばへにじり寄り、その美しい捲毛の頭を父の膝に押しつけながら、「……お父さん、ネロはもう家へ来てもいいのね。明日招んでもいいのね、先のように」と言うと、コレツは、娘をしつかり抱き締めました。その顔は涙で濡れていました。「……ああ、そうとも、そうとも。明日のクリスマスには招ぶのだよ。いつでも遊びに来たい時は来てもらうがいい。わしの剛愎がこんな罪をつくつたので、いま神様が懲らしめて下さつたのだ。わしは神様におすがりして、あの子に償いをせねばならぬ。罪滅ぼしをせねばならぬ」と言うのでした。

三九、頑固な父親の心は解けて……

アロアは、嬉しさのあまり父親に接吻をして、大きな膝から滑り落ちるか早いか、扉の

方ばかり見守っている犬の許にかけて行って、「……今夜、パトラッシュに御馳走してやってもいいの」と、さも嬉しそうに叫びました。「……いいとも、いいとも。うんと御馳走しておやり」と、コゼツは言いました。この老いた頑固なおやじさんも、全く心の底から改心してしまったのでした。

その夜は、クリスマスの前夜ですから、大きな粉挽場の中は目の覚めるように美しく飾り立てられていました。吊された線の枝々。梅もどきの赤い実がたくさん生っている枝の間から、十字架像と時鳥の形をした置時計とが覗いていました。アロアを喜ばせるための、紙で拵えた提灯には火が灯り、いろいろな玩具や目の覚めるような絵紙に包んだ美味しいお菓子が一ぱい並んでいました。このクリスマスの飾りをした明るい楽しい、そして食物の沢山ある部屋でパトラッシュを一番のお客さんにしよう、アロアは一生懸命でした。が、パトラッシュは暖かい炉ばたへ行こうとも御馳走を振り向こうともしませんでした。からだは凍え、お腹は空き切っているにも関わらず、ネロがいなければ犬は何にも食べたくもなく、慰められもしないのです。パトラッシュは、ただ石のように扉のそばに座り込んで逃げ道はないかと、そればかり狙っているのです。これを見たコゼツは言いました。「……あの子がないといかんのだな。よしよし夜が開けたら、何はおいでもわしが向かいに行つてやるからな」と言うのでした。

四十、パトラッシュの気持ちは……

ああ、パトラッシュの他に誰がネロの心を知っていよう。犬を残してただ一人、飢えと悲しみを覚悟して出て行つたその雄々しくも痛ましい心——それは、ただパトラッシュだけが感じていることなのです。

粉挽屋の台所は大変暖かです。炉の中では大きな楢(木)がばちばちと赤く燃え、隣近所の人々は、夕飯のために焙った鶯鳥の肉一片とお酒一杯とにありつくために、交る交るやって来ました。アロアは、明日こそ大好きなネロと遊べるという嬉しさにはしゃぎまわつて、その金髪が頭のうしろで踊つてばかりいました。主人のコゼツは、胸が一杯になつて、涙ぐんだ眼で娘に笑いかけながら、どうしたら娘の懐かしがる友だちと仲直りが出来るかと考えていました。また、お上さんは優しい満足そうな顔付きで、静かに糸車のそばに座りました。置時計は時鳥の啼き声そっくりに時を告げました。その中でパトラッシュは、第一のお客様としていろいろ親切な言葉をかけられても、やはり頑張つて動きません。ネロがいなくて、どんな愉しみも御馳走もパトラッシュを喜ばすことは出来ないのです。

四一、家を抜け出てネロを探し求める

やがて、大きな食卓の上に様々な御馳走が並べられ、お客さんたちは席につきました。部屋の中には喜びの声が満ちて、キリスト降誕の仮装をした大勢の子供たちが、それぞれ心を込めた贈物をアロアに贈つた、その時でした。今まで隙を狙っていたパトラッシュは、新しく来たお客さんが思はず扉の掛金を外した途端、風のように抜け出しました。パトラッシュは、その疲れ切った足が続く限り、暗い夜の雪道を走りに走って行きました。

ただひたむきにネロの跡を追うばかりです。もしこれが人間であつたら、あるいはその美味しい御馳走と暖い炬燵だと安楽な眠りへと誘われて止つたかも知れません。が、しかしパトラッシュは、この老いたフランダーズの犬は、遠い昔を忘れてはいませんでした。あのお爺さんと幼い子供とが道ばたの泥溝に息絶つた自分を救い上げ、見守ってくれたその遠い昔を。

外は、吹雪でした。もう十時であつて、ネロの足跡は、大方消えてしまつていたので、匂いを嗅いで足跡を辿つて行くパトラッシュの苦心は実に痛ましいものでした。ようやく見つけ出す、すぐ消えてしまう、また探し出す、また見失う、そんなことを百度以上も繰り返しつつ、パトラッシュは、走り続けました。この一寸先も見えない吹雪の夜を、飢えと寒さによるめきながらパトラッシュは、ただ主人を探し出すという一途な愛に支えられて走り続けて行くのでした。ネロの足跡は、吹雪にかき消されてはいるものの、とにかくまっすぐにアントワープに向つて行くことだけは分ります。パトラッシュがやつとの思いでアントワープの町外れまで辿り着き、それから狭い曲りくねつた道に入つた時は、もう真夜中を過ぎていました。町の中も真つ暗でただどころ戸の隙間から細い明かりが洩れているだけでした。酔っぱらいの歌声がどこかで起つて、そして消えて行きました。しんと静まり返つた中に風だけが街燈の高い鉄柱に突き当たつて、凄まじい響きを立てるのでした。ネロの足跡は、この町に入つてから、大勢の通行人の足跡に交じり合い、踏みにじられて、それを拾つて行くのは、今までよりもっとと困難でした。寒さが骨まで染み通り、足は凍つた角で傷つきました。しかし、パトラッシュは、恐ろしいほどの忍耐を以て、ネロの跡を嗅ぎ求めて行きました。

四二、大寺院の中へと……

こうして、堪えに堪えて、パトラッシュは、ついに愛する主人の足跡を追つて、町の中央の旧教寺院の入口まで辿り着いたのでした。ああ、ここは、一番慕つていたところだ、と、犬は思いました。ネロが芸術というものに憧れている心持は、パトラッシュには分らないながら、何か哀れに悲しく、そして神々しく感じられたのでした。

大寺院の門は、真夜中の集まりが済んだ後、扉が閉じていませんでした。門番が早く帰つて御馳走が食べたかつたか、それとも眠くて鍵をかけ損ねて気づかなかつたのか、何かそんな手抜かりがあつたからでしょう、扉が半分開けたままになつていて、パトラッシュの求める足跡は、そこからでんと白い雪を落して奥へ続いているのでした。そのかすかな白い一すじに導かれて、神々しい静かな堂内のひろびろした円天井の下を通つて、まっすぐに聖堂の入口まで来ると、そこに倒れているネロを見出しました。パトラッシュは、よろめくように駆け寄つて、ぴつたりと顔をすり寄せました、「……あなたを見捨てるような、そんな不忠ものと思わないで——」と言うように。

ネロは、低く叫んで身を起しました。そして、しつかりと犬を抱き締めながら囁きました。「……おお、パトラッシュ、可哀想なパトラッシュ。二人一緒に死のう。世間の人は、もう僕たちには用がないのだ。ここで横になつて死のう。僕たちはたつた二人つきりだ」と、ものの言えないパトラッシュは、答えの代りに、なおもネロの胸にひしとその頭を押しつけました。大粒の涙がその茶色の悲しそうな臉に溜まりました。二人は刺され

るような寒さの中でしつかりと抱き合って横になりました。

四三、月光に照らされた二名画を見て

二人が横たわっている石造建築の広い内部は、野ざらしよりもっと寒さが酷いのでした。その触れるもの一切を凍らせずにはおかないような狂風。——闇の中を時々蝙蝠が飛び回るものでした。ルーベンスの画の下に二人は横たわっていました。あまりの寒さに身体は痺れ、不思議な眠気が襲って来て、二人は次第に気が遠くうっとりとなって行きました。二人の心には過ぎ去った楽しい日のことが浮び出しました。夏の牧場の花の咲き乱れた中を互に追いつ追われつ駆け回ったことや、運河の岸の繁った草の中に座り、静かに滑り行く船を眺め暮らしたことや——。二人は争いというものを知りませんでした。ネロはパトラスシュを愛しみ、パトラスシュはネロを慕い、お互に深く深く愛し合っていました。二人がこの世に生きていたのは短い間でしたが、二人が尽くさねばならない義務は尽くしました。どんな人にも獣にも恨みを持つたことがなく、極めて素直でしたから、決して心に何の咎めることもなく、晴れ晴れしていました。そして今、飢えに衰え果て、血は寒さに凍りクリスマス前夜の夜明かしの愉しさを思い浮べながら、昏々と死んで行こうとするのです。

突然、大きな白い光ががらんとした堂の中に流れ入りました。月でした。いつしか雪は降り止んで、今、雲間を逃れ出た月の光は、二つの名画を照らし出しました。画を包んであった覆いは、少年がここへ入った時にすでに引き裂いてしまったから、この一瞬、「キリストの昇天」と「十字架上のキリスト」の二名画は実にはつきり認め得たのでした。思わずネロは立ち上り、両手を画の方へ差し出しました。感極まった涙がその青ざめた頬に溢れ落ちました。「……見た、ああ僕はとうとう見た」と、少年は叫びました。「……ああ、神様、もうこの上は何にも入りません」と言うのでした。

足の力が尽きて、膝頭でようよう身を支えながら、なおもネロは食い入るように、その崇拜している荘厳な画に見入りました。清らかな月の光は、その憧れの画を隅々まではつきりと示しました。が、これも一瞬にして隠れ、堂内は再び真つ暗な闇が広がりました。画の方に差し出されていたネロの両手は、再び犬のからだを抱きました。「……ああ、神様のお顔が拝めるだろう。——あそこに」と、彼の唇が微かに動きました。「……神様は、私たちをお見捨てにはならない。神様はお慈悲深い——」と言うのでした。

四四、死んだ後で……

夜が明けました。アントワープの町の人々は、この大伽藍の内に、少年と犬とを見い出しました。もう二人とも冷たく息絶えていました。寂しい夜の寒さは、若い命と年老いた命とを一緒に凍らして、静かな永い眠りにつかせたのでした。クリスマスの朝がほのぼのと明けて、坊さんたちがやって来た時には、石のように固く抱き合った少年と犬の亡骸の上に、ルーベンスの名画は覆いをむしり取られて、その偉大なる天才の筆の跡を頭し、清々しい朝の光が神の子の頭に置いた茨の冠を照らしていました。やがて、一人の頑固そうな顔をした老人が、おいおい泣きながらやって来て、「……わしはまあこの子供に何という酷い扱いをしたことだろう。ああすまないすまない。罪滅しをせねばらな

ぬ。わしの聲になるべきはずの子だったのに——」と言うのでした。

また、しばらくすると、その頃、有名な画家がやって来て、集まっている人々に言うのでした。「……本当の値打から言ったら、確かにこの子が選ばれるべきだったのに。あの夕暮の、倒れた樹に腰を下した老樵夫の画。あの画には天才の閃きがあった。未来にはきっと優れた画家になれる児だった。わしは何とかして探し出してみっちり仕込んで、その天才を磨かそうと考えていたものを——」と言うのでした。

また、捲毛の美しい少女は泣き崩れながら、父の腕にすがって声を惜しまず掻き口説くのでした。「……ネロ、いらっしやいよ。支度はみんなできてよ。あなたのために、仮装した子供たちが、めいめい贈り物を手にしているし、笛吹きの爺さんがいま吹き始めるところなの。あなたと私は、このクリスマスの一週間は、ちっとも離れず炬燵で栗を焼いていいんですって。クリスマスの一週間どころかいつまで居たって構わないって。ね、パトラッシュも嬉しいでしょう。早く起きていらっしやいよ、ネロ」と言うのでした。

けれども、偉大なルーベンスの画の方に向けたままのその死顔は、口許にかすかな笑みを浮べたまま、あたりの人々に、「……もう遅い」と答えているかのようでした。

朗らかな鐘の音が鳴り渡り、太陽はうららかに雪の野を照らし、華やかに着飾った人々は往來に群がって喜んでいますが、もはやネロとパトラッシュとは、人の慈悲にすぎる必要はありませんでした。二人が生きている間に一生懸命に求めていたものを、死んで何もいなくなつた今になって、はじめてアントワープの人たちが与えたのです。

生命のある間、離れられなかったこの二人は、死んでからも離れませんでした。少年の腕はどうしても離すことの出来ないほどしっかりと犬を抱き締めていました。

恥じ入って後悔した村の人たちは、二人のために神様が特別のお恵みをお与え下さるよう祈りながら、墓を一つにして、主従抱き合つたまままで葬るのでした。——永遠に——

— (完) —

*

*

「参考文献」

- ※底本 「アリババと四十人の盗賊」 菊池寛訳（「青空文庫」）
- ※底本 「アラジンと魔法のランプ」 菊池寛訳（「青空文庫」）
- ※底本 「シンドバッドの冒険」 菊池寛訳（「青空文庫」）
- ※底本 「美女と野獣」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「フランダースの犬」 菊池寛訳（「青空文庫」）